

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第8集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

VIII

三 城 城 下 跡

2018

長崎県教育委員会

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第8集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

VIII

さんじょうじょうかあと
三城城下跡



卷頭カラー① 調査区遠景写真（北から）

※右奥に見える森は三城城跡。右端はJR大村線。

中央やや上に左（東）から右（西）に流れる大上戸川。



卷頭カラー② 調査区遠景（西から）

大村湾及び西彼杵半島を望む



卷頭カラー③ 完掘状況（左が北）

発刊にあたって

本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴って実施された、大村市三城城下跡の発掘調査報告書です。

三城城下跡は、中世大村氏の時代から大村館を中心とした町立てが行われ、大村純忠の三城城築城後は城下町となった、大村市の歴史を語る上で欠かせない遺跡であります。今回は新幹線路線建設予定地にかかることから、発掘調査を行つたものです。

調査では、江戸時代前期を中心とした200基を越える柱穴が出土し、整然と並ぶ掘立柱建物が建っていたことが分かりました。また、染付や青磁など、初期伊万里の優品も出土し、当時の暮らししぶりがうかがえます。本書を通して、地域の文化財や歴史の一端を知る材料になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を支援していただいた大成エンジニアリング株式会社、株式会社創建、厳しい暑さの中で発掘調査に従事された作業員の方々をはじめ、調査にご協力いただいた近隣住民の皆様、さまざまな形でご支援いただいた大村市教育委員会や独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の皆様など、関係者の皆様に御礼申し上げまして、刊行の挨拶といたします。

平成30年3月

長崎県教育委員会教育長
池 松 誠 二

例　言

1. 本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設（事業主体：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構）に伴って実施した、長崎県大村市乾馬場町905番地5他に所在する三城城下跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が主体となり、三城城下跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体大成エンジニアリング株式会社長崎営業所・株式会社創建の支援を得て行った。調査期間は以下のとおりである。

範囲確認調査　　平成26年7月7日～平成26年8月29日

　　　　　　　　平成27年11月4日～平成27年11月12日

本調査　　平成28年5月25日～平成28年8月26日

整理作業　　平成28年8月29日～平成30年1月25日

なお、調査組織については、本文中に記載した。

3. 遺跡調査番号はSJK201602である。

4. 範囲確認調査にかかる経費は、国庫補助を受けて長崎県が負担した。また、本調査から整理作業及び報告書刊行にかかる経費は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が負担した。

5. 遺構及び土層実測は、中尾篤志・小川慶晴・株式会社大成エンジニアリング・株式会社創建が行った。また、遺構及び土層の写真撮影は中尾・小川が行った。

6. 遺物実測は、中尾・小川・新久保恒和が行い、トレースは小川・新久保・一瀬勇士が行った。また、遺物の写真撮影及び補正、レイアウトは新久保が行った。

7. ピット埋土のフローテーションで検出した炭化種実の同定を、株式会社パレオ・ラボに委託した。

8. 「肥前国彼杵郡之内大村領絵図　元禄十三年辰正月」および「大村館小路割之図(土屋家資料)」の写真掲載にあたり、長崎歴史文化博物館および大村市立史料館の許可を得た。

9. 出土遺物のうち、陶磁器については、野上建紀氏（長崎大学多文化社会学部）、中野雄二氏（波佐見町教育委員会）、田中学氏（長崎市文化観光部文化財課）から指導・助言をいただいた。

10. 本書の執筆者は目次に記した。また、編集は新久保の協力を得て中尾が行った。

11. 本書で用いた座標は、全て世界測地系である。また方位は全て座標北である。

12. 本書に掲載した遺構の縮尺は80分の1、60分の1、40分の1、遺物実測図の縮尺は、陶磁器は3分の1、石器・石製品及び金属器は1分の1、3分の2、2分の1で掲載した。

13. 記録類及び出土遺物は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所で保管している。

14. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

土壙・柵列：SA　掘立柱建物：SB　井戸：SE　土坑：SK　石列：SS　不明遺構：SX

本文目次

※ () 内は執筆者

I. 調査の経過

1. 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要（堀内）	1
(1) 概要 ······	1
(2) 沿革 ······	1
2. 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う発掘調査の経緯（中尾）	
(1) 試掘調査・範囲確認調査の経過 ······	6
(2) 三城城下跡範囲確認調査の概要 ······	6

II. 本調査の成果

1. 概要（中尾）	
(1) 本調査の経緯 ······	13
(2) 調査の方法 ······	13
(3) 整理作業の概要 ······	13
2. 地理的・歴史的環境（新久保）	
(1) 地理的環境 ······	15
(2) 歴史的環境 ······	15
(3) 三城城下周辺での調査履歴 ······	21
3. 調査組織（中尾） ······	22
4. 日誌抄録（発掘調査）（中尾） ······	23
5. 基本土層（中尾） ······	26
6. 遺構と遺物（中尾）	
(1) 土壘・柵列（SA） ······	27
(2) 掘立柱建物（SB） ······	30
(3) 土坑（SK） ······	55
(4) その他ピット・土坑 ······	55
(5) 井戸（SE） ······	61
(6) 石列（SS） ······	73
(7) 不明遺構（SX） ······	77
7. 自然科学分析（佐々木由香・パンダリ・スダルシャン）	
(1) 三城城下跡から出土した炭化種実 ······	86

III.まとめ

1. 遺構群の変遷と性格（中尾）	
(1) 遺構群の変遷 ······	92
(2) 建物構造の特徴 ······	94
2. 出出土師器の検討（中尾）	
(1) 分類 ······	97
(2) 大きさ ······	97
(3) 出土状況 ······	97
(4) 若干の検討 ······	100

挿図目次

第1図	九州新幹線西九州ルート概要図	2
第2図	範囲確認調査対象地位置図	5
第3図	範囲確認調査坑配置図	7
第4図	範囲確認調査調査坑平面図及び土層実測図①	8
第5図	範囲確認調査調査坑平面図及び土層実測図②	9
第6図	範囲確認調査調査坑平面図及び土層実測図③	10
第7図	平成27年度TP4出土遺物	12
第8図	グリット配置図	14
第9図	遺跡位置図	16
第10図	周辺遺跡位置図	17
第11図	三城城下跡周辺主要調査箇所位置図	20
第12図	土層実測図①	24
第13図	土層実測図②	25
第14図	遺構配置図(全体)	28
第15図	A区遺構配置図	29
第16図	B区遺構配置図	30
第17図	C区遺構配置図	31
第18図	A区SA01遺構実測図	32
第19図	A区SA02・SB09遺構実測図	33
第20図	B区SA03・SA04・SA05・SA06遺構実測図	34
第21図	B区SA05出土遺物実測図	35
第22図	A区SB01遺構実測図	36
第23図	A区SB01柱穴遺構実測図	37
第24図	A区SB01出土遺物実測図	38
第25図	C区SB02遺構実測図	39
第26図	C区SB02出土遺物実測図	40
第27図	C区SB03遺構実測図	41
第28図	C区SB03出土遺物実測図①	43
第29図	C区SB03出土遺物実測図②	44
第30図	C区SB04遺構実測図①	46
第31図	C区SB04遺構実測図②	47
第32図	C区SB04出土遺物実測図	47
第33図	C区SB05遺構実測図	48
第34図	C区SB05出土遺物実測図	48
第35図	A区SB06遺構実測図	49
第36図	A区SB06出土遺物実測図	50
第37図	C区SB07遺構実測図①	51
第38図	C区SB07遺構実測図②	52
第39図	C区SB07出土遺物実測図	53
第40図	C区SB08遺構実測図	54

第41図	C区 SK12 遺構実測図	56
第42図	C区 SK12 出土遺物実測図	56
第43図	ピット (SP)・土坑 (SK) 実測図	57
第44図	ピット (SP) 出土遺物実測図	58
第45図	A区 SB01 遺構実測図	63
第46図	A区 SB01 出土遺物実測図①	64
第47図	A区 SB01 出土遺物実測図②	65
第48図	A区 SB01 出土遺物実測図③	66
第49図	A区 SB01 出土遺物実測図④	67
第50図	A区 SB01 出土遺物実測図⑤	69
第51図	A区 SB01 出土遺物実測図⑥	70
第52図	B区 SS01・SX08 遺構実測図	74
第53図	B区 SS01 出土遺物実測図	75
第54図	B区 SX08 出土遺物実測図	75
第55図	B区 SX01 出土遺物実測図	76
第56図	B区 SX07 遺構実測図	76
第57図	B区 SX07 出土遺物実測図①	78
第58図	B区 SX07 出土遺物実測図②	79
第59図	B区 SX07 出土遺物実測図③	80
第60図	B区 SX09 遺構実測図	82
第61図	C区 SK10 出土遺物実測図	83
第62図	包含層出土遺物実測図	84
第63図	遺構群の変遷	93
第64図	土師器計測値グラフ	98
第65図	16世紀後半の土師器実測図	98
第66図	玖島城跡出土土師器実測図	99

図版目次

図版1	範囲確認調査状況写真	11
図版2	調査状況写真	23
図版3	土層写真	26
図版4	A区 SA05 出土遺物	35
図版5	A区 SB01 出土遺物	38
図版6	C区 SB02 出土遺物	40
図版7	C区 SB03 遺構写真	42
図版8	C区 SB03 出土遺物	43
図版9	C区 SB04 出土遺物	47
図版10	C区 SB07 柱穴写真	53
図版11	C区 SK12 出土遺物	56
図版12	ピット (SP) 出土遺物	58
図版13	A区 SB01 出土遺物①	68
図版14	A区 SB01 出土遺物②	71
図版15	B区 SS01 出土遺物	75
図版16	B区 SX08 出土遺物	75

図版 17	B 区 SX07 出土遺物	81
図版 18	包含層出土遺物	85
図版 19	三城城下跡から出土した炭化種実	91
図版 20	「大村館小路剣之図（土屋家資料）」写真	95
図版 21	「肥前国彼杵郡之内大村領絵図元禄十三年辰正月」写真	96
図版 22	三城城下跡出土土師器壺の二者	98

表目次

第1表	範囲確認調査出土遺物観察表	12
第2表	周辺遺跡一覧表	18
第3表	三城城下跡周辺主要調査履歴一覧	21
第4表	SA05 出土遺物観察表	35
第5表	SB01 出土遺物観察表	38
第6表	SB02 出土遺物観察表	40
第7表	SB03 出土遺物観察表	44
第8表	SB04 出土遺物観察表	47
第9表	SB05 出土遺物観察表	48
第10表	SB06 出土遺物観察表	50
第11表	SB07 出土遺物観察表	53
第12表	土壙・柵列（SA）、掘立柱建物（SB）観察表	55
第13表	SK12 出土遺物観察表	56
第14表	ピット（SP）出土遺物観察表	58
第15表	ピット（SP）・土坑（SK）観察表①	59
第16表	ピット（SP）・土坑（SK）観察表②	60
第17表	SE01 出土土器観察表	72
第18表	SE01 出土瓦・石製品・金属器観察表	73
第19表	SS01 出土遺物観察表	75
第20表	SX08 出土遺物観察表	75
第21表	SX01 出土遺物観察表	76
第22表	SX07 出土遺物観察表	81
第23表	SX10 出土遺物観察表	83
第24表	包含層出土遺物観察表	85
第25表	三城城下跡から出土した炭化種実（1）	87
第26表	三城城下跡から出土した炭化種実（2）	87
第27表	ササゲ属アズキ亞属炭化種子の大きさ	89
第28表	大村氏略年表（16世紀後半～17世紀前半）	95

I 調査の経過

1 調査に至る経緯

(1) 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要

①概要

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）は、福岡市と鹿児島市ならびに長崎市を結ぶ整備新幹線計画（九州新幹線）のうち、福岡市と長崎市を結ぶルートを指す。整備新幹線としては佐賀県内を含めた区間が含まれるが、詳細なルート案は未定であり、未着工である。

現在の計画としては、博多駅～新島栖駅間（約26Km）は鹿児島ルートと路線を共有し、新島栖駅～武雄温泉駅間（約51Km）は在来線を活用する。武雄温泉駅～長崎間（約66Km）はフル規格の新線である。使用車両として、車輪の幅を走行中に変更できるフリーゲージトレインを導入する計画だったが、フリーゲージトレインの開発が遅れ、2022年度までの量産化が間に合わないことから、博多駅～武雄温泉駅間の在来線と武雄温泉駅～長崎駅間の新幹線を武雄温泉駅で乗り継ぐ「リレー方式」で2022年度内に暫定開業することとなった。現在の在来線特急「かもめ」と比べて、乗り継ぎ時間を受け、30～45分程度の時間短縮が図られる。

既に開業した整備新幹線区間の場合と同じく、上下分離方式を取る。建設主体は鉄道建設・運輸施設整備支援機構（鉄道・運輸機構）である。平成8年（1996）に決定した新スキームに従い、開業後も鉄道・運輸機構が駅・路線・車両基地などの設備を保有して、受益額の限度内で営業主体の九州旅客鉄道（JR九州）から貸付料の支払いを受ける制度である。不足する工事費用については3分の2を国が、3分の1を沿線自治体（県・市町村）が負担する。国負担分には既設新幹線（東海道・山陽・東北・上越）の設備を旧新幹線保有機構からJR各社へ譲渡した支払い額が含まれ、沿線自治体の起債には地方交付税交付金による補助が行われる。

車両基地は長崎県大村市の竹松町・沖田町付近に建設され、県内駅は長崎、諫早、新大村（仮称）である。車両基地予定地は竹松遺跡と重なり、ほとんどの範囲が埋蔵文化財調査対象となつた。平成23年度は長崎県埋蔵文化財センターが発掘調査主体となり、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が平成24年度（2012）から28年度（2016）にかけては約10万m³（路線部分を含む）の調査を行い、平成28年度から発掘調査報告書の刊行を継続して実施している。

②沿革

整備新幹線とは昭和45年（1970）に成立した全国新幹線鉄道整備法に基づいて、国鉄民営化後に施工・開業された路線を指す。昭和39年（1964）開業の東海道新幹線に次いで、1970年代初頭までに着工した山陽・東北（東京～盛岡）・上越新幹線は含まれない。

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）、いわゆる長崎新幹線は、昭和47年7月（1972）に「建設を開始すべき新幹線鉄道の路線を定める基本計画」（基本計画新幹線）に北海道・北陸・九州新幹線（鹿児島ルート）から半年遅れて追加され、昭和48年11月13日（1973）に整備計画が決定した。しかし東北・上越新幹線の高騰する工事費と首都圏の線増工事に伴う大投資、ヤード方式の貨物輸送の赤字、過剰人員や人件費の高騰や国会認可の運賃値上げ抑制などの理由から国鉄財政が悪化の一途をたどる中で、新幹線建設と地方ローカル線運行の赤字、労使対立が社会問題化し、国鉄分割民営化まで新幹線の新規着工は見送られることとなった。

九州新幹線西九州ルート (長崎ルート)概要図 (平成34年度暫定開業時)



第1図 九州新幹線西九州ルート概要図（長崎市HPより）

整備計画が決定した後も、九州新幹線長崎ルートの詳細なルート案は未定の面が大きかった。昭和60年（1985）に、開業時の長崎本線のルートに準じた早岐周囲のルート案が公表されたものの、長崎までの距離が遠回りになることの費用対効果の分析や、JR九州が事業者となる時の採算性の問題が浮上した。国鉄の経営の失敗に鑑み、運営主体となるJR各社の同意なしに着工させないとの整備新幹線の合意形成システムを前提としていたためである。平成4年11月（1992）に武雄温泉から東彼杵町方面へ短絡する新ルート案を長崎県・佐賀県の地元案として提示した。長崎自動車道や古代官道ルートに准じたものである。

輸送量が大きく、採算性の高い区間から整備新幹線の着工が行われた結果、未着工の区間についても、開業した後の採算性が問題となつた。平成8年12月（1996）にJRが建設費用を負担する範囲を定率ではなく、新幹線が開業した後と在来線時代の利益の差による受益額の範囲に限る建設費負担の新スキームが決定し、未着工区間の着工が進んだ。長崎ルートについては、新幹線の通らない肥前山口～肥前鹿島～諫早駅間の第三セクター鉄道への移管に際して利害の対立する沿線自治体の慎重論が障壁となつた。が、平成19年（2007）12月に新幹線開業後も20年はJR九州が上下分離方式で営業を継続することでJR九州・佐賀県・長崎県が三者合意し、翌年3月の国土交通省の工事認可、4月の着工に至ることとなつた。工事は、工期のかかる長大トンネル区間から優先して進められた。

この段階では、在来線区間に挟まれた武雄温泉～諫早駅間については新幹線（軌間1435mm）の線形の元に在来線（軌間1067mm）の線路を敷設し、160km以上の高速で走行するスーパー特急方式による運行が前提であった。しかし長崎駅までの区間を含む長崎県内の着工が問題となる中で、新幹線と在来線区間を直通運行できる軌間可変電車（フリーゲージトレイン）への期待がスペイン（カタランダルゴ・Alvia S120系）での成功事例の参照もあって高まつた。

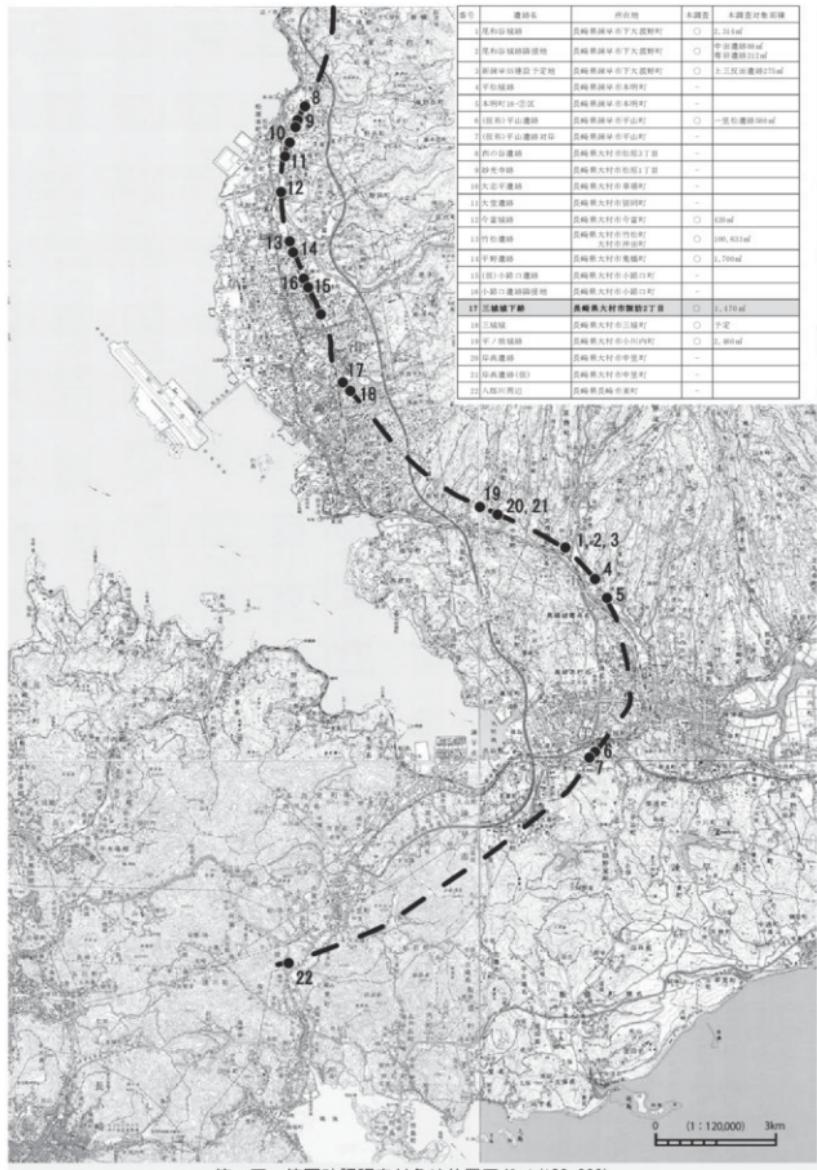
スペイン・ポルトガルの鉄道は1648mmの広軌であるため、標準軌1435mmを持つ隣国フランスの鉄道との直通運転が不可能であった。1968年に車輪幅を走行中に変更できるTalgo III -RD客車が独自の1軸台車接続方式の国内特急Talgo車両を改良して登場し、国境での乗り換えが不要な国際直通運転が実現した。軌間可変構造のタルゴ客車は後に最高200kmにまで高速化される。更に2006年には日本の軌間可変電車のモデルたるべき4両編成の電車方式の高速列車S120系が実用化された。最高速度250kmを誇る。マドリッド・バルセロナの2大都市を結ぶAVE高速新線が2003年（マドリッド～リヤイダ）・2006年（リヤイダ～タラゴーナ）の段階的な部分開業を経て2008年7月に全線開業に至る中間段階で、同区間に暫定的に投入されたのが最初である。欧州各国との共通規格を見据えて標準軌を採用した高速新線と広軌の在来線を直通し、中間駅での乗り換え抵抗を打破するためである。輸送力の大きなタルゴ方式のS103系が追って投入され、2008年バルセロナまでAVEフル規格新線が全通すると、輸送量の少ない地方都市間の路線に転用され、部分開通が重なる高速新線と在来線を自在に行き来し、全国各地の移動時間の短縮に大きく貢献している。「コンクリートから人へ」を唱える民主党による平成21年（2009）の政権交代により整備新幹線計画や高速道路整備計画は大きく再検討されることとなり、未着工区間の着工優先順位や費用対効果の高い方法への模索などの検討が総合的に行われることとなつた。

平成23年10月（2011）に国土交通省が設置した鉄道技術の専門家による軌間可変技術評価委

員会により、フリーゲージトレインの基本的な走行可能性に関する技術が確立しているとの評価が下された。それを踏まえ、翌11月に整備新幹線問題検討会議（国土交通省政務三役・財務大臣政務官・総務大臣政務官）で未着工区間の諫早～長崎駅間を武雄温泉～諫早駅間を一体的な区間として標準軌によるフル規格路線として整備し、軌間可変電車（フリーゲージトレイン）を導入するとの方針が示された。武雄温泉駅に設けられた軌間変更設備を用いて車輪幅替え、武雄温泉～新島栖駅間は在来線（複線化された長崎本線・佐世保線）を走行し、新島栖からは既に開業している九州新幹線鹿児島ルートに再び車輪幅を変えて乗り入れ、博多から山陽新幹線に直通することで、整備新幹線建設に伴う費用対効果を高める。平成24年6月（2012）に国土交通大臣が鉄道運輸機構に対して武雄温泉～長崎駅の全区間のフル規格での着工認可が行われた。十年後の平成34年度（2022）の開業が予定される。列車運行が増大するJR佐世保線の肥前山口～武雄温泉間については複線化工事が行われる。

平成26年10月以降にフリーゲージトレイン（3次試験車両）の台車部の高速走行時の摩滅などが問題化し、安定した営業運転が可能な技術開発が2022年度の開業に間に合わないことが明らかとなった。平成28年3月に与党検討委員会や沿線自治体など6者は、武雄温泉駅で在来線と新幹線区間を乗り換えるリレー方式で新幹線を暫定開業させることで合意した。新島栖における新在接続の軌間変更設備と連絡線については建設が保留され、博多～長崎間で二度の乗り換えを回避するため、在来線特急は博多～武雄温泉間を直通運転することとなった。

（長崎県教委編2017『今富城跡』再掲）



2. 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う発掘調査の経緯

（1） 試掘調査・範囲確認調査の経過

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に先立ち、長崎県教育庁学芸文化課は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構および該当市教育委員会文化財担当課とともに、平成21年10月26日から30日にかけ、大村市・諫早市・東彼杵町における九州新幹線西九州ルート建設工事に係る遺跡の分布調査を実施した。その結果、当該地域において、路線部・車両基地等の範囲内の26地点で発掘調査が必要であることが確認された。

その結果を基に再度協議・検討を重ね、平成22年度の尾和谷城跡の試掘調査を皮切りに該当遺跡22箇所の試掘調査並びに範囲確認調査を開始した（第2図）。

（2） 三城城下跡範囲確認調査の概要

① 調査の経緯

三城城下跡は大村市乾馬場町から諫訪2丁目にかけて所在する。周知の埋蔵文化財包蔵地で、宅地開発等に伴う大村市の調査により、大村館跡を中心とした中世の遺跡であることが判明している。新幹線の路線建設予定地となっていたが、周辺は住宅密集地であるため、範囲確認調査は土地や建物の公有化が済んだ場所から順次行うこととし、平成26年度と平成27年度の2回に分けて実施した。調査期間は、それぞれ平成26年7月7日～同年8月29日、平成27年11月4日～同年11月12日である。調査担当は、平成26年度は新幹線文化財調査事務所の中尾篤志・本田秀樹、平成27年度は村川逸朗・川崎敏則である。

調査坑は、路線予定地の長さ約400m、幅12mの範囲内に、2m×2m基本として、地形や遺構に応じて2m×3m、2m×5mを併用しながら、合計22箇所設定し、面積140m²の調査を行った。（第3図）。調査は人力で行い、基盤層である扇状地疊層まで掘り下げた。

② 土層（第4図～第6図・図版1）

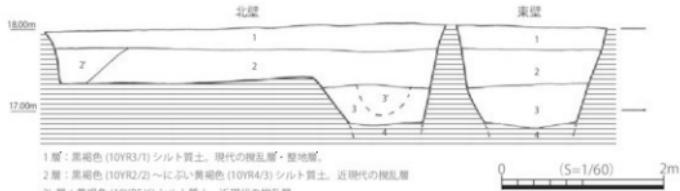
調査坑の堆積状況は、地点によって大きく異なっていた。路線予定地の北部にあたる平成26年度TP1～TP4、平成27年度TP6～TP14は、宅地開発等に伴う近現代の擾乱層や整地層が厚く堆積していた。

南部にあたる平成26年度TP5～TP9、平成27年度TP1～TP5では、一部近現代の擾乱はあるものの、安定した土層堆積が確認できた。基本土層は、1層表土層の下に2層灰黄褐色～暗褐色シルト質土が20～30cm堆積し、中世から近世の包含層である。3層は黄褐色粘質土で、この上面が遺構検出面となる。4層は黄褐色疊層で、基盤をなす扇状地疊層と考えられる。

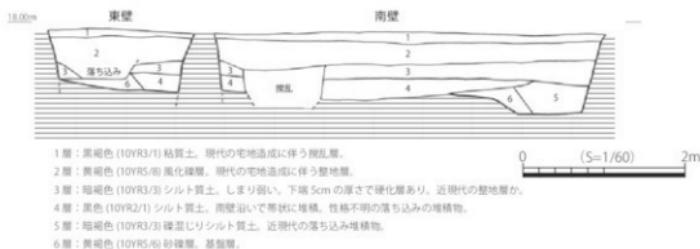
③ 遺構（第4図～第6図・図版1）

路線予定地北部の平成26年度TP3では、近代以降の根固め石状の集石遺構3基を確認しているが、中世以前の遺構は見られなかった。土層の堆積が安定した南部では、平成26年度TP7～TP9、平成27年度TP3・TP4で中世とみられる遺構を検出した。

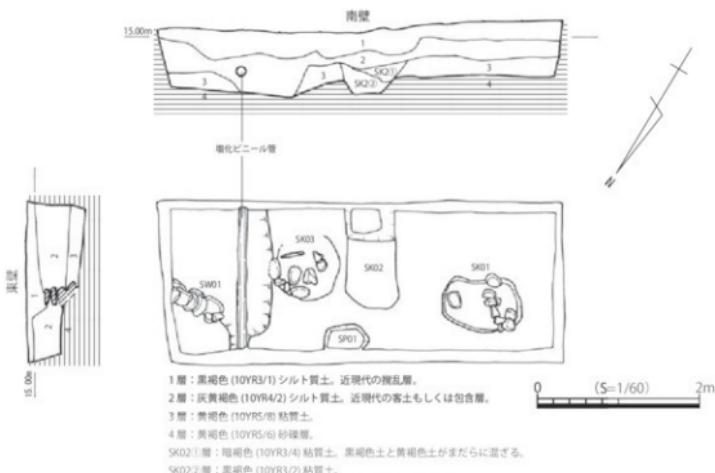




平成 26 年度 TP2 土層図 (S=1/60)

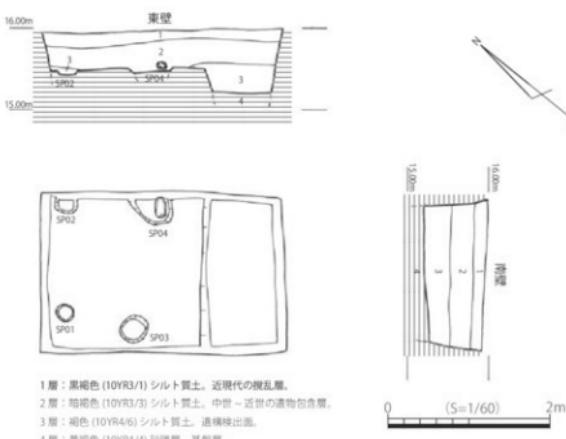
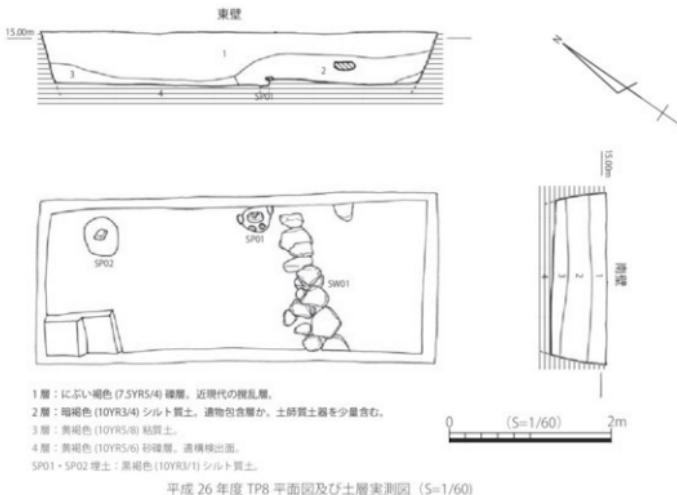


平成 26 年度 TP3 土層図 (S=1/60)

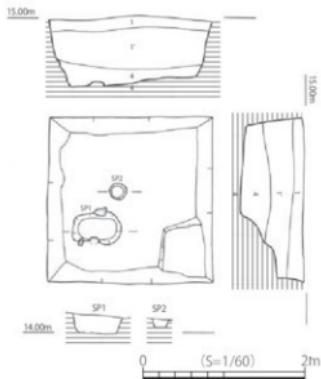


平成 26 年度 TP7 平面図及び土層実測図 (S=1/60)

第 4 図 範囲確認調査調査坑平面図及び土層実測図①(S=1/60)



第 5 図 範囲確認調査調査坑平面図及び土層実測図②(S=1/60)



1 層：表土

1' 層：暗灰黄色土。焼土粒や炭化物を 2~3% 含む。

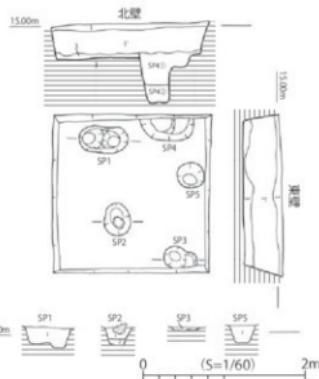
土質は表土と同じ。

4 層：砂砾粗砂に直徑 40cm 大までの円礫が 40% 含まれる。

SP1 埋土：黒褐色 (10YR3/2) 砂質土。直徑 15cm までの礫が 30% 混じる。ややしまりと粘性を有する。

SP2 埋土：黒褐色 (10YR3/2) 砂質土。砂礫 40%、直徑 7cm までの礫が 15% 混じる。よく締まる。粘性なし。

平成 27 年度 TP3 平面図及び土層実測図 (S=1/60)



1 層：表土

1' 層：暗灰黄色土。焼土粒や炭化物を 2~3% 含む。土質は表土と同じ。

3 層：黄褐色 (2.5Y5/6) 粘質土。粘性大。直徑 3cm 大までの円礫を 20% 含む。

SP1 埋土：暗褐色 (10YR3/3) 砂質土。滑石製品・土師器片・瓦質土器片 出土。

SP2 埋土：① 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土。

② 黑褐色 (10YR2/3) 砂質硬化土。磁器片 1 点、赤色土師器片 1 点出土。

SP3 埋土：黒褐色 (10YR2/3) 砂質土。

SP4 埋土：① 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土。土師器片・瓦質土器片出土。
② 黑褐色 (10YR2/3) 砂質土。

平成 27 年度 TP4 平面図及び土層実測図 (S=1/60)



平成 26 年度 TP2 北壁土層 (南から)



平成 26 年度 TP3 2 層近現代集石遺構検出状況 (東から)

第 6 図 範囲確認調査調査坑平面図及び土層実測図③(S=1/60)



平成 26 年度 TP7 造模検出状況(西から)



平成 26 年度 TP8 石積検出状況(南から)



平成 26 年度 TP9 完掘状況(南から)



平成 26 年度 TP8 作業風景(北から)

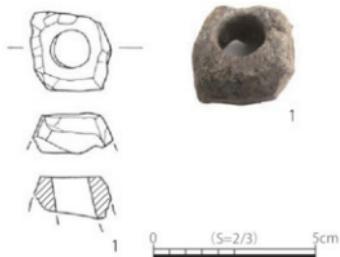


平成 27 年度 TP3 ピット半裁状況(北から)



平成 27 年度 TP4 完掘状況(南から)

図版 1 範囲確認調査状況写真



第7図 平成27年度TP4出土遺物(S=2/3)

第1表 範囲確認調査出土遺物観察表

図版 番号	器種	出土地区	層位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
第7図1	滑石製工品	H27-TP4	1層	滑石	25.0	25.0	13.0	9.3	石織輪用品か。

平成26年度TP7では、4層上面で土坑3基、ピット1基を確認した（第4図）。SK03は、直径70cmほどの円形土坑で、板状の石材が3枚斜めに刺さった状態で検出している。平成26年度TP8では、4層上面でピット2基、2層中で石積み1基を検出した（第5図）。石積みは平坦な円礫を積んだもので、現状で3段残る。平成26年度TP9では、3層上面でピット3基を確認した（第5図）。遺物は土師質土器、青磁、白磁の小片が少量出土している。

平成27年度TP3からは、4層から掘り込まれたピットを2基検出した（第6図）。また、平成27年度TP4ではピット5基を確認した（第6図）。平成27年度の調査では、TP3を除くすべての調査坑から小片ではあるが中世の遺物が出土しており、これらのピット群も同時期のものと考えられる。

④遺物

遺物は、平成26年度TP7の2層から明青花や土師質土器の皿が、同じくTP7のSK01から土師質土器の碗底が出土した。また、平成26年度TP8の石積み周辺では、土師質土器のほか白磁や青磁の小片が出土している。平成27年度TP4のSP4からは、滑石製有孔石製品が出土した（第7図）。周囲を横位の削りによってほぼ方形に成形し、直径1.2cmの穴がやや斜めに穿たれている。良質の滑石を使用していることや、一部赤変が認められることから、滑石製石鍋片の転用品と考えられる。

⑤まとめ

範囲確認調査の結果、路線建設予定地の南側の1,470m²については、中世の遺構が残っている可能性が高いと推測される（第3図）。このため、これらの範囲については、事業者との調整が必要であると判断した。

II 本調査の成果

1 概要

(1) 本調査の経緯

範囲確認調査結果を受けて、事業者である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構との協議を行った結果、新幹線の路線建設予定地のうち、範囲確認調査で遺構が出土した平成 26 年度 TP7～TP9、及び平成 27 年度 TP3・TP4 を中心とした 1,470 m²については、記録保存が必要であるとの結論に至った（第3図）。その後、発掘調査費の積算や調査日数の算出、発掘調査と近隣の工事との日程調整を行い、最終的に平成 28 年 5 月 25 日～同年 8 月 26 日にかけて本調査を実施した。

(2) 調査の方法（第 8 図）

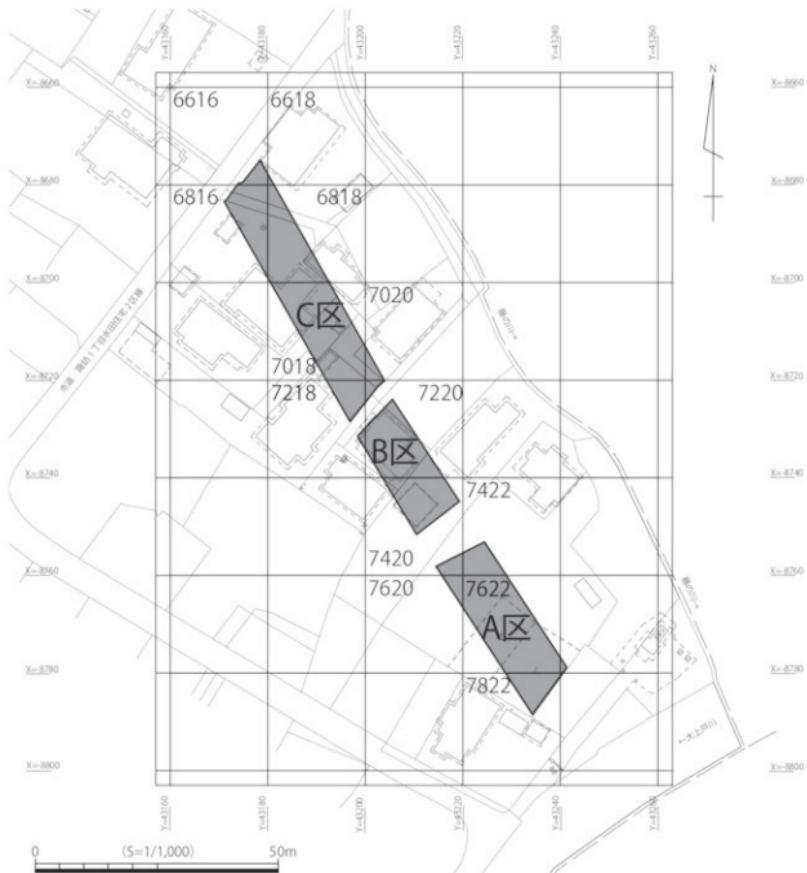
まず、調査区の設定を行った。調査範囲は全体で南北約 120m、東西約 12m の南北に細長い範囲であったが、東西に伸びる市道や住宅への進入路を境に 3箇所に細分し、南から A 区・B 区・C 区とした。次に、各調査区の表土や搅乱部分の掘削を重機に行い、その後先行トレーナーの掘削を人力にて行った。先行トレーナーは、各査区とも東壁沿いに設定し、A 区及び C 区ではグリット軸に沿って東西トレーナーを併せて設定して、遺構及び土層の確認に努めた。

人力掘削は、範囲確認調査で遺物が出土した包含層や遺構検出、遺構掘削を対象に行った。ピットや土坑を中心とした遺構群については、大型のものはできる限り半截し、土層断面の観察と写真撮影・実測を行った。遺構から出土した遺物についても、できる限り写真撮影を行い、位置情報を記録して取り上げた。また、国土座標に則って 20m 四方のグリッドを設定し、グリッド北西隅の座標の X・Y の百の位、十の位の数字を組み合わせて、4 枚のグリッド番号を付し、土層観察用ベルトの設定や包含層出土遺物の取り上げの際に利用した。

このほか、遺構構築時の植生環境や生業等を復元する目的で、一部柱穴を対象に半截分の埋土をサンプリングし、フローテーションによる植物遺存体の検出を試みた。

(3) 整理作業の概要

調査終了後、速やかに遺物の洗浄を行った後、遺構出土遺物を中心に重要遺物の抜き出しや分類を行い、平成 28 年 12 月までに遺物 ID 付与作業及びナンバリング作業を終了した。また、平成 29 年 3 月にかけて遺物実測を行い、同年 7 月までに遺物トレースを終了。同年 11 月～平成 30 年 1 月にかけて、遺構図や土層図のトレース及び原稿執筆、全体のとりまとめを行った。



第8図 グリット配置図 (S=1/1,000)

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境（第9図）

大村市は長崎県本土部の中央に位置し、南に諫早市、北に東彼杵町、東に多良山系と接する。市の西側は大村湾に面し、東側には経ヶ岳（1075.3m）を最高峰に多良岳（982.7m）、中岳（1000m）、五家原岳（1057.3m）などの1000m級の山々で構成された多良山系が連なる。この多良山系を源として大村湾に注ぐ市内最大の2級河川である郡川と、市の南半部を流れる大上戸川の堆積作用によって、東西約2.5km、南北6kmの広がりを持つ県内最大の河成扇状地である大村扇状地が形成されている。

三城城下跡は、大上戸川中流域右岸の大村扇状地南端に位置し、標高7m～18mである。大村市杭田津から諫訪1丁目にかけて、長軸約1.4km、短軸長約0.6kmの範囲に広がる三城城下跡は、中世期において大村氏の居館であった大村館を中心とした館町が起源とされる。1541年頃の様子を描いた絵図『大村館小路割之図』に描かれている街区は近世以降も踏襲され、現在においても街区や生活道路として活用されている。

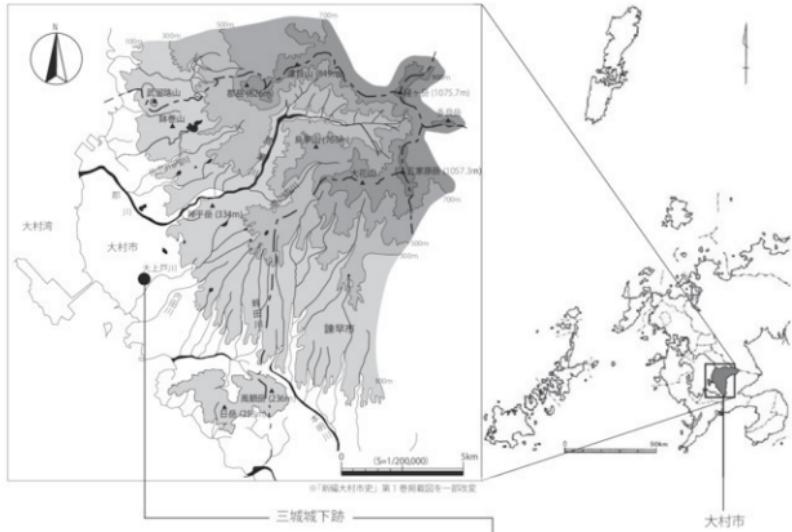
今回の調査区は、三城城下跡の中でも北東部に位置している。近年、都市計画道路建設に伴う商業施設の進出などにより利便性が高まり、住宅造成などの開発件数が大幅に増加している地域である。今回の調査区は、新幹線の線路施設予定地の南北約120m、東西約12mの細長い範囲であり、周辺は住宅地が隣接する。また調査区南端は大上戸川に面しており、川を挟んで南側の丘陵上には、三城城跡を望む位置関係となっている。

(2) 歴史的環境（第10図・第2表）

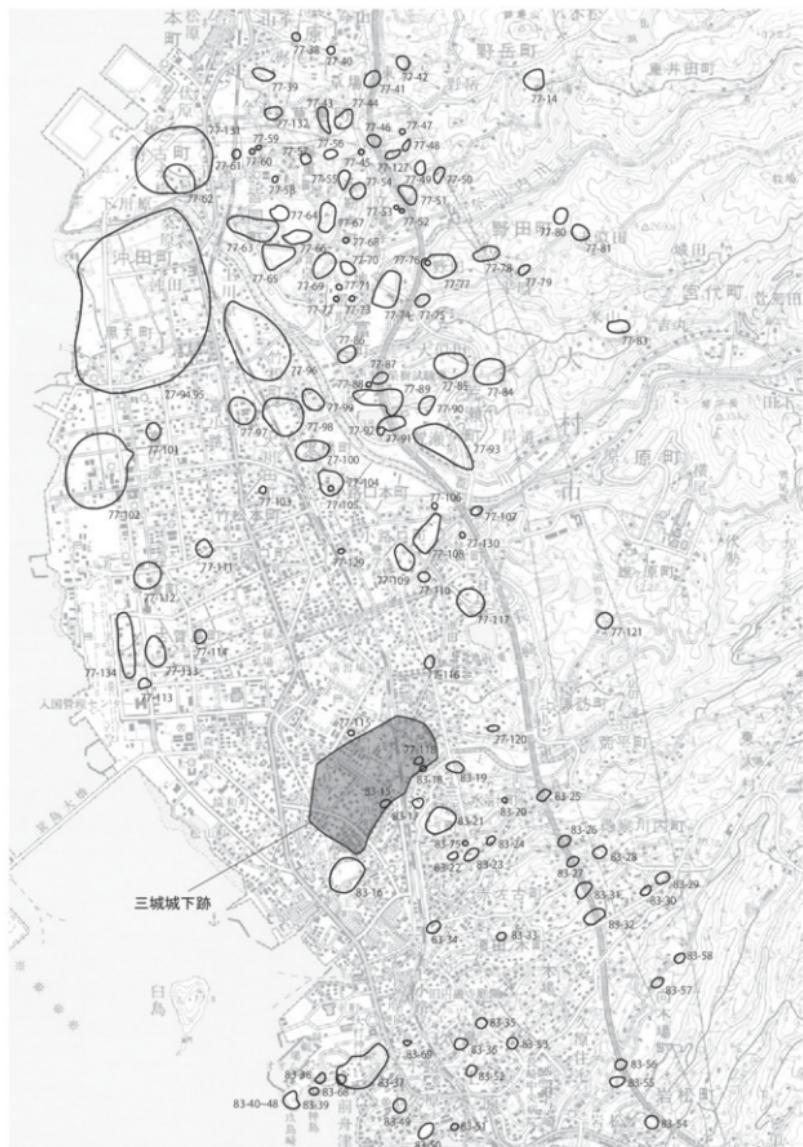
大村扇状地では、旧石器時代の良好な遺跡はみつかっていない。富の原遺跡でAT火山灰の堆積が確認されているものの遺物は未確認で、多良岳から延びる火山麓扇状地周辺でナイフ形石器や細石刃核などが確認されている。

縄文時代になると、早期中葉の押型土器までは旧石器時代と同様の立地であるが、早期末の塞ノ神式～条痕土器の段階には沿岸部へ進出したよう、この時期の低湿地型貯蔵穴が玖島城跡で検出されている。前期から後期にかけては遺跡分布がやや低調になるものの、後期末から晩期になると、大村扇状地で大規模な遺跡が見られるようになる。代表的な遺跡としては黒丸遺跡がある。この遺跡は縄文時代後期初頭には形成されるが、後期末から晩期を経て弥生時代早期にかけて規模が拡大し、埋甕や低湿地貯蔵穴などが検出されている。また、石製土掘具が大量に出土し、初期農耕の様相が窺うことができる。最近では、隣接する竹松遺跡で晩期前半の堅穴状遺構や埋甕が見つかり、この時期の扇状地での活発な活動が見て取れる。

弥生時代には、中期から後期にかけて大村扇状地に大規模な遺跡が出現する。富の原遺跡は、弥生時代中期を中心とする環濠集落で、堅穴建物や掘立柱建物のほか、甕棺墓・石棺墓で構成される墓域も確認されている。甕棺墓からは鉄戈が出土し、この時期の首長墓と考えられる。また、近隣の竹松遺跡では、近年の調査で弥生時代後期の堅穴建物群や石棺墓群が見つかっていて、引き続き郡川一帯に拠点集落が展開する。



第9図 遺跡位置図



第10図 周辺遺跡位置図(S=1/40,000)

『長崎県遺跡地図』「武留路山」「大村」を基に作成

古墳時代には、冷泉遺跡や稗田遺跡で3～4世紀の竪穴建物が検出されているほか、最近では竹松遺跡で3世紀代の円墳が見つかっている。また、周辺の火山麓扇状地には、5世紀の黄金山古墳、6世紀の鬼の穴古墳、石走古墳、琴平神社古墳といった古墳群が離起的に築造されている。

古代には、郡川下流域に沖田条里、大上戸川下流域に大上戸川条里的地割が残る。また、最近の竹松遺跡の調査で、石帶や陶硯、櫛などが出土地から、遺構は未確認ではあるものの、郡川下流域に彼杵郡の郡家、大上戸川下流域に駅家を想定する見解がある。

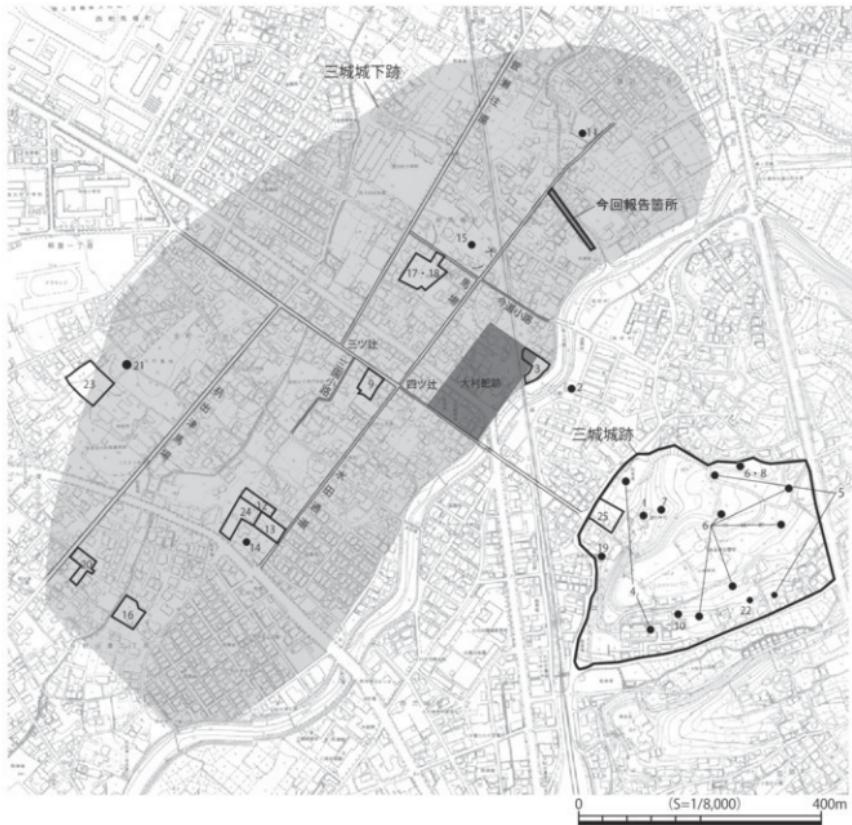
中世には摂関家領莊園の彼杵荘となるが、竹松遺跡では11世紀後半の倉庫群と考えられる掘立柱建物群や、12～13世紀の南北100mの方形区画が伴う居館も見つかっていて、彼杵荘の拠点であつたと考えられる。

一方、大上戸川流域では、三城城下跡の発掘調査で12～13世紀の陶磁器類がわずかに出土するものの、遺構は不明瞭である。石塔類の分布から、三城城一帯に15世紀前半から有力者の墓があつたことが明らかで、また、14世紀後半から16世紀にかけては13寺2社の存在が文献で知られる。このうち、宝生寺は永和元年（1375）には西大寺末寺となっており、中央の仏教文化が何らかの形でこの地にもたらされたと考えられる。また、貞治5年（1366）から至徳2年（1385）にかけて、大上戸川畔の富松宮社周辺で大般若経の写経が行われ、このときの大般若経の一部が佐賀県相知町の医王寺に所蔵されている。

近世大村氏の系譜は、佐賀藩藤津郡を本貫とする惣家が、鎌倉時代から戦国時代の間に彼杵郡に移動したとする説が有力である。大村氏の居館であった大村館は、「大村記」には大村純治が初めて居住したとあり、1400年代後半には存在したと思われる。同じく「大村記」には、大村純前の時代に「大村川端家造り仕、小路町室を立て、親類中軒をならべ住居也」とあり、大永5年（1525）にはこの大村館を中心町が形成された。しかし、同記録によると、天文3年（1534）9月4日に大村館からの出火により焼失したという。大村館町を描いた「大村館小路割之図」は、焼失後の天文10年代（1541～1551）に描かれたもので、復興した大村館をはじめ、家臣団を中心とした36屋敷と11寺院の位置が詳細に記されている。これによれば、今回の調査区には「千乘院」「萬乗院」という寺院が存在したことが分かる（図版20）。

1564年に純忠が三城城を築き主城としたことで、かつての大村館を中心とする町館は城下町へと変容していく。永禄6（1563）年に純忠がキリスト教に入信すると、城下にキリスト教施設が建てられた。その初例となるのが、永禄11（1568）年に完成した「御やどりの教会」である。また、1570年10月15日付ルイス＝デ＝アルメイダ書簡により、三城城内にも教会があったことが分かる。元龟3年（1572）7月後藤貴明・松浦隆信・西郷純曉の連合軍による大村攻めに勝利し（三城七騎龍）、大村純忠の領主権が確立したが、この際に「御やどりの教会」は焼失した。その後、天正2（1574）年にキリスト教により徹底的に社寺の破壊が行われ、1585年には領内に87もの教会が建った。併せて改宗が本格化し、約6万人がキリスト教となつた。しかし、天正8（1580）年佐賀の龍造寺氏に敗れ、三城城からの退去により実質的に領主権を失う。その後龍造寺隆信の戦死によって領主権を回復したものの、天正15（1587）年に病により純忠は坂口館にて没した。

純忠の死後は嫡子である喜前が家督を相続した。慶長3年（1598）12月、喜前は三城城に代わる



第11図 三城城下跡周辺主要調査箇所位置図 ($S=1/8,000$)

新たな居城の築城を開始した。当時は大上戸川河口の砦を利用したがすぐに断念し、翌年にはやや南下した位置に玖島城を築くとともに、五小路を設けて家臣団の居住区とし、内田川右岸には大村宿を中心とした商業地を設定した。

当初喜前はキリスト教に寛容であったが、慶長7(1602)年にキリスト教を棄教し、慶長11(1606)年には大村領内の宣教師を追放する一方、キリスト教政策として教会の破却とキリストの焼き討ちで破壊された社寺の再建・創建が行われた。慶長10(1605)年には本経寺が創建、慶長13(1608)年には幸天社(現幸天宮)、富松社(現富松神社)が再興され、引き続いて江戸初期の寛文年間(1661~1672)までに151の社寺が建立された。今回の調査地点にあたる長久寺は、1623年に藩主純信によって再興され、1660年には池田山の宝円寺に習合された。

このように、三城城下跡は大村館を中心とした神道・仏教隆盛期、三城城を中心としたキリスト

小路が敷設され、町並みの基礎が形成された可能性が高い。16世紀前半までは遺物は広く見られるものの、16世紀後半には減少する傾向にあり、16世紀後半に遺物出土量がピークを迎える三城城跡とは対照的なあり方を示す。

今回の調査地点は、三城城下跡の東北端付近に位置し、「大村館小路割之図」では「千乘院」「萬乘院」と記載されている（図版20）。調査区の西側では、2006年の調査で1610年前後の土坑から花十字文瓦が出土している（第11図15）。また、調査区の北東側にあたる嬉野歌順宅地跡の調査では、16～17世紀頃の祭祀土坑が見つかっており（第11図11）、16世紀～17世紀の遺構群が残っている可能性が想定された。

【参考文献】

- 大村市史編さん委員会 2013『新編大村市史』 第一巻（自然・原始・古代編）大村市
大村市史編さん委員会 2014『新編大村市史』 第二巻（中世編）大村市
大村市史編さん委員会 2015『新編大村市史』 第三巻（近世編）大村市
大野安生 2009『肥前大村の成立過程』『キリスト教大名の考古学』別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会

3 調査組織

本調査は長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が担当し、作業員の労務管理および地形測量・遺構実測を三城城下跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体大成エンジニアリング株式会社長崎営業所・株式会社創建に委託した。調査組織は以下のとおりである。

新幹線文化財調査事務所	所長 古門 雅高
	課長 田尻 清秀（～平成27年度）
	小島 克孝（平成28年度）
	杉原 敦史
	係長 村川 逸朗（～平成27年度）
	主任主事 浜口 広史
範囲確認調査担当	主任文化財保護主事 中尾 篤志（平成26年度）
	文化財保護主事 本田 秀樹（平成26年度）
	係長 村川 逸朗（平成27年度）
	主任文化財保護主事 川畠 敏則（平成27年度）
本調査担当	係長 中尾 篤志
	文化財調査員 小川 慶晴
三城城下跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体	
大成エンジニアリング株式会社長崎営業所	現場代理人 浅見 克己
	調査員 土本 医

株式会社創建
整理作業担当

調査員 楠 秀行
係長 中尾 篤志
文化財調査員 新久保 恒和
文化財調査員 一瀬 勇士

4 日誌抄録（発掘調査）

- ・平成28年5月26日：準備工開始。
- ・平成28年6月14日：A区表土剥ぎ開始。3層黄褐色粘質土にてピット数基礎認。
- ・平成28年6月17日：A区表土剥ぎ完了。B区南半部表土剥ぎ完了。
- ・平成28年6月20日：作業員雇用開始。新規入場者教育実施。
- ・平成28年6月21日：A区東壁トレーナー・東西トレーナー開始。
- ・平成28年6月23日：A区・B区遭構検出作業。東西トレーナー南側で井戸（SE01）検出。
- ・平成28年6月30日：A区北半部のピット・土坑半截掘削作業及び土層写真撮影・実測。
- ・平成28年7月4日：A区SE01半截土層写真撮影及び土層実測。大量の遺物が出土。
- ・平成28年7月7日：A区完掘。完掘状況写真撮影。A区北半部に大型掘立柱建物1棟を確認。
- ・平成28年7月14日：B区北半部表土剥ぎ完了。C区表土剥ぎ開始。
- ・平成28年7月19日：A区ほぼ完掘。C区表土剥ぎ完了。南側から遭構検出作業。
- ・平成28年7月21日：B区石積遭構（SS01）の掘方精査。基礎と考えられる玉砂利層確認。
- ・平成28年7月26日：C区でピット床面から縫泥片岩製石塔笠を検出（SK15）。礎盤石に転用したものか。C区では他にも扁平な川原石を礎盤石とするピットが次々に見つかる。
- ・平成28年7月29日：C区ピット群が複数の掘立柱建物になることを確認。建物の軸はほぼ揃う。
- ・平成28年8月1日：B区西壁トレーナー掘削。SS01より北側で造成土を確認。
- ・平成28年8月3日：空中写真撮影。作業員による人力掘削終了。
- ・平成28年8月17日：撤収作業開始。
- ・平成28年8月19日：A区SE01下層確認のため重機掘削。土師器など多数出土。
- ・平成28年8月26日：調査終了。

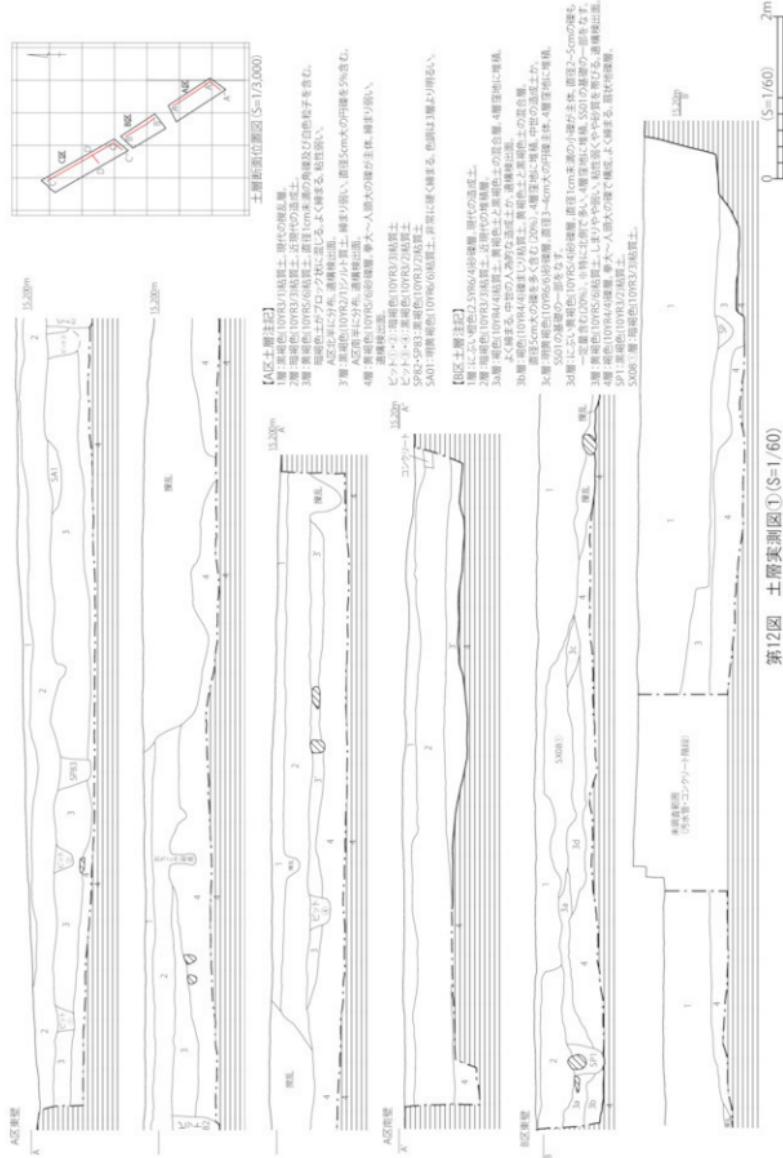


B区 C区調査区状況写真（南から）

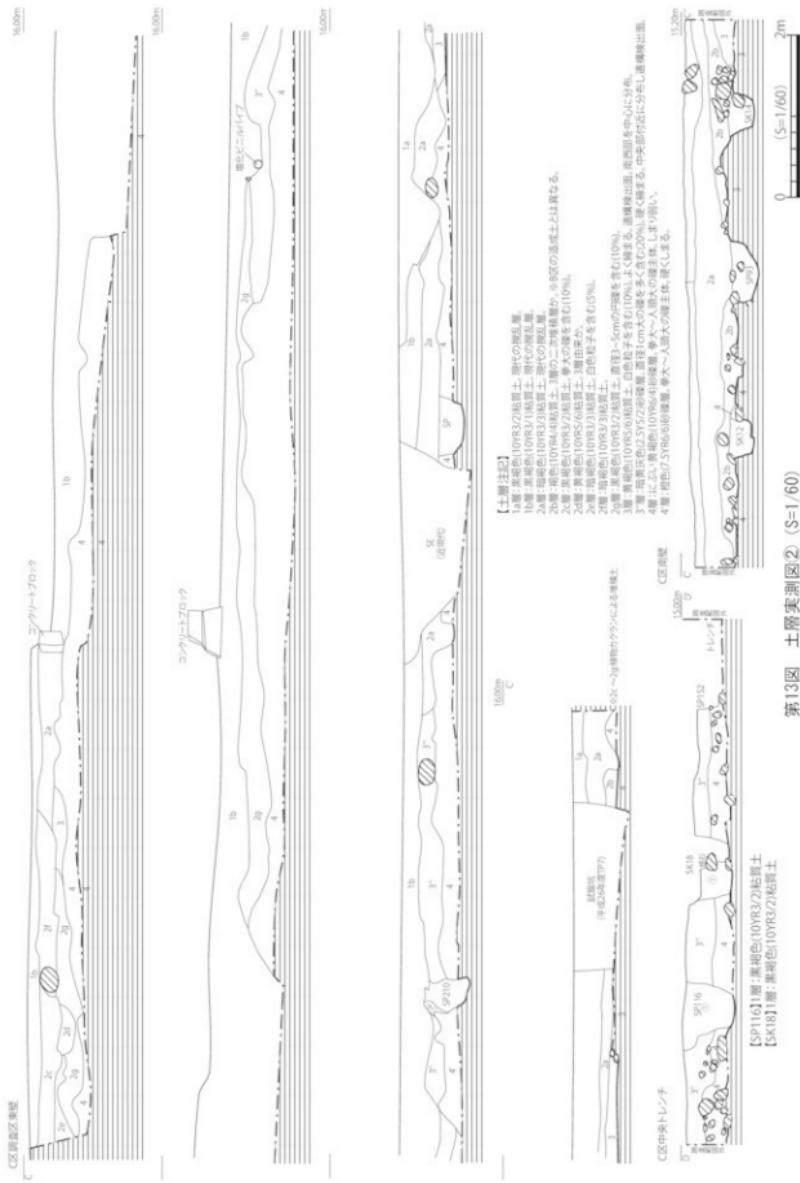


A区東西トレーナー掘削作業風景（北から）

図版2 調査状況写真



第12図 土層実測図①(S=1/60)



第13図 土層実測図2 (S-1/60)

5 基本土層（第12図・第13図）

調査区全体を大きく4層に分層した。1層・2層は近現代の搅乱に伴う堆積層である。3層は黄褐色砂混じり粘質土で、A区北半～B区、C区南半にかけて分布する。この層を掘り込んで遺構が構築されるが、3層が分布しないA区南半やC区北半では、3'層や4層を掘り込む形で遺構を検出している。

3層が分布しないA区南半では、3層相当層に黒褐色シルト質土が堆積しており、3'層からは、中世末～近世初頭の陶磁器がまとめて出土することや、部分的に3層黄褐色土の落ち込みが見られることから、植生の繁茂により形成されたクロボク土を主体とし、一部風倒木等の搅乱を含む土層と考えた。また、C区中央部では3層相当層がやや白っぽい色調で直径1cm前後の礫を多く含み非常に固くしまることから、3"層として区別した。C区中央部では、3"層を掘り込む形で遺構を検出している。4層は基盤層である扇状地礫層である。

3層の堆積が部分的であることから、4層の扇状地礫層が大上戸川の氾濫などにより解析され、東西方向に浅い落ち込みを形成し、ここに3層が堆積したものと推測される。3層の大半は自然堆積層と考えられるが、B区北端部ではSS01を境にして部分的に造成土が確認でき（3a～3d層）、人为的な堆積層も一部に含まれる。遺構出土の遺物は17世紀前半代を中心であり、包含層中から16世紀に遡る可能性のある陶磁器類がわずかに出土していることから、削平は受けているものの、3層上面はこの頃の生活面と考えられる。



A区東壁土層北半部（南西から）



A区東壁土層南半部（北西から）



B区東壁土層北半部（南西から）



C区東壁土層中央部（南西から）

図版3 土層写真

6 遺構と遺物

今回の調査では、ピット（SP）207基、土坑（SK）20基、土壘（SA）1条、石列（SS）1条、井戸（SE）1基、不明遺構（SX）8基を検出した。土坑は、直径80cm以上で平面形が円形にならないものを認定したが、土坑の床面から礎盤石と考えられる扁平な礎を検出したものが複数あり、またピットとともに規則的な配列を示すものもあることから、掘立柱建物や柵列を構成する柱穴の一部をなすものも含まれている。これらピット群や土坑群の配置から復元できた遺構は、掘立柱建物（SB）9棟、柵列（SA）5条となった（第14図～第17図）。

（1）土壘・柵列（SA）

① SA01（第18図）

A区7622グリッド3層上面で検出した（第18図）。長軸長5.6m、短軸長3.2mの不整椭円形で、調査区東側の未調査区まで伸びる。A区東壁土層の観察では、深さ0.15m程度の浅い落ち込みに、3層より明るい色調の粘質土が非常に硬くしまった状態で堆積している。また、この遺構と切りあう形で、17世紀代のピット群を検出しているが、いずれもSA01を切っている。この遺構の東側延長部分（未調査区）には東西方向に伸びる土壘の一部が残っていることから、SA01は16世紀以前の土壘に関連する遺構（基礎もしくは堀など）の一部であろうか。遺物は出土していない。

② SA02（第19図）

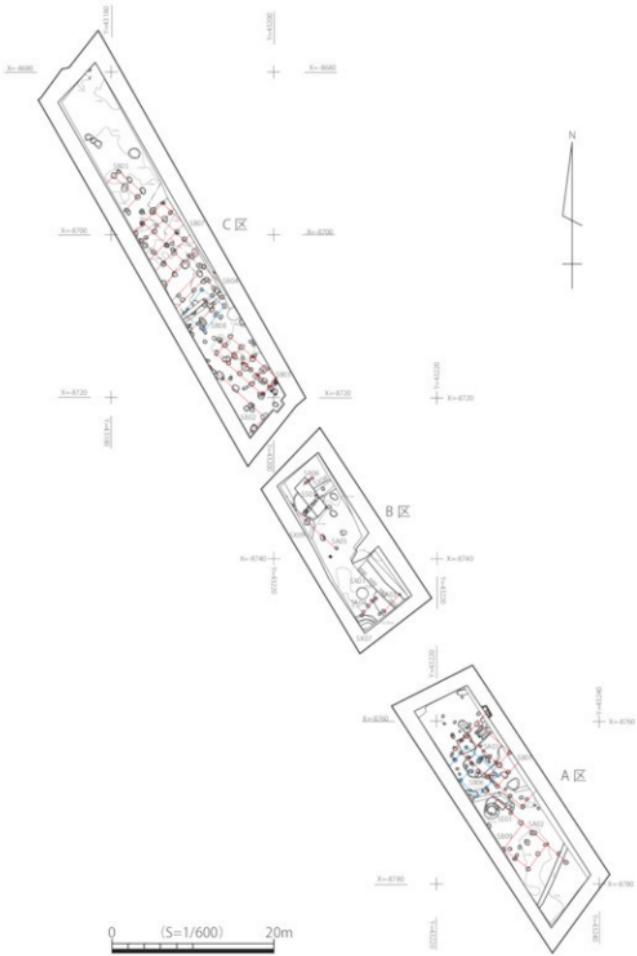
A区7622グリッド3層・4層上面で検出した。7基のピットが北西—南東方向に直線上に配列し、間隔はほとんどが2.0mで規則的であるが、南端部のみ1.4mとなる。ピットの配列から、SE01の東に隣接する搅乱により1基が削平され、本来は8基で構成されていたと推測される。ピットは平面不整形で長軸長60～80cm程度のものが多く、堆積状況は炭化物を含む黒褐色土單一の土層であり、柱痕跡や抜取り痕を確認することはできなかった。礎盤石も未検出である。遺物は出土しなかつたが、SB01と主軸を同じくすることから、これと同時期（17世紀初頭）と推測される。

③ SA03（第20図）

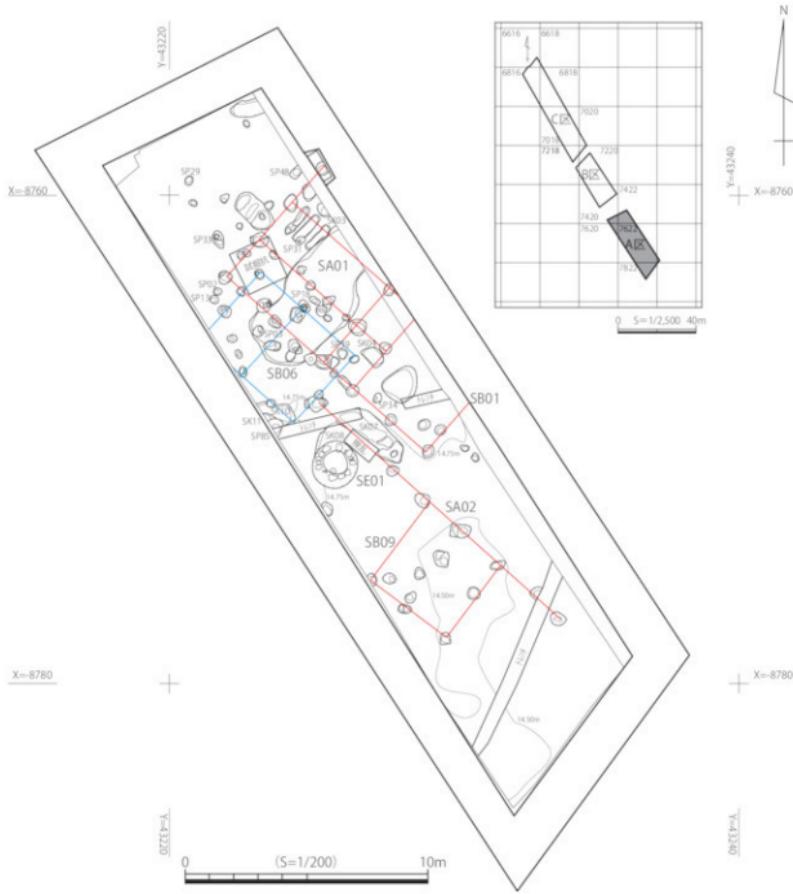
B区7420グリッド3層上面で検出した。北東—南西方向に伸びる。2基のピットで構成され、間隔は約2.8mであるが、搅乱により現存するピットの間の1基が削平されている可能性がある。ピットは長軸長0.5m前後で、土層は黒褐色の單一土層で柱痕跡や抜取り痕は確認できなかった。遺物は出土しておらず、時期は不詳である。

④ SA04（第20図）

B区7420グリッド3層上面で検出した。北東—南西方向に伸びる。5基のピットで構成され、間隔は0.5～0.8mと幅がある。ピットは長軸長0.5～0.6mと小規模で、いずれも浅い掘り込みである。遺物は出土しておらず、時期は不詳である。



第14図 遺構配置図（全体）(S=1/600)

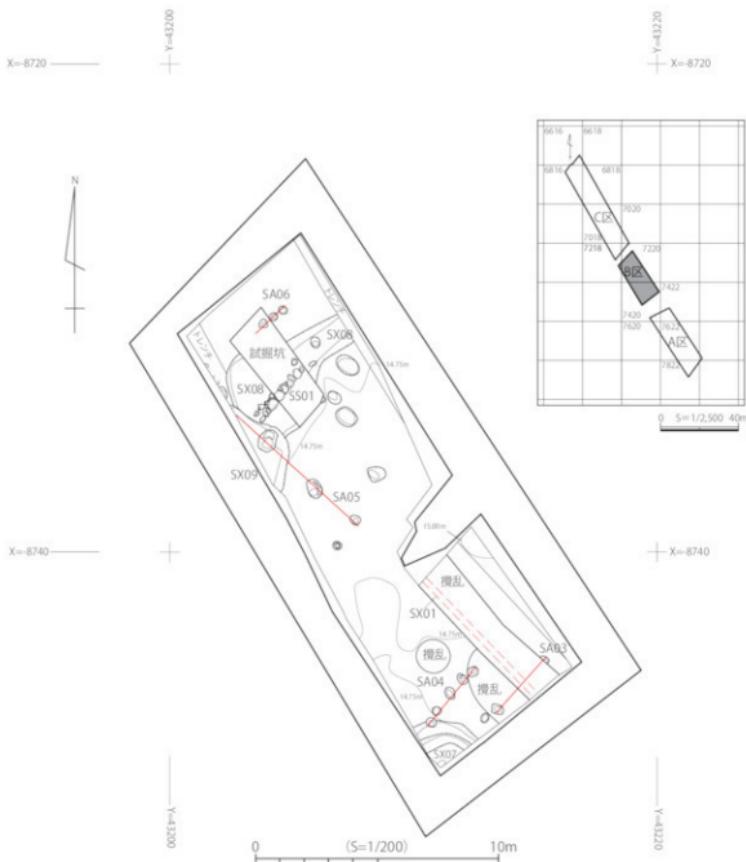


第15図 A区遺構配置図 (S=1/200)

⑤ SA05 (第20図)

B区7220グリット3層上面で検出した。北西—南東方向に伸びる。3基のピットで構成され、間隔は2.1m～2.8mである。ピットは長軸長0.4m～0.9mと幅がある。SK17は上下2層の埋土が確認できるが、柱痕跡や抜取り痕は確認できない。他のピットも単一の埋土である。また、SK17はSX09に切られていることから、これより相対的に古い遺構である。

遺物は、SP107から平瓦が、SK17から陶器の胴部片が出土している（第21図・図版4・第4表）。
2は東南アジア系のハンネラ陶器の胴部片と思われ、17世紀初頭と考えられる。



第16図 B区遺構配置図 ($S=1/200$)

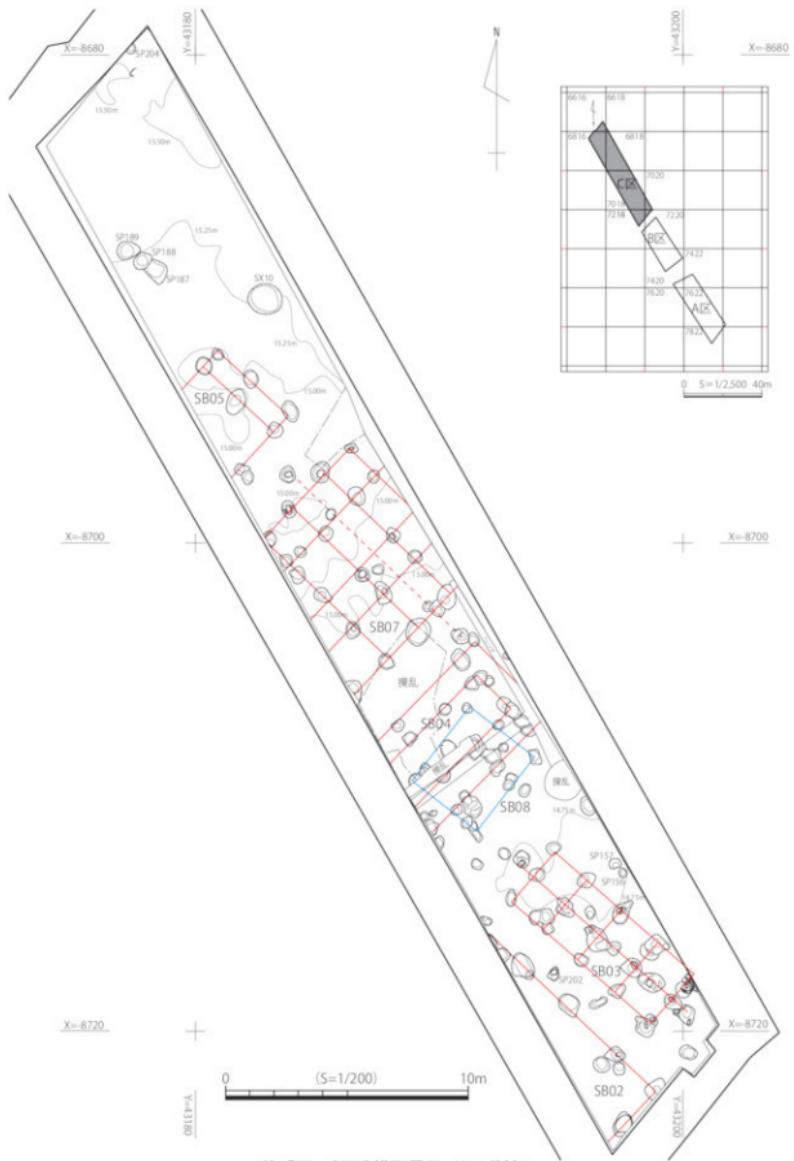
⑥ SA06 (第20図)

B区 7220 グリット3層上面で検出した。北東—南西方向に伸びる。3基のピットで構成され、間隔は0.5m前後である。ピットは長軸長0.4m弱といずれも小規模で、埋土は黒褐色の单一土層で柱痕跡や抜取り痕は確認できなかった。遺物は出土しておらず、時期は不詳である。

(2) 挖立柱建物 (SB)

① SB01 (第22図～第23図)

A区 7622 グリット3層で検出した。梁間3間以上、桁行6間、梁間長6.1m以上、桁行長10.8m



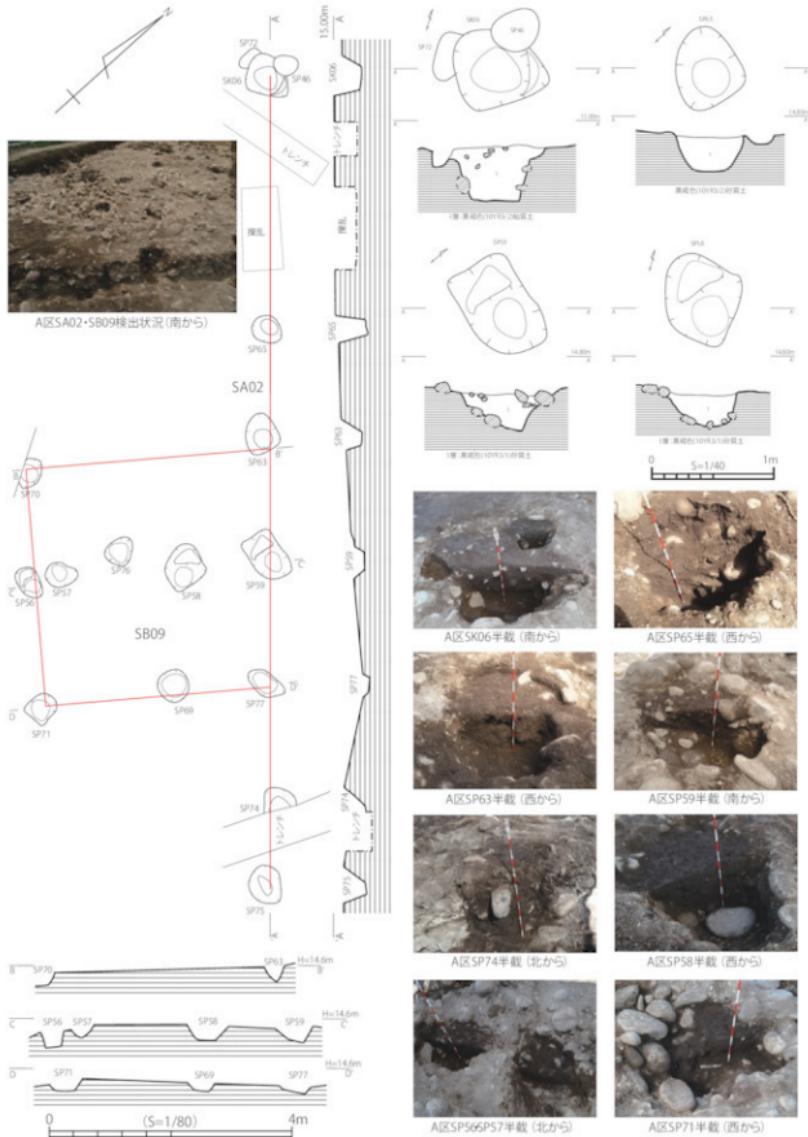
第17図 C区遺構配置図 (S=1/200)



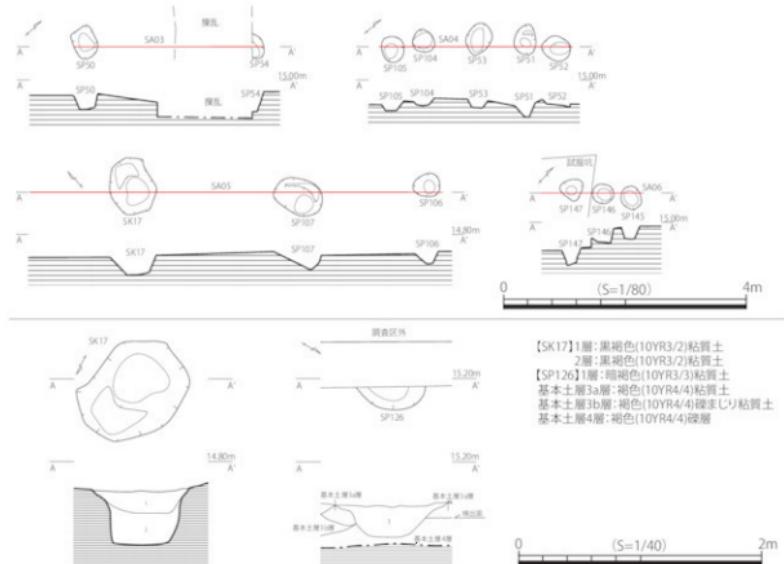
第18図 A区SA01遺構実測図 ($S=1/60$)

の大型建物である。主軸は北西—南東方向で、柱間寸法は梁間2.0m、桁行1.6m～2.0mとなる。ピットは長軸長0.4m～0.8mと幅があるが、深さは0.3m以上でしっかり掘り込まれている。ピットの埋土は暗褐色で黒褐色土と黄褐色土の混合層単一のものが多いが、SP01・SP07・SP41では断面観察で柱痕跡が確認できる。礎盤石は確認できなかった。また、SP40・41やSP67・68のように、隣接して切りあって検出したものは、柱の立替や抜取り穴の可能性がある。

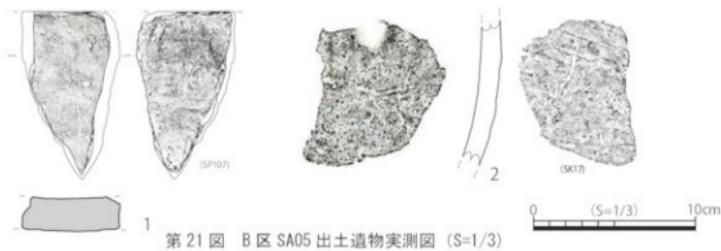
遺物はピット内および検出面から出土した（第24図・図版5・第5表）。1は龍泉窯系青磁碗の胴部片である。外面上半から内面にかけて施釉するが、外面下半は露胎である。2は口縁部口禿の白磁小皿である。3はSP68の検出面付近で出土した唐津焼皿の胴部～底部で、胴部中位で外側に緩く屈曲する。内面から胴部上半には施釉するが、胴部下半は露胎である。見込みには胎土目が4箇所残り、口縁部内面には鉄絵で半円形の文様が描かれる。4は瓦質の鉢か。口縁端部に自然釉がかかる。5・6は土師器杯、7は土師器皿である。5は底部から内湾気味に立ち上がり口縁部は若干外反する。破片資料であるが、復元口径10cm、底径4.2cm、器高3.4cmとなる。底部の端部には、ロクロ切り離しの際の粘土のはみ出しをそのまま残す。内面はロクロによるケズリ成形の細かな凹凸を残し、胴部の立ち上がり部分を強くなっている。他の遺構から出土した土師器杯に比べて、比較的薄手に仕上げる。胎土には僅かに褐斑を含む。6は復元底径5.0cmの杯で、底部から胴部の立ち上がりの内湾がきついが、底部短部に残るロクロ切り離し時の粘土のはみ出しあり、内面胴部立ち上がり付近の強いなで調整、器壁を薄く仕上げる特徴などは5と共通する。外面には化粧土を薄く塗布する。7は胴部か



第19図 A区 SA02・SB09遺構実測図 ($S=1/40 \cdot S=1/80$)



第20図 B区SA03・SA04・SA05・SA06遺構実測図 (S=1/40・S=1/80)



第21図 B区SA05出土遺物実測図 (S=1/3)



図版4 A区SA05出土遺物

第4表 SA05出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地区	直横・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
1	平瓦	BK7220	3層 SP107	—	—	—	日本	SA05を構成
2	ハンネラ陶器	BK7220	3層 SP117	—	—	—	東南アジア	SA06を構成

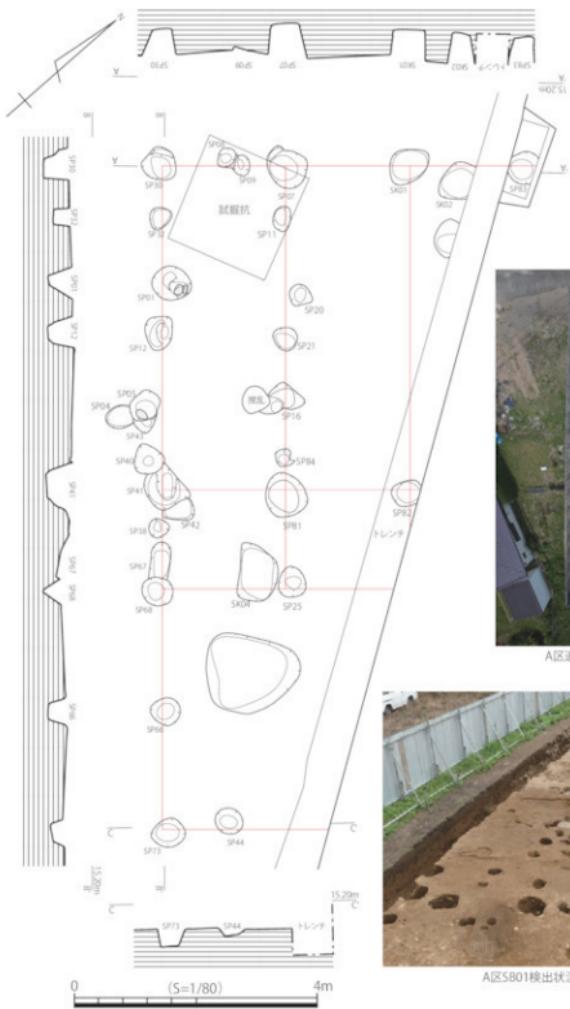
ら口縁部にかけて内湾する皿で、表面は本来化粧土が薄く乗っていたが、風化によりほとんど剥落している。復元口径8.6cm、底径6.1cm、器高1.7cmである。8は無文鏡、9は棒状鉄製品で釘の可能性がある。

これらは、1・2は13～14世紀まで遡るもの、胎土目積みの唐津焼を含み肥前陶磁(初期伊万里)は含まないことから、17世紀初頭に収まると考えられる。

②SB02(第25図)

C区7622～7822グリット3層で検出した。梁間2間以上、桁行4間以上、桁行長9.4m以上の大型側柱建物である。主軸は北西～南東方向で、柱間寸法は梁間2.0m、桁行2.0～3.0mである。ピットは長軸長0.9～1.1mと大型で、深さ0.1～0.35mである。SP94・SP182の床面付近には礎盤石が残り、SP198は断面観察で柱痕跡を確認した。SP94では礎盤石とピット床面との間に土がかんでおり、柱掘方底部を埋め戻して礎盤石を据えた可能性もあるが、礎盤石上位の埋土と同様の特徴を持つことから、両者を区別することはできなかった。ピットの埋土は、やや砂質を帯びた暗褐色～黒褐色粘質土で、炭化物を含む。

遺物はピット内から出土した(第26図・図版6・第6表)。1は白磁輪花皿の口縁部。中国産の輸入陶磁と思われる。2は陶器片で、表面に平行タタキのような調整痕を残す。胎土は厚く空隙が多いことから、有機質の混和材を含んでいたと推測される。東南アジア系のハンネラ陶器に類似し、長崎市万才町遺跡では17世紀初頭の土坑から出土している。3は犬形土製品である。右後足から尻尾にかけて残る。表面はなでの痕跡を残し、尻尾は立てている。これらの時期は17世紀初頭ごろと推測される。

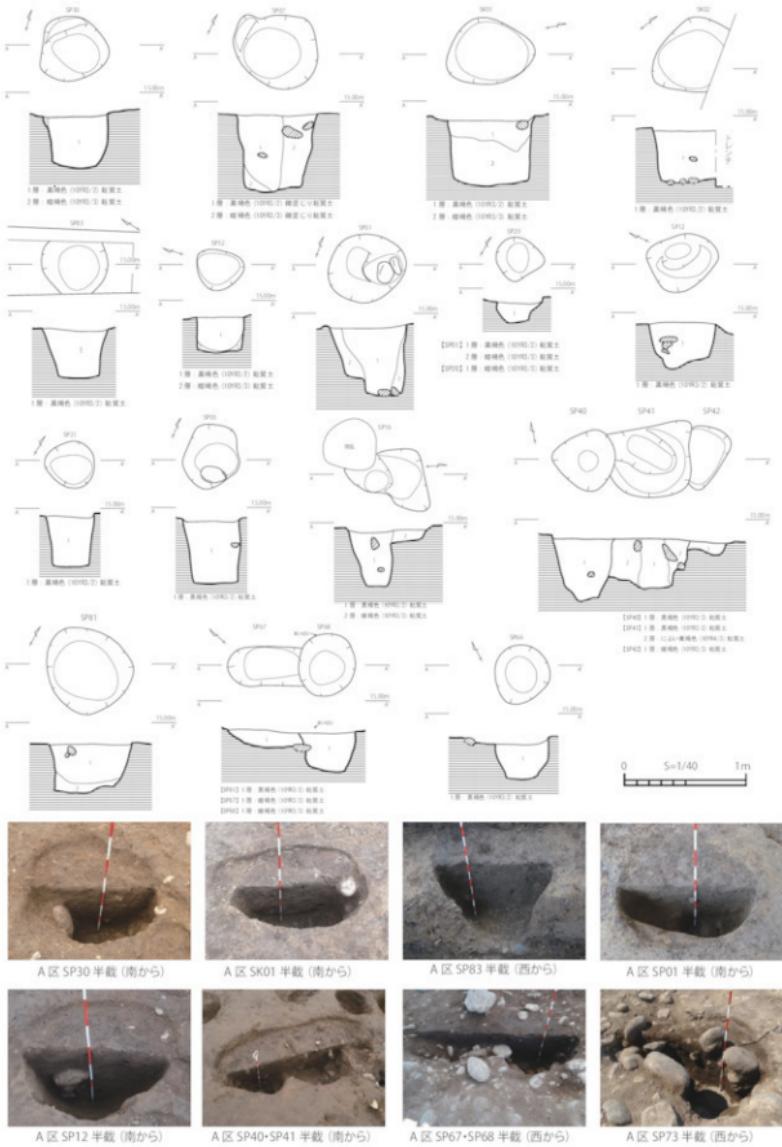


A区遺構露出状況空中写真



A区SB01検出状況(北から)

第22図 A区SB01遺構実測図 (S=1/80)



第23図 A区 SB01柱穴遺構実測図 (S=1/40)



図版5 A区SB01出土遺物

第24図 A区SB01出土遺物実測図

(S=1/1・S=1/2・S=1/3)

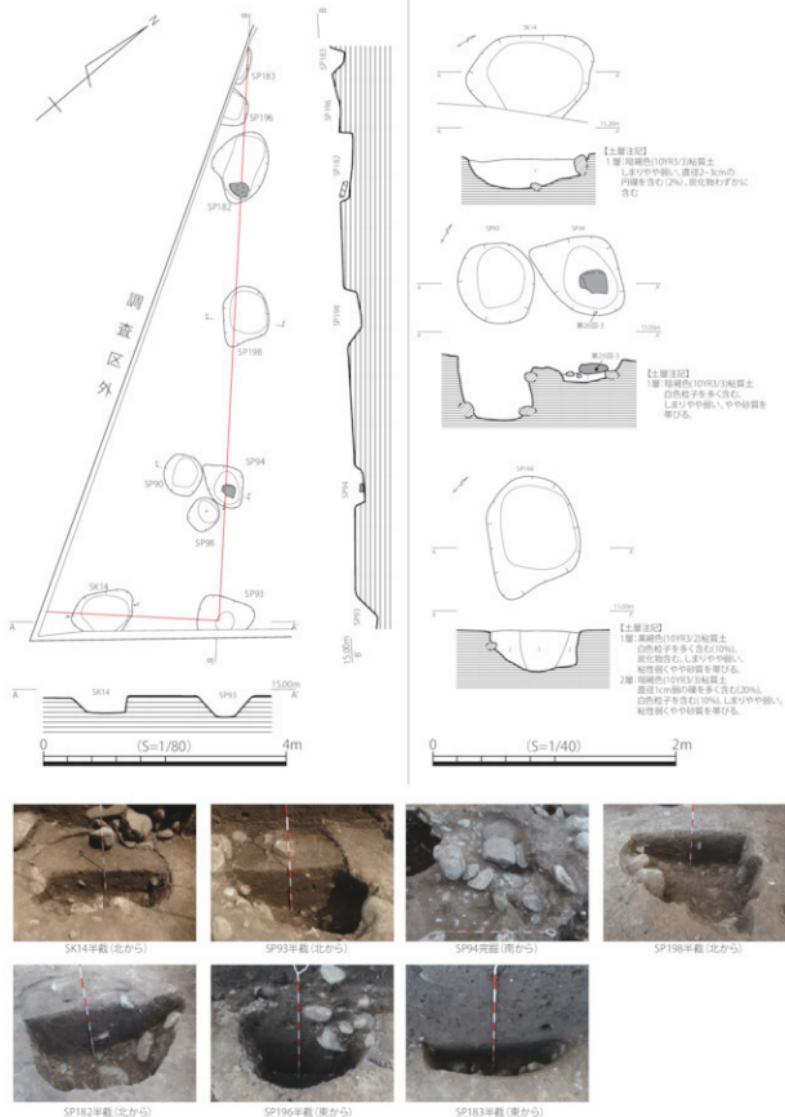
第5表 SB01出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地(区)	遺構・層位	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	生産地	備考
1	青銅鏡	AIC7622	SP05(SB01)	—	—	—	中国	
2	白銅鏡	AIC7622	SP02(SB01)	5.9	—	(1.9)	中国	
3	陶器裏	AIC7622	SP98(SB01)	—	4.4	(3.5)	肥前	
4	瓦筒	AIC7622	SP41(SB01)	—	—	(5.4)		
5	土師漆杯	AIC7622	SP07(SB01)	10.0	4.2	3.4	—	
6	土師漆杯	AIC7622	SP07(SB01)	—	5.0	(2.3)	—	
7	土師漆盤	AIC7622	SP41(SB01)	8.6	6.1	1.7	—	

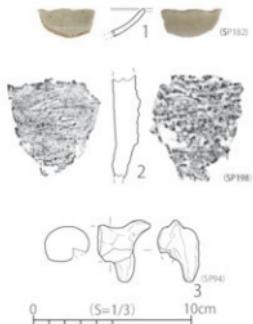
番号	遺物名稱	調査地(区)	遺構・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
8	無文鏡	AIC7622	SP07(SB01)	2.1	(1.1)	0.1	1.10	
9	陶灰器製品	AIC7622	SP01(SB01)	(3.3)	0.7	0.3	1.36	

③SB03 (第27図・図版7)

C区7018グリット3層上面で検出した。梁間2間、桁行4間、梁間長2.7m、桁行長7.6mの細長い柱建物である。主軸は北西—南東方向で、柱間寸法は、梁間1.3～1.4m、桁行1.7～2.0mである。また、梁間の外側には、棟木ラインの延長上にピット(SP128・SP190)がある。棟持柱の可能性があることから、一連の建物を構成するピットに含めた。ピットの規模は、長軸長0.65～1.0m、深さ0.2～0.5mで、SP128・SP191・SK15・SK16では床面で礎盤石を検出した。特にSK15では、絵泥片



第25図 C区SB02遺構実測図 ($S=1/40 \cdot 1/80$)



第26図 C区SB02出土遺物実測図 (\$=1/3)



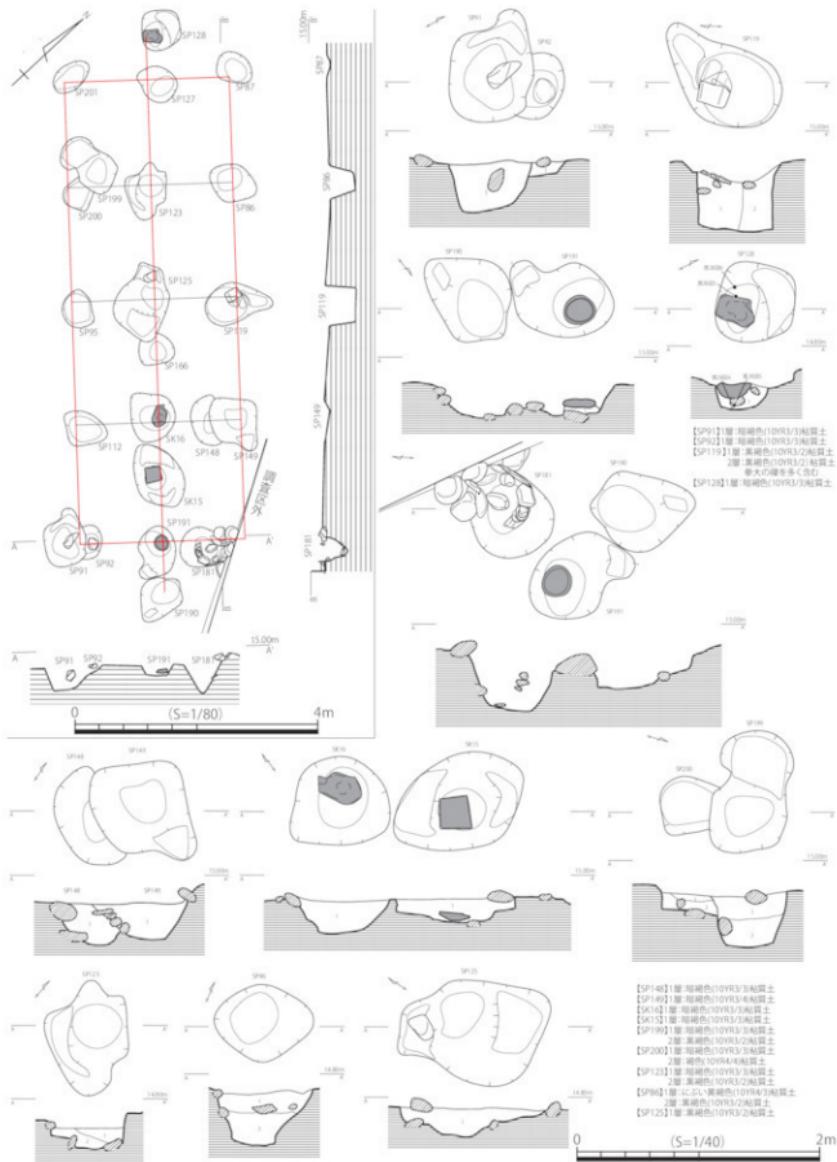
図版6 C区SB02出土遺物

第6表 SB02出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地點	直積・層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
1	輪花盤	CJK-918	SP128・SP192	-	-	(1.8)	中国	
2	ハンネラ脚鉢	CJK-918	SP198・SP199	-	-	-	東南アジア	
3	天井式製品	CJK-918	SP94-1・SP94-2	復元:3.45	幅:3.3	厚さ:2.4		

岩製の五輪塔火輪を逆さまにして礎盤石に転用していた。SP128・SP191では礎盤石とピット床面との間に土がくんでおり、柱掘方底部を埋め戻して礎盤石を据えた可能性もあるが、礎盤石上位の埋土と同様の特徴を持つことから、両者を区別することはできなかった。また、SP128では礎盤石の下や周囲から陶製植木鉢が2個体分出土した（第28図5・6）。地鎮の可能性がある。ピット埋土は黄褐色土をブロック状に含む暗褐色粘質土で、SP119では柱痕跡を確認した。隣接して切り合うピットが多く、柱の立替が行われた可能性が考えられる。

遺物は、ピット内から出土した（第28図～第29図・図版8・第7表）。1は赤絵磁器で小坏の口縁部か。復元口径6.4cmである。白磁の素地に赤と緑で絵付を行う。2は青白磁の合子蓋である。天井式復元径4.1cm。13世紀頃まで遡るもので、伝世品の可能性がある。3は黄色味がかった色調の輪花皿の口縁部で、復元口径14.6cmである。口縁部は外反気味に屈曲する。4は白磁の輪花皿。口縁部に釉が分厚くたまる。5・6は陶製の植木鉢。5は底部から直線的に胴部が立ち上がり、口縁部は屈曲して平坦面を形成する。復元口径15.7cm、底径8.2cm、器高15.0cmである。胴部外面から口縁部平坦面にかけて緑釉がかかり、外面に青から乳白色の釉をかけ分ける。内面や胴部下端から底部にかけて露胎となるが、底部内面には自然釉がかかる。高台3箇所に割り込みをいれ、底部中央は外側から打ち欠いて円形に穿孔している。6は5とは別個体の植木鉢で、口縁部のみ残る。復元口径19.4cm。7は褐釉の小壺口縁部である。復元口径5.8cm。釉は外面及び胴部内面にかかるが、口縁部内面は露胎で上端も釉剥ぎしている。唐津焼でも初期のものか。8は灰色釉がかかる碗口縁部である。胎土に白色粒子などの混和材を多く含む。朝鮮系雜釉陶器（いわゆる高麗茶碗）であろう。9は灰白色の釉調の白磁胴部で、器形は鉢か。内面を中心にロクロ目を強く残す。10は瓦質土器底部で、底部から胴部の立ち上がりが丸みを帯びる。16世紀の東播系こね鉢であろう。11は熔焰と思われる。内面にはロクロを利用したハケメのような調整痕が残り、口縁部外面には煤が付着する。胎土には褐斑を多く含む。12・13は土師質の火鉢である。いずれもSP119からの出土であるが、色調や焼成か



第27図 C区SB03構造実測図 (S=1/40・1/80)



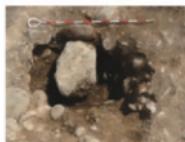
C区空撮写真(左が北)



C区SB02・SB03検出状況(北西から)



C区SP128半截(南から)



C区SP128出土遺物1(東から)



C区SP128遺物出土2(東から)



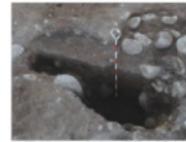
C区SP201半截(東から)



C区SP127半截(南から)



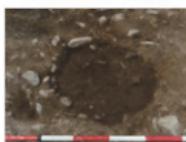
C区SP87半截(南から)



C区SP199・SP200半截(東から)



C区SP123半截(南から)



C区SP86検出状況(南から)



C区SP95半截(南から)



C区SP125半截(西から)



C区SP119半截(西から)



C区SP112半截(西から)



C区SK15・SK16半截(西から)



C区SK15完掘(西から)



C区SK15完掘(北から)



C区SP148・SP149半截(南から)



C区SP91・SP92半截(南から)

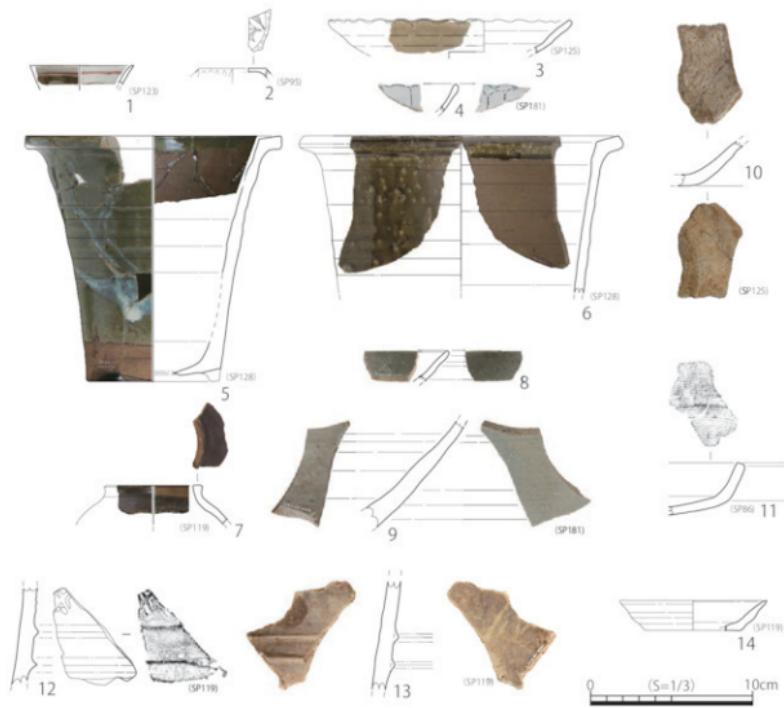


C区SP190・SP191完掘(北から)



C区SP181完掘(北から)

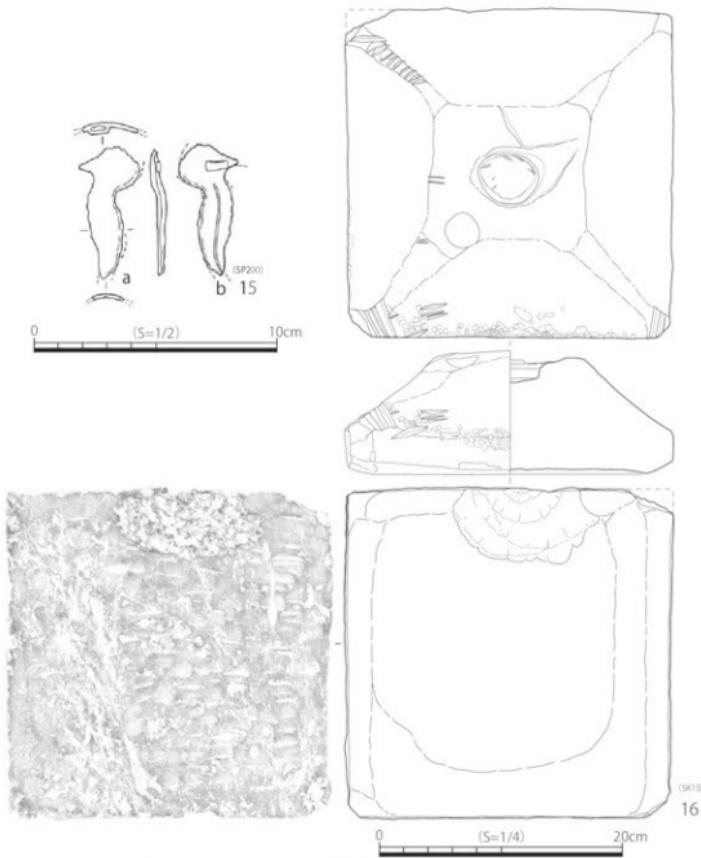
図版7 C区SB03構造写真



第28図 C区SB03出土遺物実測図①(S=1/2・S=1/3)



図版8 C区SB03出土遺物



第29図 C区SB03出土遺物実測図②(S=1/2・S=1/4)

第7表 SB03出土遺物観察表

番号	遺物名	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	下層地	備考
1	陶筋縫小鉢	CR7018	SP123 (SB03)	6.4	—	1.3	肥前	
2	青白釉合子裏	CR7018	SP95 (SB03)	—	—	(0.6)	中国	
3	輪花皿	CR7018	SP125 (SB03)	14.6	—	(2.8)	中国	
4	輪花皿	CR7018	SP181 (SB03)	7.7	—	(1.7)	中国	
5	楕木鉢	CR7018	SP128-1 (SB03)	15.6	8.2	15.0	肥前	
6	楕木鉢	CR7018	SP128 (SB03)	19.4	—	(9.6)	肥前	
7	圓錐小壺	CR7018	SP119 (SB03)	—	—	(1.9)	肥前	
8	鍾乳陶器	CR7018	SP119 (SB03)	5.8	—	(2.4)	中国	
9	白釉鉢	CR7018	SP181 (SB03)	—	—	—	肥前	
10	瓦質二枚鉢	CR7018	SP125 (SB03)	—	—	(2.8)	東北系	
11	鏡	CR7018	SP96 (SB03)	—	—	—	—	
12	丁形器火鉢	CR7018	SP119 (SB03)	—	—	—	—	
13	丁形器火鉢	CR7018	SP119 (SB03)	—	—	—	—	
14	上部瓦頭	CR7018	SP119 (SB03)	8.9	5.9	1.8	—	
15	不明骨陶器	CR7018	SP90 (SB03)	長23.3	幅2.4	厚3-6.6	—	
16	五輪塔	CR7018	SP15 (SB03)	長22.7	幅2.7	厚3-10.2	—	

ら別個体の破片と考えられる。12は印花をもつ。14は土師皿で表面は摩滅が著しい。外面にはロクロ成形時の凹凸を残す。胎土に褐斑を多く含む。第29図15は不明青銅製品である。欠損が著しく平面形はうかがえないが、部分的にくびれを持つ。横断面は半月形で、a面は凸面、b面は凹面となる。凹面中央には長軸に沿って浅い沈線が残り、留具のような細長い折り返しが確認できる。何らかの装飾品であろうか。16は緑泥片岩製五輪塔の火輪で、SK15の礎盤石に転用されていた。全体にタガネ状工具による調整痕が顕著で、一部剥離痕や敲打痕が残る。笠の稜線をタガネ状工具で平坦に削っているのは、明らかに後世の改変と思われる。風輪をはめ込むほど穴は平面円形で、佐賀平野に類例がある。大村館墓地での検討に照らせば、1400年代後半頃であろう。

これらの時期は、7の古唐津や8の朝鮮系雜釉陶器が16世紀末～17世紀初頭、1の赤絵磁器が1640年代頃、5・6の植木鉢は1700年代前半頃とかなりの時期幅を有する。柱穴の立替が想定できることから、比較的長期間にわたって利用されたと考えられる。

④SB04（第30図・第31図）

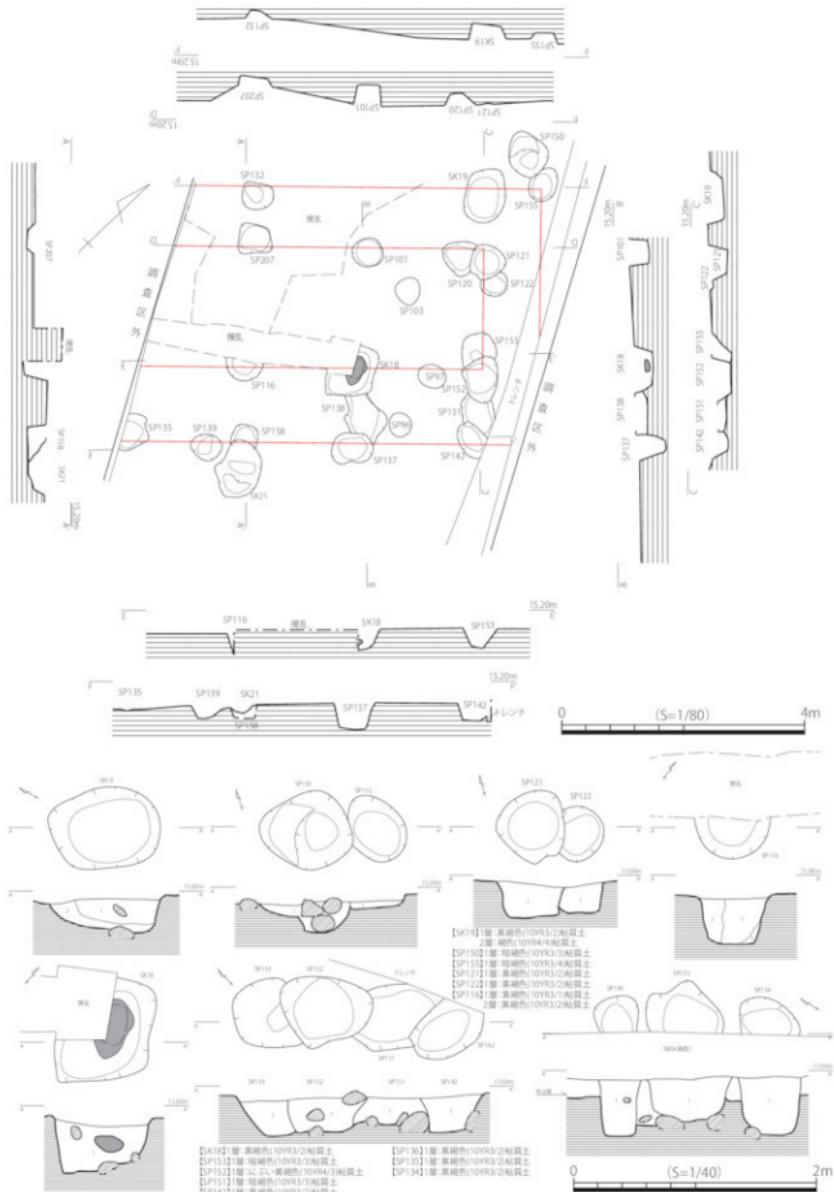
C区6818～7018グリット3"層～4層上面で検出した。梁間3間、桁行4間以上、梁間長4.2m、桁行長6.8m以上の細長い三面もしくは四面廂建物と考えた。主軸は北東～南西方向で、柱間寸法は梁間2.0m、桁行2.0mで、身舎と庇の柱間寸法は、北側で1.0m、南側で1.2mである。ピットは、長軸長0.55～0.9m、深さ0.1～0.4mで、SK18では礎盤石を検出した。SK18の礎盤石は、ピット床面との間に土がかんでおり、柱掘方底部を埋め戻して礎盤石を据えた可能性もあるが、礎盤石上位の埋土と同様の特徴を持つことから、両者を区別することはできなかった。ピット埋土は炭化物をわずかに含む黒褐色～褐色の粘質土で、SP116では柱痕跡を確認した。隣接して切り合うピットが多く、柱の立替が行われた可能性が考えられる。

遺物はSP101から出土した（第32図・図版9・第8表）。1は土師皿で表面がかなり摩滅している。復元口径7.8cm、底径3.6cm、器高2.1cmである。底部から口縁部にかけて直線状に外反する器形で、外面にはロクロ成形時の凹凸を残す。外面には煤が付着する。2は滑石製石鍋の底部片である。底部から丸みを帯びて胴部が立ち上がる。底部内面にはタガネ状工具による整形痕が明顯に残る。

⑤SB05（第33図）

C区6818グリット4層上面で検出した。今回の調査で最も北側に位置する掘立柱建物である。梁間2間、桁行3間以上、梁間長4.0m、桁行長3.4m以上の細長い建物である。東側に庇がつくと考えた。主軸は北東～南西方向で、隣接する北側の通り（「大村館小路割之図」記載の犬ノ馬場）と向きを揃える。柱間寸法は梁間2.0m、桁行0.9～2.0m、身舎と庇の柱間寸法は0.9mである。ピットは、長軸長0.5～1.0m、深さ0.1～0.3mと浅く、かなり削平を受けている。礎盤石は確認できなかったが、ピット床面は4層礎層で拳大から人頭大の礎が露出していることから、あるいは必要ななかったのかもしれない。埋土は暗褐色から黒褐色の粘質土で、拳大の礎を含む。SP176・SP185・SP195では、検出面で掘方周辺から拳大～人頭大の礎を検出しておらず、柱を固定する根巻石の可能性がある。柱痕跡は確認できなかった。

遺物はピット内から出土した（第34図・第9表）。1は染付椀で外面に一重網目文を施す。2は土瓶。



第30図 C区SB04構造実測図① ($S=1/40 \cdot S=1/80$)



第31図 C区 SB04 遺構実測図② ($S=1/40$)

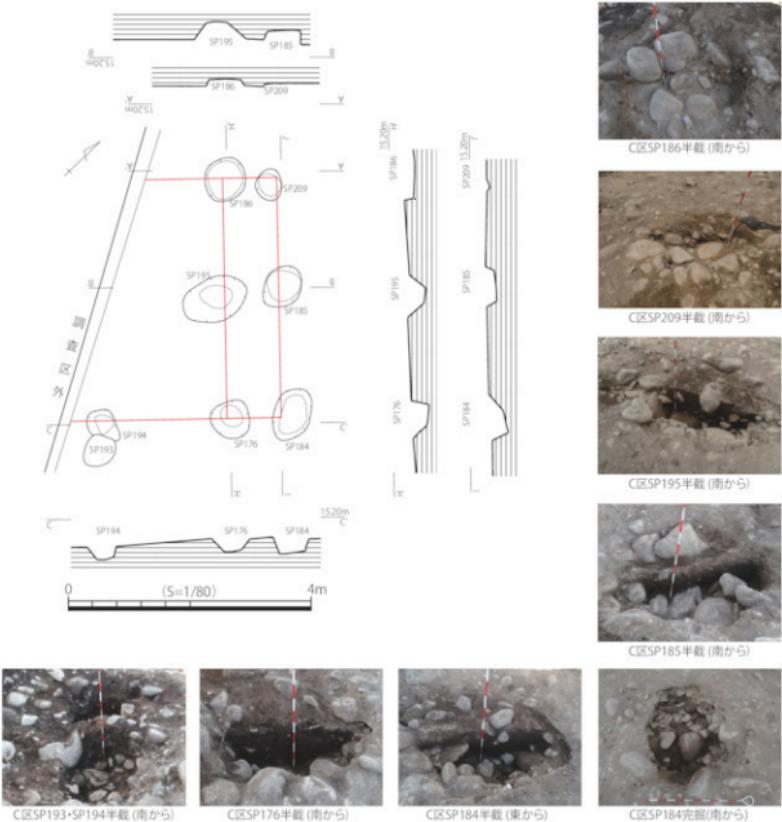


図版9 C区 SB04 出土遺物

第32図 C区 SB04 出土遺物実測図 ($S=1/3$)

第8表 SB04 出土遺物観察表

番号	遺物名称	調査面名	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	土器底瓦	C区SB04	SP101 (SB04)	7.2	3.7	2.1	—	—
2	滑石製石器	C区SB04	SP101 (SB04)	長さ:12.3	幅:5.45	厚さ:1.95	—	—



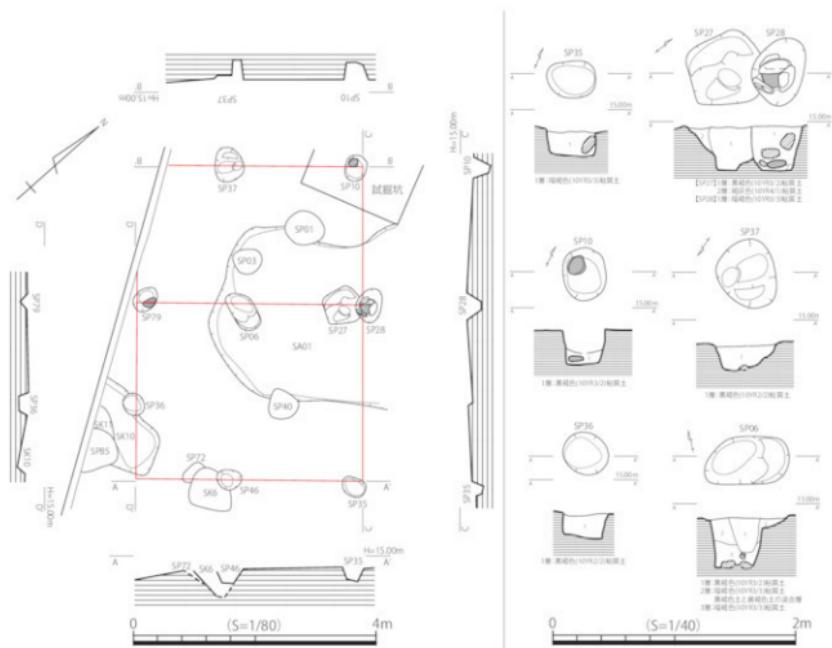
第33図 C区SB05構造実測図 ($S=1/80$)



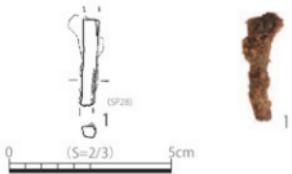
第34図 C区SB05出土遺物実測図 ($S=1/3$)

第9表 SB05出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地點	遺構・層位	U径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	梁行鏡	CX6916	SP186 (SB05)	-	-	(2.8)	肥前	
2	土器	CX7018	SP184 (SB05)	-	-	-	肥前	



第35図 A区SB06遺構実測図 ($S=1/40$ ・ $S=1/80$)



第36図 A区 SB06 出土遺物実測図 (S=2/3)

第10表 SB06 出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査面	遺跡・層位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	生産地	備考
1	棒状鉄製品	A区7622	SP28 (SB06)	長さ2.0	幅1.1	厚さ0.3		

外表面は露胎であることから、胸部下半の破片であろう。これらの遺物は、18世紀頃と考えられる。

⑥SB06(第35図)

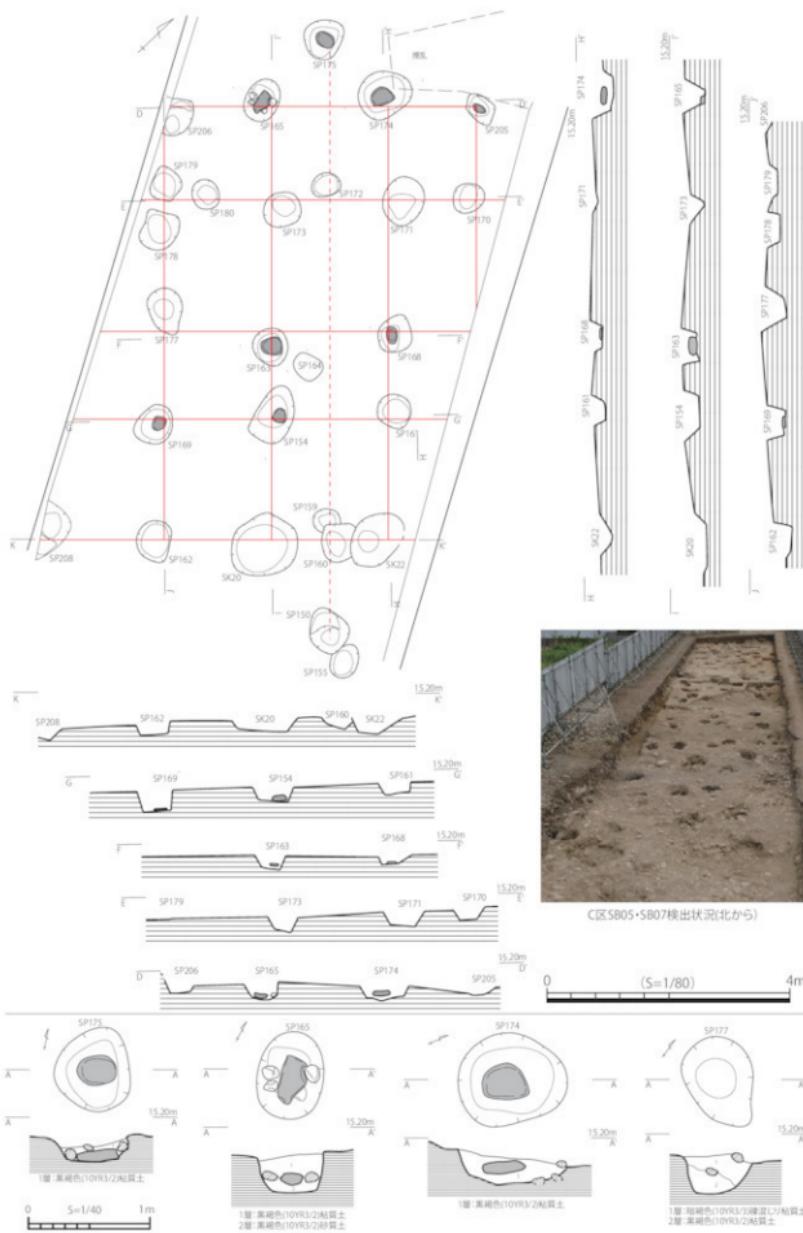
A区7622グリット3層上面で検出した。梁間2間、桁行2~3間、梁間長3.8m、桁行長4.2mの側柱建物である。主軸は北西~南東方向で、柱間寸法は梁間1.5~2.1m、桁行2.3~2.9mである。この建物を構成するSP46は、SA02を構成するSK6を切っていることから、相対的にSB06が新しい。ピットは長軸長0.4~0.7m、深さ0.2~0.4mで、SP10・SP79では礎盤石を、SP28では礎盤石とそれを扁平な碟で囲った根巻石を検出している。SP10・SP28とも礎盤石とピット床面との間に土がかんでおり、柱掘方底部を埋め戻して礎盤石を据えた可能性もあるが、礎盤石上位の埋土と同様の特徴を持つことから、両者を区別することはできなかった。また、SP06では柱痕跡を確認している。

遺物は、SP28から断面方形の棒状鉄製品が出土している(第36図・第10表)。小型の釘と考えられる。

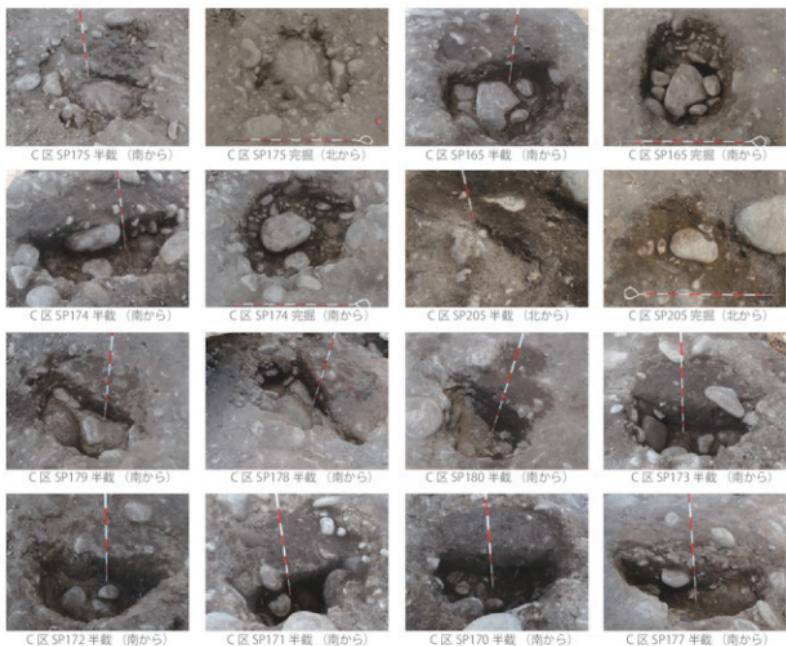
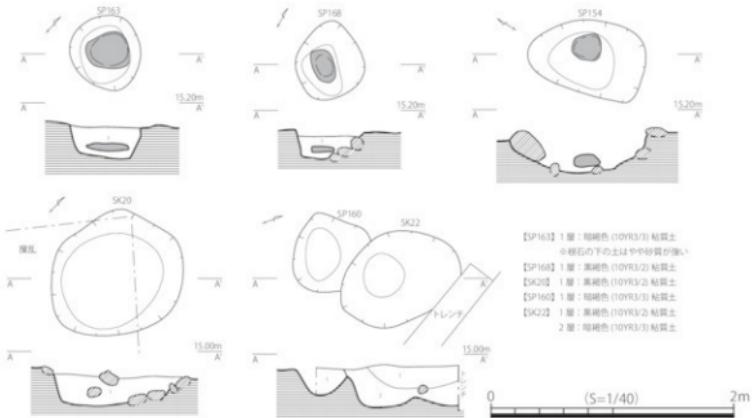
⑦SB07(第37図~第38図・図版10)

C区6818~7018グリット4層上面で検出した。梁間4間以上、桁行4間、梁間長6.1m以上、桁行長7.1mの総柱建物である。梁間にて横長になることから、桁行に二面庇を持つ建物と考えた方がよいかもしれない。その場合、身舎は3間×4間、梁間長5.1m、桁行長7.1mとなる。身舎の梁間中央の推定棟木ラインの延長上で、建物の外側に南北ともピット(SP150・SP175)があり、この建物に関連するものと考えた。主軸は北西~南東方向で、柱間寸法は梁間1.4~1.9m、桁行1.4~2.2mである。桁行方向に比べて、梁間方向は柱筋の通りが悪い。また、SB07を構成するSP150は、SB04を構成するSP155を切っており、相対的にSB07が新しい。

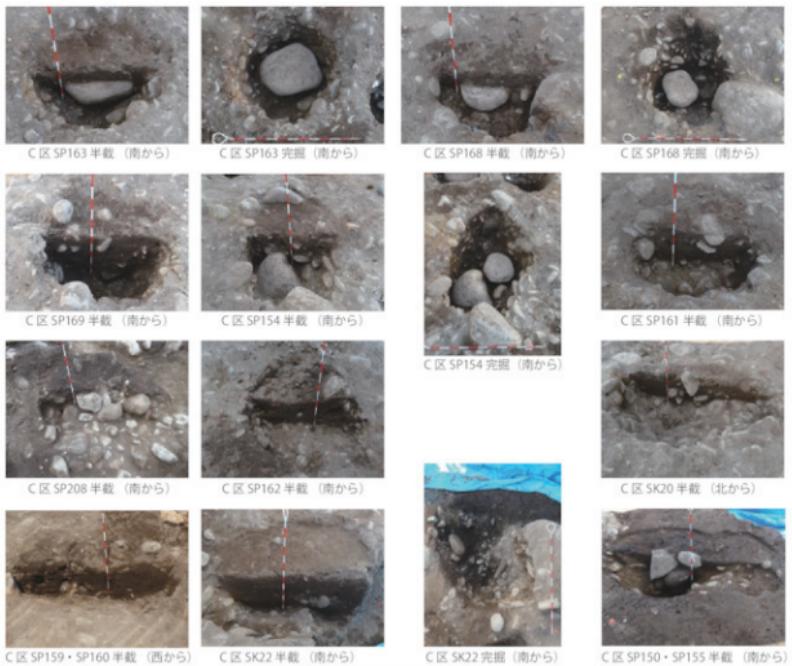
ピットは、長軸長0.5~1.1m、深さ0.2~0.3mで、SP154・SP163・SP165・SP168・SP169・SP174・SP175・SP205では、床面付近で礎盤石を検出した。礎盤石を検出したピットのうち、SP163・SP165・SP168・SP174は礎盤石とピット床面との間に土がかんでいる。このうちSP165では礎盤石を境に上下で砂質土と粘質土に分層できることから、ピット掘削後に若干埋め戻して礎盤石を据えたことが分かる。他の礎盤石検出ピットでは、礎盤石上下で埋土を区別することはできなかつた。



第37図 C区SB05+SB07遺構実測図① ($S=1/40$ ・ $S=1/80$)



第38図 C区 SB07 道構実測図②(S=1/40)



図版 10 C 区 SB07 柱穴写真



第39図 C区SB07出土遺物実測図 ($S=1/3$)

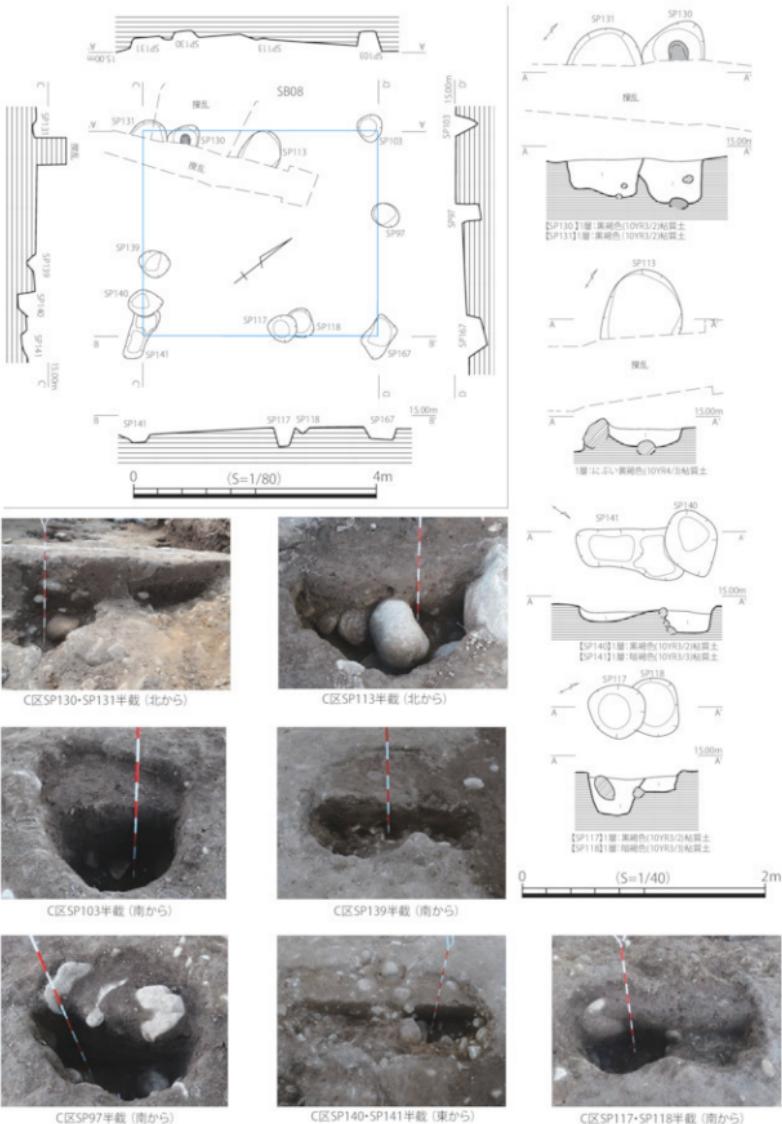
第11表 SB07出土遺物観察表

番号	遺物名	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	深度(cm)	生産地	備考
1	白磁端反碗	C区7018	SP154 (SB07)				中国	

遺物は、SP154 から白磁端反碗もしくは小杯の口縁部が出土している（第39図・第11表）。

⑧SB08（第40図）

C区7018グリット3”層上面で検出した。梁間2間、桁行2間、梁間長3.4m、桁行長3.8mの側柱建物である。主軸は北東—南西方向で、柱間寸法は梁間1.4～2.0m、桁行1.6～2.2mである。SB04とは平面プランが重なることから、時期的に前後関係になる。ビットは、長軸長0.4～0.5m、深さ0.1～0.3mで、SP130床面で礎盤石を確認した。埋土は黒褐色粘質土で拳大以下の礎を含む。遺物は出土していない。



第40図 C区SB08遺構実測図 ($S=1/40 \cdot S=1/80$)

第12表 土壙・柵列(SA)、掘立柱建物(SB)観察表

遺構名 (間)	規模 (m) (間)	柱間寸法(m) 梁間 桁行	基礎石		柱底	遺物	時期
			梁間	桁行			
SA01	—	5.6×3.2					16世紀以前?
SA02	—		1.4~2.0				17世紀初頭
SA03	—		2.8				
SA04	—		0.5~0.8				
SA05	—		2.1~2.8			平瓦、ハンネラ陶器	17世紀初頭
SA06	—		0.5				
SB01	(3)×6	(6.1)×10.8	2.0	1.6~2.0	○	唐津燒皿、無文銘、棒状鉄製品	17世紀初頭
SB02	(2)×(4)	(2.8)×(9.4)	2.0	2.0~3.0	○ ○	白磁輪花皿、陶器片、大型土製品	17世紀初頭
SB03	2×4	(2.7)×(7.6)	1.3~1.4	1.7~2.0	○ ○	赤絵磁器小杯、陶製植木鉢、湯桶小壺 朝鮮系酒類陶器、五輪造火鉢	16世紀末~18世紀前半
SB04	3×4	(4.2)×(6.8)	2.0	2.0	○ ○	土師器皿、滑石製石鍋	16世紀末~17世紀初頭か
SB05	2×(3)	4.0×(3.4)	2.0	0.9~2.0		染付碗、土瓶	18世紀頃
SB06	2×2~3	3.8×4.2	1.5~2.1	2.3~2.9	○ ○	棒状鉄製品	17世紀中頃か
SB07	(5)×4	(6.1)×7.1	1.4~1.9	1.4~2.2	○	白磁縫反襯	17世紀中頃か
SB08	2×2	3.4×3.8	1.4~2.0	1.6~2.2	○		17世紀中頃か
SB09	2×2	3.7~4.0×3.9	1.6~2.0	1.9~2.0			16世紀末~17世紀初頭か

(9) SB09 (第19図)

A区7622グリット4層上面で検出した。梁間2間、桁行2間、梁間長3.7~4.0m、桁行長3.9mの小規模建物である。主軸は北西~南東方向で、柱間寸法は梁間1.6~2.0m、桁行1.9~2.0mである。SA02とはピットを共有しており、ほぼ同時期であろう。ピットは長軸長0.5~0.8m、深さ0.3~0.4mである。基礎石は確認していない。埋土はやや砂質を帯びた黒褐色粘質土で、拳大以下の礫を含むものもある。遺物は出土しなかった。

(3) 土坑 (SK)

① SK12 (第41図)

C区7220グリットで検出した。当初は調査区南壁沿いで半分のみ見えていたが、土坑掘削時に床面付近から縄文土器が出土したことから、調査区を拡張して全面を検出した。長軸長0.72m、短軸長0.55m、深さ0.3mである。2層に分層でき、1層では土師器皿の小片が出土したが、2層では床面付近で縄文土器片が出土した(第42図・図版11・第13表)。1は胴部片。やや内湾気味の器形で内外面とも条痕調整、外面に指でつまんだいわゆるミミズ腫れ状の突帯を2条貼り付ける。2は1と同一個体と考えられる胴部片で、条痕地にミミズ腫れ状の突帯が3条確認できる。いずれも縄文時代前期前半の轟B式土器である。

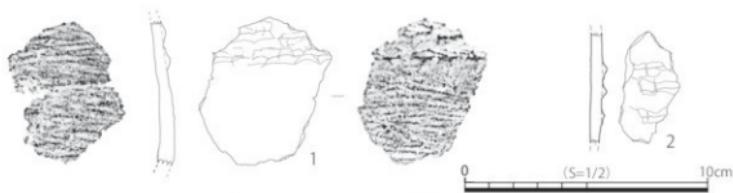
三城下周辺では、玖島城跡で同時期の土器が出土したほか、前後する時期のドングリピットも検出されている。そのため、検出当初は縄文時代の土坑と考えていたが、調査区を拡張した結果、土坑の規模や掘方が他の中近世のピットと遜色ないことや、埋土上層から土師器皿の小片が出土することを確認したことから、本来は中近世のピットで、縄文土器は後世の混入と考えている。

(4) その他のピット・土坑

第43図は、掘立柱建物や柵列にならなかつたピットや土坑のうち、記録をとったものを掲載した。SP33・SP202は床面付近で扁平な円礫が出土し、基礎石と考えられる。また、SP03・SP85では断面



第41図 C区SK12遺構実測図 (S=1/20)



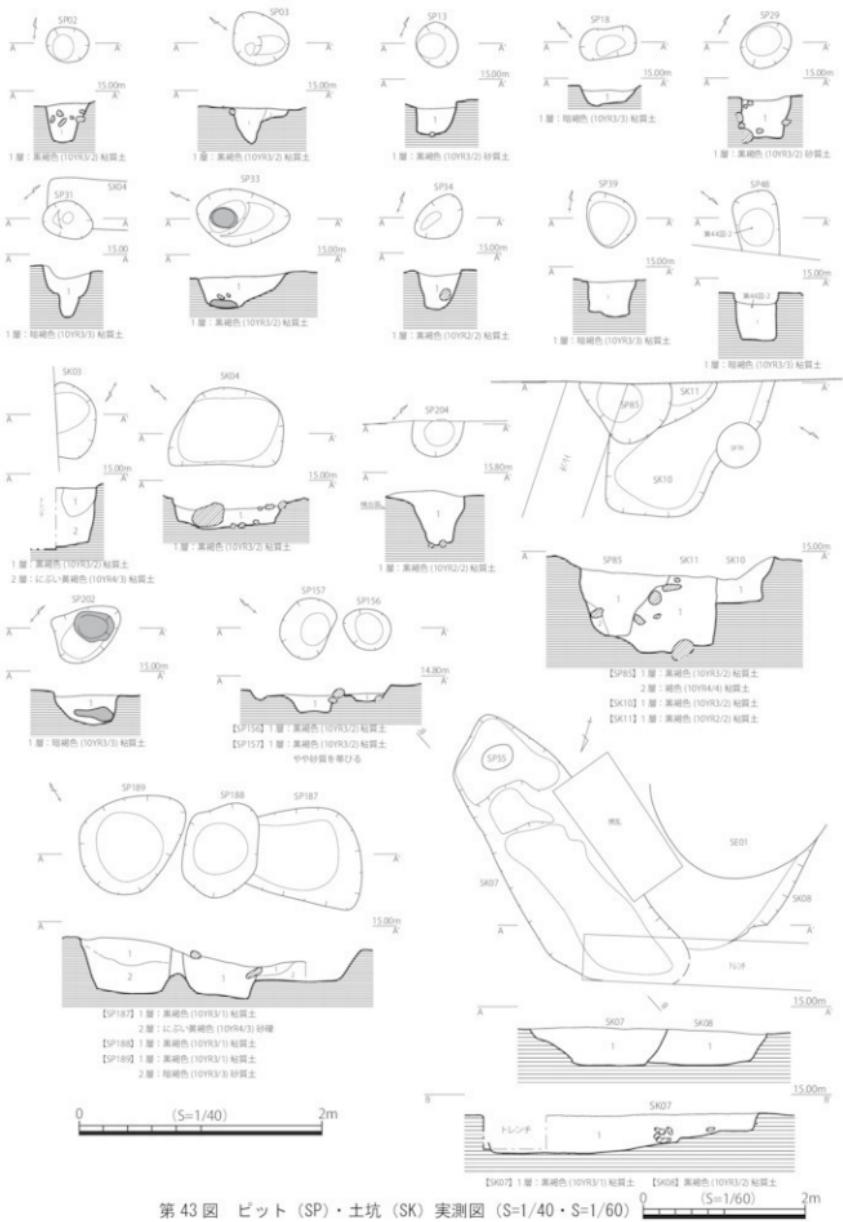
第42図 C区SK12出土遺物実測図 (S=1/2)



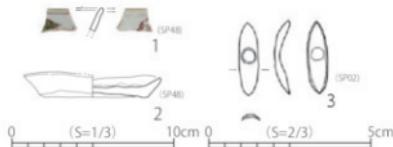
図版 11 C区 SK12 出土遺物

第13表 SK12出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地點	遺構・層位	口徑(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	生産地	備考
1	陶文上沿深縁	TIS7220	SK12	-	-	-	-	-
2	陶文上沿浅縁	TIS7220	SK12	-	-	-	-	-



第 43 図 ピット (SP)・土坑 (SK) 実測図 (S=1/40・S=1/60)



第44図 ピット (SP) 出土遺物実測図
(S=1/3・S=2/3)



図版12 ピット (SP) 出土遺物

第14表 ピット (SP) 出土遺物観察表

番号	遺物名称	調査地名	遺構・層位	口徑(cm)	底径(cm)	深度(cm)	生産地	備考
1	赤絵磁器	AIKC720	SP48	—	—	—	—	—
2	土師器皿	AIKC622	SP48	8.4	6.3	1.6	肥前	—
3	青銅製品	AIK	SP02	直径2.73	幅0.6	厚さ0.23	—	—

に柱痕跡が残り、SP31も分層はできなかつたが、掘方の形状から柱の痕跡がうかがえる。他のピットも掘方や側面形状は類似しているので、そのほとんどは柱穴と考えてよいだろう。

SK07・SK08は、後述する1660年を下限とする井戸(SE01)に隣接して掘削された長方形の土坑である。埋土はいずれも黒褐色(10YR3/1~10YR3/2)で、円礫を含んで非常に硬く締まる。SK08→SK07で切りあう。性格は不明だが、SK07は南北方向にスロープ状に傾斜することから、SE01に関連した作業場の可能性がある。

遺物は、SP02・SP48から出土した(第44図・第14表)。1は赤絵磁器の碗口縁部、内面には圓線1条と牡丹が、外側には人物像と圓線が1条わづかに確認できる。2は土師皿。外反気味に口縁部が短く立ち上がる。底部は糸切り後の粘土の処理が不十分で一部外側にはみ出ている。内面は底部から胴部の境界付近を中心に、指頭による押さえやなでを施す。3は不明銅製品である。平面紡錘形で中央には直径4mmほどの穴がある。非常に薄く、横断面は湾曲する。何らかの飾り金具と思われる。

(5) 井戸 (SE)

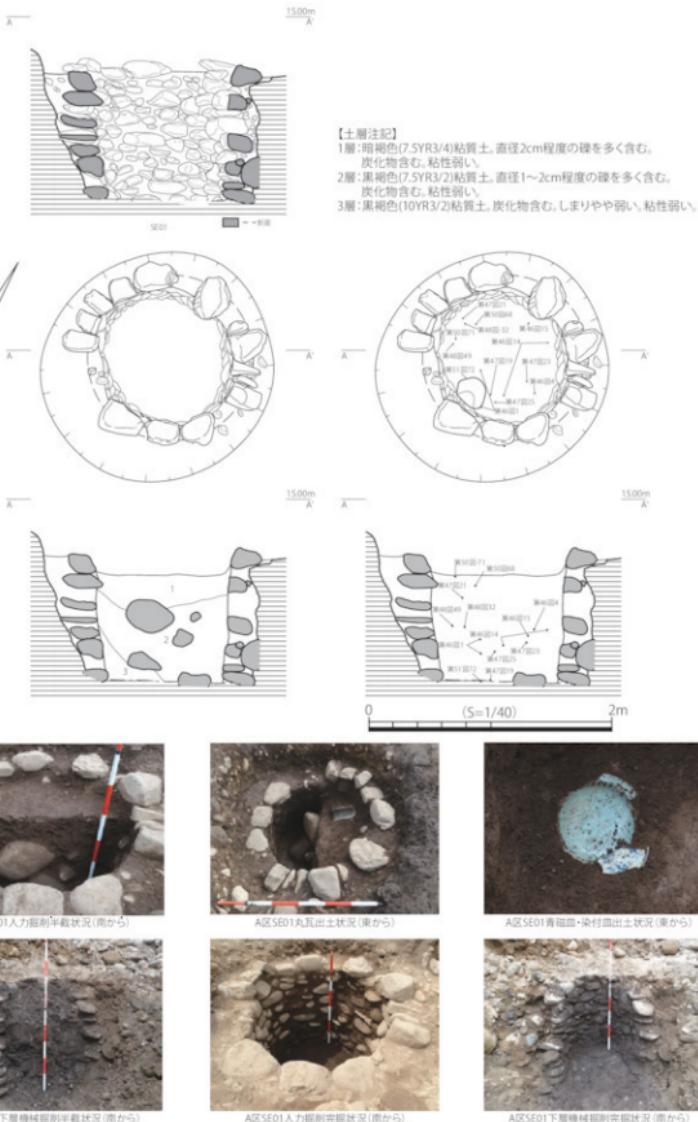
① SE01 (第45図)

A区7622グリット3層上面で、完全に埋没した状態で検出した。直径2m程度の円形土坑を掘削し、粘質土で目詰め及び裏込めしながら、角礫を小口が内側に向くように積上げて、内径1.2mの円形に組み上げている。検出面から約1.0mまでは人力にて半截し、土層堆積状況の記録や遺物の点上げを行ったが、それ以下については崩落の危険があったため重機にて半截し、遺物の回収及び写真撮影を行った。その結果、検出面から-3.5mほどで床面に達し、わずかに水の染み出しが確認できた。石積みは床面からほぼ垂直に積上げていた。埋土は暗褐色や黒褐色の粘質土でしりは弱く、炭化物を多く含む。遺物は大量に出土し、肥前陶磁などは上部の人力掘削を行った範囲で多く出土したが、土師器の壺は上下層から万遍なく出土した。埋土は一応3層に分層したものの、遺物の出土状況の観察では上下層で大きな時期差ではなく、あまり時間を置かずに一気に埋没したことをうかがわせる。

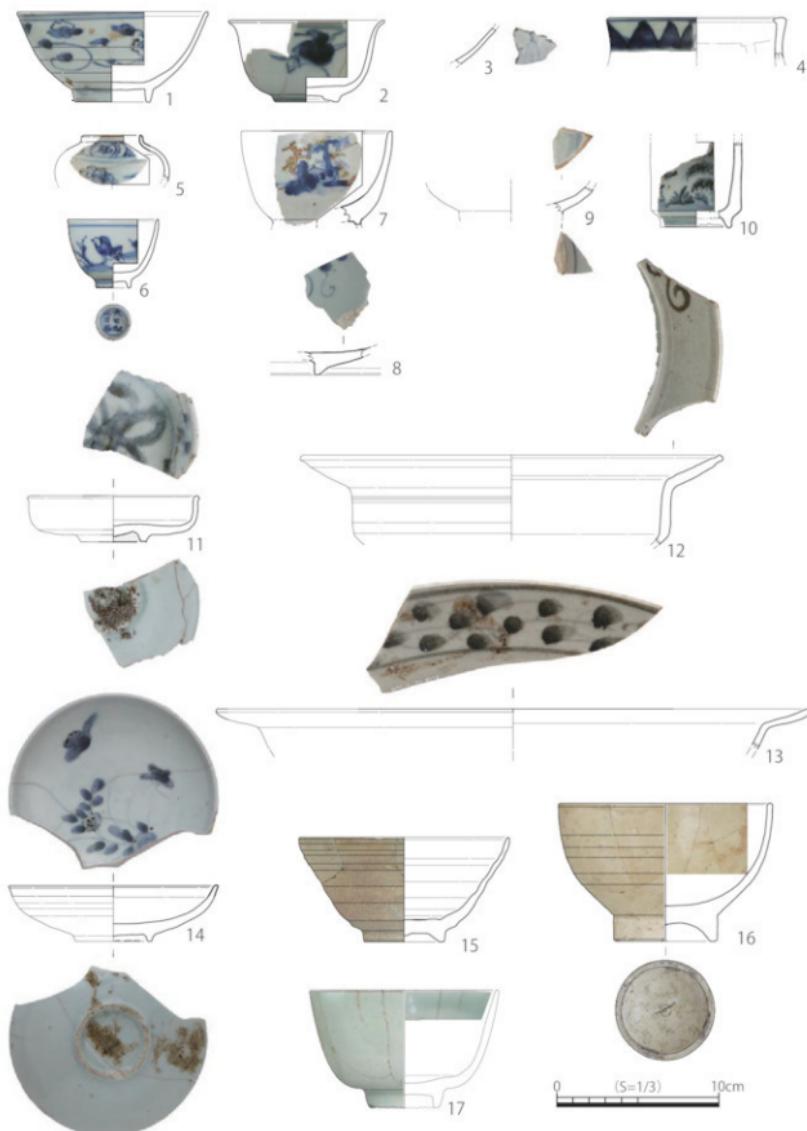
遺物は、肥前陶磁や土師器を中心に、埋土に混じって大量に出土した（第46図～第51図・図版13～図版14・第17表～第18表）。第46図1は染付碗。高台から体部が緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。体部下半には整形時の削りの痕跡を残し、器壁は薄く軽い。疊付から高台内面は露胎で、高台内は削り出しの痕跡を残す。外面には発色のよい呉須で草花文を描く。2は小型の碗。蛇の目高台で、口縁端部は強く外反する。器壁は薄く、外面に呉須で草花文を描く。3は碗の胴部片。器壁は非常に薄い。外面に呉須で鋸歯文を描くが、呉須の発色は悪い。4は火鉢もしくは灰落としの口縁部。円筒形の器形になると思われる。本来は口縁端部が内面にわずかに突出していたが、人為的に打ち欠いている。外面から内面の口縁部直下までは施釉するものの、それ以下は露胎とする。口縁部外面には、発色のよい呉須で鋸歯文を描く。5は小型壺。大きく張り出した体部に短く直立する口縁部がつく。口縁端部から口縁内面は露胎とし、口縁端部に鉄鏽を塗る。外面肩に「福」の字を、下半部には花を描く。以上は16世紀末～17世紀初頭の景徳鎮産と思われる。6は染付の猪口。風景画及び人物像を外面に描く。高台内には、「大明成化年成」の銘を描く。器壁は薄く呉須の発色もよい。1630～1650年頃の景德鎮産である。7は染付の素地に色絵を施す碗。分厚い底部から体部が湾曲して立ち上がり、口縁部は直立する。器壁はやや厚い。呉須で木や家などを描き、色絵は赤と緑を用いて木を描く。8は大型の染付皿の底部。高台疊付は軸を拭き取って露胎とする。底部内面には呉須で描いた植物の一部がみえる。9は染付碗の底部付近。胎土はやや赤みを帯び黒色粒子を含むことから、陶胎磁器と思われる。外面の高台付近に圈線が1条巡る。底部内面にも呉須の痕があるが文様は不明。10は染付の筒型碗もしくは猪口か。器壁は厚く全面に施釉し、高台疊付には砂が付着する。外面には呉須で草花文を描く。1620～1640年頃の肥前陶磁であろう。11は染付の皿。体部の立ち上がり部分が垂れ下がり、器形が不安定になっているが、焼きひずみによるものか。全面に透明釉がかかること、高台疊付から高台内にかけて、砂が厚く付着する。内面には発色の悪い呉須で花を描く。1630～1640年頃のいわゆる初期伊万里である。12は大型の磁器皿。体部から口縁部が屈曲し、口縁部は水平に近い。体部から口縁部の屈曲部内面と縁端部には内外面に浅い溝があり、口縁部内面には鉄絵で渦文を描く。13も12と同様の器形で、より大型である。口縁部内面に草花文を描くが、呉須の発色は悪い。14は染付皿。小さい高台から体部が湾曲して立ち上がり、口縁部はまっすぐ立ち上がる。

高台疊付のみ釉刺ぎして露胎とする。内面には呉須で草花文を描く。1630～1640年頃のいわゆる初期伊万里である。15は陶器碗である。胎土は黄褐色を呈し、黒色粒子を含んで粗い印象を受ける。高台内には兜巾が残り、体部内外面ともにロクロ成形時の凹凸を残す。また、全体的に貫入が入る。全面に施釉したのち、高台疊付のみ削って露胎とする。高台疊付周辺に胎土目の痕跡をわずかに残す。朝鮮陶磁の影響を受けたものか。茶器の可能性もある。17世紀前半頃であろう。16は大ぶりな陶器碗。高めの高台から体部が湾曲して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。体部上半を中心、削りの痕跡が残る。また、高台内は斜めに削り、中央には兜巾がわずかに残る。ほぼ全面に施釉し、高台疊付には砂目跡が4箇所残る。内外面とも一部貫入が確認できる。胎土は黄白色で黒褐色粒子を含む。1630～1650年頃の朝鮮陶器を意識した国産陶器で、茶器として使われたと考えられる。17は青磁碗。小さな高台から屈曲して直立気味に体部が立ち上がる。全面に施釉したのち高台疊付の釉を削り取つていて、疊付には砂目の痕跡とともに細かい剥離痕が連続する。釉の発色は透明に近いが、口縁内面は釉が厚くたまつており、あわい線がかった発色となる。1640～1650年代の波佐見焼か。

第47図18は白磁碗口縁部。体部下半で鋭く屈曲して直線的に口縁部まで伸び、端部はわずかに外反する。胎土は灰白色で黒色粒子を含む。19は大型の白磁碗。灰白色の胎土で透明釉を高台外側まで施釉する。高台疊付から内面にかけては、一部釉がかかるもののほぼ露胎で、疊付には砂目跡が2箇所残る。高台内面には兜巾がある。内外面とも貫入が認められる。15・16と同様、17世紀前半の茶器であろう。20は大型の白磁碗。高台が高く細い。施釉は高台内面に及び、疊付周辺には砂目跡がわずかに残る。底部内面には体部との境に段をもつ。また、高台と体部の境に接合痕が確認でき、体部整形後に高台を貼り付けたことが分かる。17世紀前半頃か。21は白磁小壺。全面施釉で高台疊付のみ釉刺ぎする。高台内面に兜巾を残す。1630～1650年頃の肥前陶磁。22は白磁の型打ち皿。体部内外面に型打ちの起伏が残る。黒色粒子を含む灰白色の胎土に透明釉を全面施釉する。高台疊付には砂が付着する。23は染付の仏飯具。脚部から体部にかけて内外面に施釉し、高台付近は露胎とする。体部外面には呉須により圓線と梅文を施す。1650～1690年頃か。24は小型の青磁香炉である。小片が多く完全に接合はしなかったが、口縁部片と体部から底部の資料を図上で合成した。起伏のある筒形の体部で口縁部は内側に張り出し、底部には渦文を配した短い脚が3箇所つく。高台は二重高台。釉は外面から底部にかけて施釉し、内面は露胎とする。1630～50年代の波佐見焼であろう。25は大型の青磁皿。直立気味の体部から口縁部が短く外に屈曲する。全面施釉で高台疊付を釉刺ぎし、周辺に砂が付着する。高台内面には削り整形の痕跡を残す。内面見込みに草文を施文し、片切彫りによって陰影を表現する。体部内面には、縦方向に凹線を連続して配する。1630～1650年代の波佐見焼。26は青磁壺。口縁部を欠損するもののほぼ完形である。全面施釉ののち、高台疊付のみ釉刺ぎしており、疊付周辺には砂が付着する。高台内面は中央を深く削り、段を形成する。体部上半に2条の凹線、頸との境は段をなす。頸部は釉の掛かり方にむらがあり、白色の素地が一部透けている。1630～1650年代の波佐見焼である。27は小型の褐釉皿。高台疊付から内面は露胎とし、それ以外は施釉する。高台内面はアーチ状に削り、中央はわずかに兜巾が残る。28は褐釉陶器の小壺か。外面から口縁部内面にかけて鉄釉が掛かるが、内面の体部以下は露胎。29は大型の壺把手付近である。黒色粒子を含む胎土で外面の把手直下には5条の沈線を確認できる。外面には暗緑色の釉が掛かる。東南アジア産か。30は甕胴部か。器壁は4mmと非常に薄く、内面には同心円の当て具痕が、



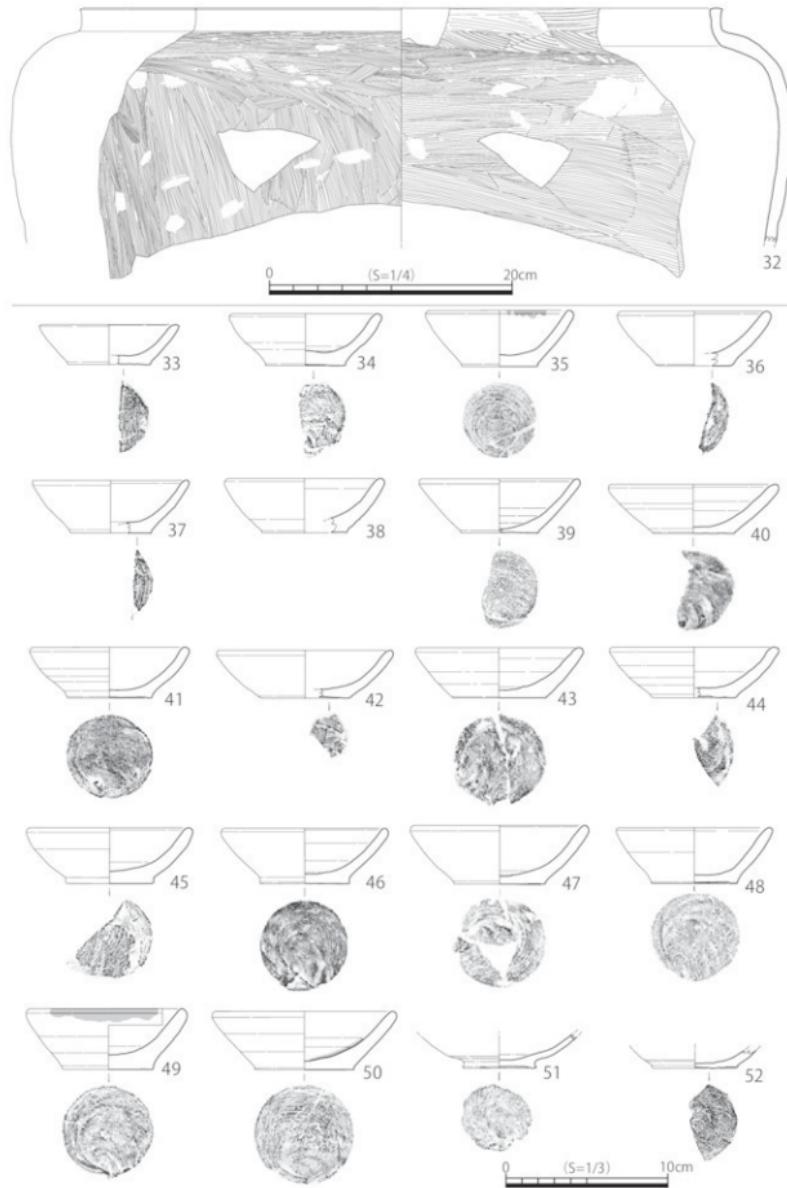
第45図 A区SE01遺構実測図 (S=1/40)



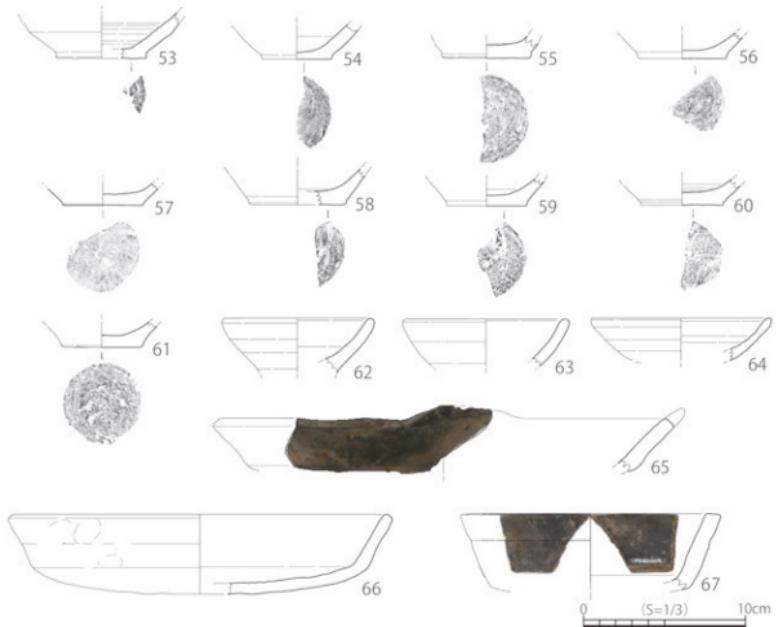
第46図 A区SE01出土遺物実測図①($\$=1/3$)



第47図 A区 SE01 出土遺物実測図②($S=1/3$)



第48図 A区 SE01 出土遺物実測図③(S=1/3・S=1/4)



第49図 A区SE01出土遺物実測図④($S=1/3$)

外面には平行タタキの痕が明瞭に残る。外面には三角突帯を1条貼り付け、深い刻みを入れる。31は鉢である。口縁部は外側に肥厚し、直下に三角突帯を1条貼り付ける。内外面とも鉄軸が掛かるが、口縁上面は軸刺ぎする。内面にはロクロ成形の凹凸が残る。

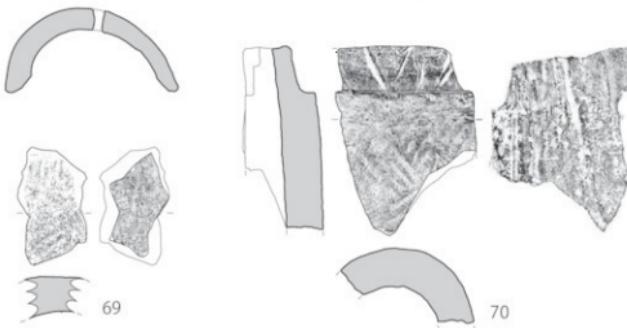
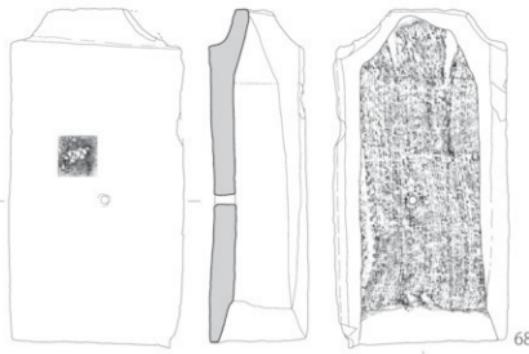
第48図32は瓦質の茶釜か。口径49.0cmと非常に大型で、直立気味の体部から肩で強く内傾し、口縁部が短く直立する。内外面ともハケメによる調整で、部分的に指オサエも残る。口縁部内面には剥落痕が連続するが、被熱によるはじけの可能性がある。

第48図33～第49図64は土師器壊である。口径9.5～10.5cm程度、器高3.5cm前後、糸切り底から内湾気味に立ち上がって口縁部にいたる器形で、器壁は6～7mmとやや厚手のものが多い。胎土に褐斑を含み、内外面に煤が付着することから、主に灯明皿として使われたようである。口縁部から体部の立ち上がり部分は丁寧になでるものが多く、糸切り後の粘土のはみ出しが残さない。また、内面にはロクロ成形時の回転ケズリの痕跡を残さず、丁寧になでているものが多いが、見込み部分を強くなれるものや(41・43・47・60)指で押さえるもの(48)、体部の立ち上がり付近を強くなれるもの(49・55・57・58・59)もある。51・52は、底径が小さくやや薄手で体部の内溝がきつく、ロクロによる回転ケズリの痕痕や、底部外面に糸切り離し後の粘土のはみ出しが残る点で他の土師器と異なる。

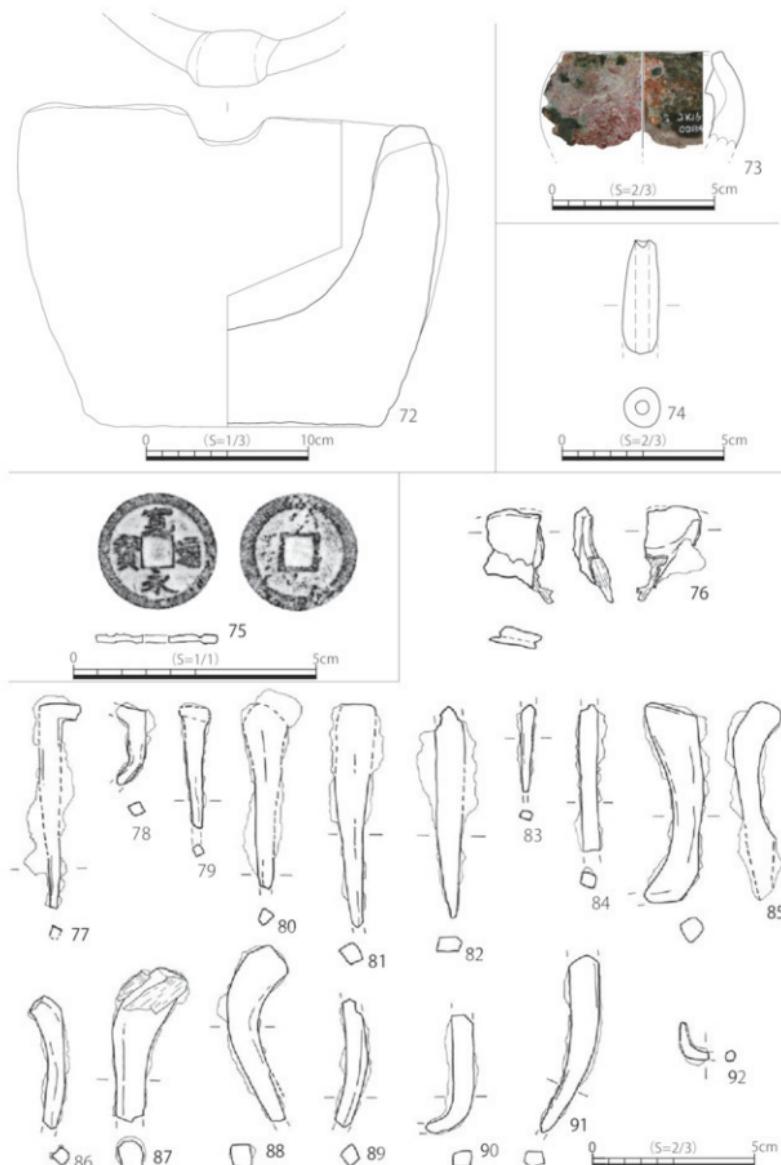
65～67は瓦質土器で、焙烙もしくは土鍋であろう。65は体部で屈曲し口縁が直線的に外反する器形で、口縁部に1箇所突起を有する。外面には煤が付着する。66は丸底気味の底部から体部が直



图版 13 A 区 SE01 出土遗物①



第50図 A区 SE01 出土遺物実測図⑤(S=1/4)



第51図 A区SE01出土遺物実測図⑥(S=1/1・S=2/3・S=1/3)



図版 14 A 区 SE01 出土遺物②

線的に立ち上がる器形で、ロクロ成形後に口縁部付近を指オサエして整えている。底部外面を中心には煤の痕跡が残る。67は66と器形は類似するが器壁が厚く、口縁端部は平坦面を形成する。内外面とも炭化物を吸着させて黒色化している。

第50図は瓦類である。平瓦・丸瓦のみ出土し軒丸・軒平瓦は出土していない。また、いずれも煉瓦やキラ粉はない。68は完形の丸瓦である。四面から玉縁部にかけて布目圧痕が残り、頭側でコピキB痕跡がわずかに残る。両側縁及び先端部は、布目痕を強くなじませて平坦面を作る。凸面は丁寧なまで調整で平滑に整えるが、格子目たたきがわずかに残る。穿孔あり。69・70は朝鮮系瓦である。いずれも丸瓦の破片で、70には玉縁部が残る。厚手で、胎土には白色粒子や黒色粒子など混入物が多い。69は四面に布目痕が明瞭で、凸面には横糸状のタタキ痕が残るが、なじませて不鮮明である。

第17表 SE01出土土器観察表

番号	遺物名稱	調査地区	遺物・層位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	生産地	備考
1	柒付瓶	A57622	SE01-5	11.6	4.5	5.5	中国	
2	柒付瓶	A57622	SE01(下層確認-2m)	9.4	3.8	5.0	中国	
3	柒付瓶	A57622	SE01(下層確認-2m)	-	-	-	中国	
4	柒付火鉢?	A57622	SE01-1	10.7	-	(2.5)	中国	
5	柒付小壺	A57622	SE01(下層)	3.4	-	(2.9)	中国	
6	柒付口	A57622	SE01(下層確認-1m)	5.4	2.0	4.2	中国	
7	柒付瓶	A57622	SE01(下層)	9.0	-	(5.7)	肥前	
8	柒付瓶	A57622	SE01(下層確認-2m)	-	2.1	(1.7)	肥前	
9	柒付瓶	A57622	SE01(下層確認-2m)	-	-	(1.7)	肥前	
10	柒付口	A57622	SE01(下層)	-	4.2	(5.2)	肥前	
11	柒付瓶	A57622	SE01(下層確認-1m)	10.3	4.0	2.8	肥前	
12	短脚大瓶	A57622	SE01(下層確認-1m)	25.6	-	(5.5)	肥前	
13	短脚大瓶	A57622	SE01(下層確認-1m)	26.0	-	(5.5)	肥前	
14	柒付瓶	A57622	SE01(下層)	12.8	4.7	2.4	肥前	
15	柒付瓶	A57622	SE01-13	12.8	4.8	6.4	肥前	
16	柒付瓶	A57622	SE01(下層確認-1m)	12.9	6.4	8.5	肥前	
17	青磁瓶	A57622	SE01(下層)	11.4	4.7	7.3	肥前	
18	白磁瓶	A57622	SE01(下層)	12.0	-	(5.0)	肥前	
19	白磁瓶	A57622	SE01-14	-	5.4	(2.3)	肥前	
20	白磁瓶	A57622	SE01(下層確認-1m)	-	7.4	(5.6)	肥前	
21	白磁小杯	A57622	SE01-8	7.6	3.0	4.6	肥前	
22	白磁堅打小壺	A57622	SE01(下層確認-2m)	-	5.8	(2.5)	肥前	
23	柒付丸飯糰	A57622	SE01-2	7.7	3.6	5.8	肥前	
24	青磁香炉	A57622	SE01(下層)	7.4	5.8	(5.7)	波佐見	
25	青磁瓶	A57622	SE01-4	19.8	6.8	5.5	波佐見	
26	青磁瓶	A57622	SE01(下層)	9.6	6.9	19.0	波佐見	
27	湯瓶	A57622	SE01(下層確認-1m)	8.0	3.9	2.5	肥前	
28	湯瓶	A57622	SE01(下層)	4.6	-	(2.2)	肥前	
29	陶器瓶	A57622	SE01(下層)	-	-	-	東南アジア	
30	陶器盤	A57622	SE01(下層)	-	-	-	肥前	
31	陶器輪	A57622	SE01(下層確認-2m)	43.2	-	(8.4)	肥前	
32	貝壳飾	A57622	SE01(下層確認-1m)	48.4	-	(19.4)	—	
33	土器鋤	A57622	SE01(下層)	8.2	5.2	2.5	—	
34	土器鋤	A57622	SE01(下層)	8.8	4.9	3.2	—	
35	土器鋤	A57622	SE01(下層)	8.8	4.8	3.4	—	
36	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	9.0	4.4	3.4	—	
37	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	9.4	4.6	3.5	—	
38	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	9.4	5.0	3.3	—	
39	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	9.8	4.8	3.3	—	
40	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-1m)	10.1	5.0	3.0	—	
41	土器鋤	A57622	SE01(下層)	9.0	5.2	3.1	—	
42	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	10.6	5.6	2.9	—	
43	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	10.0	5.8	3.1	—	
44	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	9.8	5.0	3.1	—	
45	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-1m)	10.0	5.4	3.4	—	
46	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	10.0	5.4	3.4	—	
47	土器鋤	A57622	SE01(1層+2層)	10.6	5.6	3.6	—	
48	土器鋤	A57622	SE01(1層)	9.2	5.2	3.4	—	
49	土器鋤	A57622	SE01(2層)	9.4	5.5	4.0	—	
50	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	11.0	6.2	3.6	—	
51	土器鋤	A57622	SE01(1層)	-	4.5	(2.1)	—	
52	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	-	5.0	(1.1)	—	
53	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	-	5.4	(2.8)	—	
54	土器鋤	A57622	SE01(2層)	-	4.2	(2.1)	—	
55	土器鋤	A57622	SE01(2層)	-	5.2	(1.3)	—	
56	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	-	5.2	(1.6)	—	
57	土器鋤	A57622	SE01(2層)	-	4.8	(1.4)	—	
58	土器鋤	A57622	SE01(1層)	-	5.5	(2.2)	—	
59	土器鋤	A57622	SE01(1層)	-	5.0	(1.6)	—	
60	土器鋤	A57622	SE01(1層)	-	5.6	(1.6)	—	
61	土器鋤	A57622	SE01(1層)	-	5.0	(1.6)	—	
62	土器鋤	A57622	SE01(下層確認-2m)	9.0	-	(3.3)	—	
63	土器鋤	A57622	SE01(2層)	9.7	-	(2.9)	—	
64	土器鋤	A57622	SE01(2層)	11.0	-	(2.6)	—	
65	瓦質板他・土器	A57622	SE01(1層)	27.0	-	(4.0)	—	
66	瓦質板他・土器	A57622	SE01(2層)	22.8	-	4.9	—	
67	瓦質板他・土器	A57622	SE01(2層)	14.4	-	(4.7)	—	

第18表 SE01出土瓦・石製品・金属器観察表

番号	遺物名称	調査地区	遺構・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	生産地	備考
68	丸瓦	AS(7622)	SE01(下限確認-1a)	27.8	14.5	1.8	—	
69	丸瓦	AS(7622)	SE01(1)	—	—	—	朝鮮系	
70	丸瓦	AS(7622)	SE01(下限確認-1a)	—	—	—	朝鮮系	
71	平瓦	AS(7622)	SE01-6	27.0	23.7	1.8	—	
72	大型石製容器	AS(7622)	SE01-15	24.5	18.0	19.8	—	
73	石製坪塙	AS(7622)	SE01(1層)	5.4	—	(3.0)	—	
74	土鍤	AS(7622)	SE01(2層)	3.5	1.1	1.2	—	
75	寛永通宝	AS(7622)	SE01(1層)	2.4	2.4	0.1	—	
76	不明鉄製品	AS(7622)	SE01(下限確認-2a)	2.2	1.6	1.0	—	
77	釘	AS(7622)	SE01(1層)	7.0	1.9	1.4	—	
78	鍵	AS(7622)	SE01(1層)	2.5	1.7	0.5	—	
79	釘	AS(7622)	SE01(1層)	3.8	1.0	0.4	—	
80	釘	AS(7622)	SE01(1層)	6.2	1.9	1.3	—	
81	釘	AS(7622)	SE01(2層)	6.8	1.7	0.7	—	
82	釘	AS(7622)	SE01(2層)	0.7	1.9	0.5	—	
83	釘	AS(7622)	SE01(下限確認-1a)	2.7	0.7	0.6	—	
84	釘	AS(7622)	SE01(1層)	4.5	1.0	0.8	—	
85	不明鉄製品	AS(7622)	SE01(2層)	6.1	2.1	1.7	—	
86	不明鉄製品	AS(7622)	SE01(2層)	4.1	1.2	1.1	—	
87	不明鉄製品	AS(7622)	SE01(2層)	(4.7)	2.4	1.6	—	
88	不明鉄製品	AS(7622)	SE01(2層)	5.4	1.9	1.5	—	
89	不明鉄製品	AS(7622)	SE01(2層)	3.9	1.1	1.3	—	
90	不明鉄製品	AS(7622)	SE01(2層)	3.6	1.7	1.0	—	
91	不明鉄製品	AS(7622)	SE01(2層)	5.5	1.9	1.1	—	
92	釘・針	AS(7622)	SE01(1層)?	1.3	0.9	0.3	—	

70は凹面全体に布目压痕が残り、凸面には綾杉状のタタキ痕が残る。玉縁部を中心に入念になで調整を加える。また、分割截面が凹面寄りに認められる。71は平瓦である。凹面・凸面とも丁寧ななで調整が施されるが、凹面にはコビキBの痕跡を残す。

第51図72は、大型石製容器である。多孔質な玄武岩を割り込んで容器とする。口縁部を割り込んで片口を作っており、手水鉢の可能性がある。73は石製坪塙である。細粒砂岩製で胴部は丸みを帯びている。外面は赤褐色のガラス質の皮膜に覆われ、内面は錆色を吹いた金属が付着している。青銅製品の鋳造に用いられたものか。74は土鍤。下半部を欠損する。

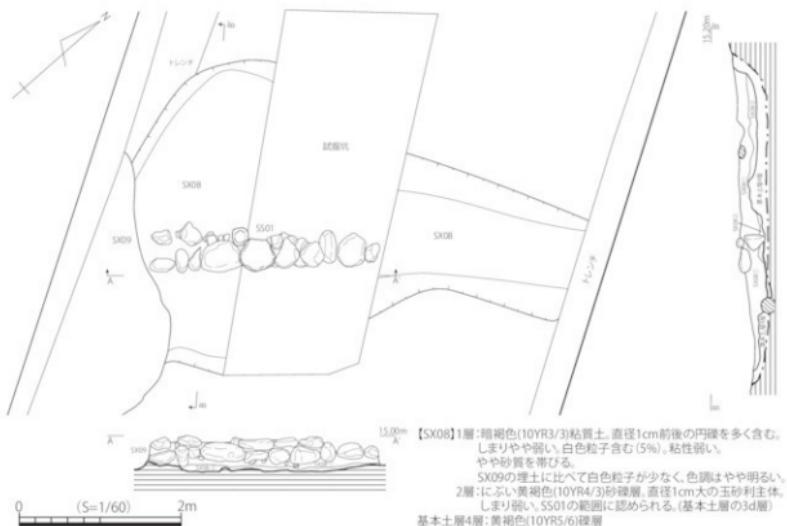
75は寛永通宝である。「寶」の字体から古寛永である。76は不明青銅製品。板状の青銅を折り曲げて纖維状の有機質を挟んでいる。77～92は鉄製品。77～84は直線的で断面矩形であり、鉄釘か。77・79は頭部を明瞭に確認できる。78は両端部が屈曲しており、鍵の可能性もある。85～91は湾曲した不明鉄製品である。断面矩形で、85-87-88は部分的に扁平になる。92は断面円形の小型品で、釘先端部と思われる。

(6) 石列 (SS)

① SS01 (第52図)

B区7220調査区3層上面で検出した。平成26年度の範囲確認調査TP8で検出したもので、本調査で再検出して周辺の精査を行った。扁平な川原石を2～3段積上げており、長さ2.8m、高さ40cm、幅50cmに渡って北東～南西方向に伸びることを確認した。平成26年度範囲確認調査のTP8部分が最も残りがよく、周辺は近現代の搅乱が深く入り、後述するSX09にも切られていって、かなり削平を受けたものと推測される。

断ち割り断面や調査区壁面の土層観察では(第12図)、SS01からB区北壁までに3a・3b層が堆積し、これらは黄褐色土と黒褐色土の混合層であることから、4層のくぼ地を人為的に埋め立てた造成土と推測される。この3a・3b層を切るように南側にSX08の落ち込みがあり、この床面に玉砂利層(B



B区SX08土層(東から)



B区BX08完掘(西から)



B区SX08挖(東から)



B区SS01検出状況(南から)

第52図 B区SS01・SX08遺構実測図 (S=1/60)



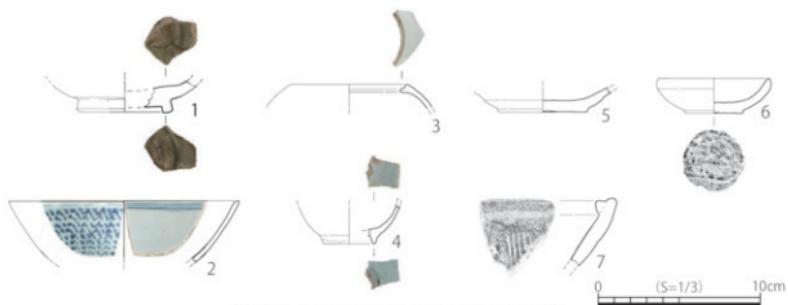
第 53 図 B 区 SS01 出土遺物実測図 ($S=1/3$)



図版 15 B 区 SS01 出土遺物

第 19 表 SS01 出土遺物観察表

番号	遺物名稱	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	漆付碗	BCK7220	SS01 (検出)	—	—	(2.0)	中國	
2	漆付碗	BCK7220	SS01 (検出)	—	—	(2.9)	肥前	
3	土師器	BCK7222	SS01 (検出)	—	5.2	(1.6)	—	
4	土師器	BCK7220	SS01 (検出)	6.2	3.4	1.7	—	



第 54 図 B 区 SX08 出土遺物実測図 ($S=1/3$)



図版 16 B 区 SX08 出土遺物

第 20 表 SX08 出土遺物観察表

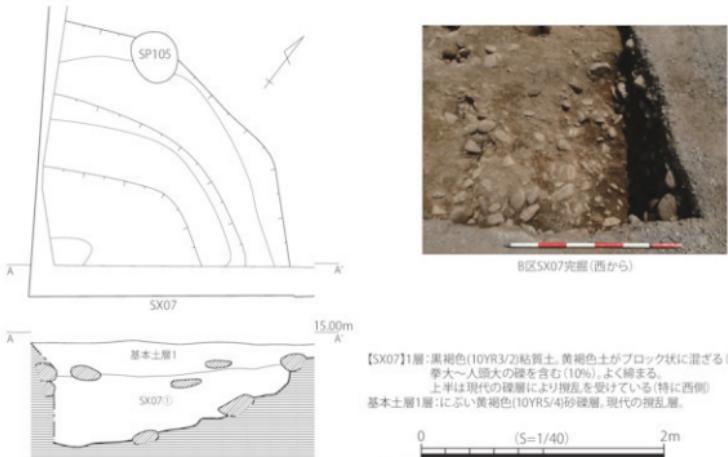
番号	遺物名稱	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	青釉碗	BCK7220	S308	—	—	5.8 (1.9)	中國	
2	漆付碗	BCK7220	S308	14.2	—	(3.6)	中國	
3	漆物 (魚形文)	BCK7220	S308	7.0	—	(1.4)	肥前	
4	白磁小杯	BCK7220	S308	—	—	3.6 2.2	中國	
5	土師器	BCK7220	S308	—	—	5.4 1.3	—	
6	土師器	BCK7220	S308	7.0	3.5	2.2	—	
7	瓦質塗跡	BCK7220	S308	—	—	(4.2)	—	



第55図 B区SX01出土遺物実測図 (S=1/3)

第21表 SX01出土遺物観察表

番号	遺物名	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	生産地	備考
1	陶器碗	B区T420	S3(0)	-	6.2	(4.0)	肥前	
2	陶器小壺	B区T420	S3(0)	-	6.6	(4.7)	肥前	
3	染付碗	B区T420	S3(0)	-	3.2	(1.3)	肥前	
4	白釉小杯	B区T420	S3(0)	-	-	2.6	(1.0)	肥前



第56図 B区SX07遺構実測図 (S=1/40)

区東壁土層の3c・3d層、第52図のSX08 2層)を敷設し、SS01の石を積上げ、円碟を多く含む暗褐色粘質土で埋め戻している。このことから、SS01は造成によりB区北側に形成した平坦面の崩落を防ぐための土留めの可能性が高い。

遺物は石積み内から出土したものを掲載した(第53図・第19表)。1は染付碗口縁部で、くすんだ吳須で外面に圓線1条と円文、内面に圓線2条を施す。明染付であろう。2は網目文をもつ碗口縁部である。3は土師器の坏底部。やや薄手で底部は回転糸切り後の板状圧痕が残る。ロクロから切り離し時の粘土のはみ出しありで除去している。内面は体部の立ち上がり付近を指で押さえている。胎土は白色粒子や褐斑を多く含む。4は土師皿。底部から内溝しながら体部が立ち上がり、口縁端部は尖る。胎土に褐斑を多く含む。口縁部に煤が付着しており、灯明皿であった可能性が高い。

以上の遺物は、2を除くと17世紀前半頃でまとまる。SS01はかなり搅乱を受けており、2は混入の可能性がある。

(7) 不明遺構 (SX)

① SX01 (第16図)

B区7420グリット3層上面で検出した溝状遺構である。表土剥ぎ後の清掃時、SX01検出地点に配水管敷設に伴う南北に伸びる搅乱溝を確認し、人力にてスコップ等で荒く掘削していたが、16世紀後半から17世紀前半の遺物が出ていることに気づき、精査を行ったが既に掘りきっていた。作業員への聞き取りや現場の状況を総合すると、南北方向に幅0.3m程度の浅い溝状遺構が伸びていた可能性が強い。SX01の推定ラインを第10図に点線で記入した。

第54図はSX01出土遺物である。1は唐津焼の碗底部付近。体部下位まで灰釉を施し、高台以下は釉を剥いで露胎とする。外面には鉄釉で円文を描く。2は唐津焼の小壺。褐釉が全体に掛かる。胎土の赤みが強く武雄産か。3は明染付小碗の底部。蛇の目高台で、見込みには釣りをする人物画を描く。4は白磁小杯の底部。全面施釉し高台疊付の釉を描きとる。高台疊付周辺には砂が付着する。これらの陶磁器は16世紀末～17世紀初頭と考えられる。

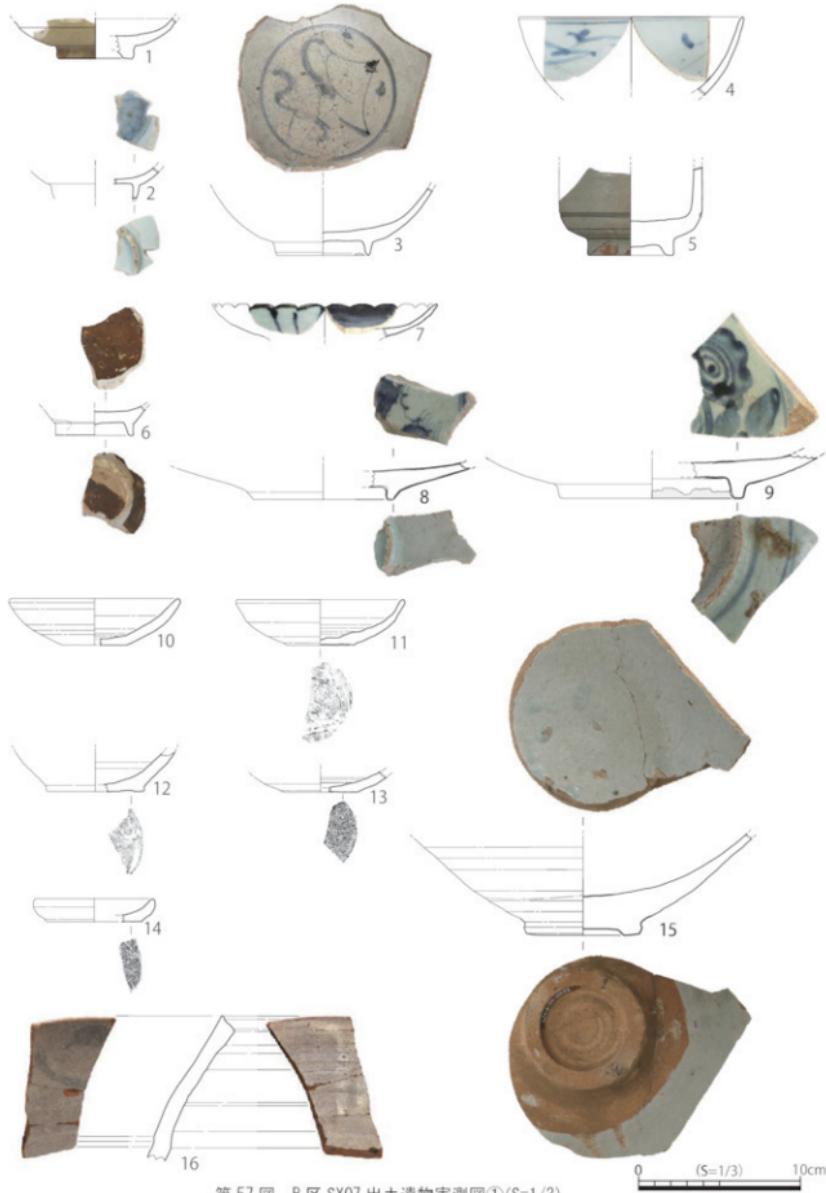
② SX07 (第56図)

B区7420グリット3層上面で検出した。B区南西隅にあたり、全体の1/4程度を検出したが、大半は調査区外となる。検出部分からの推定では、直径2.0mほどの円形土坑となる。擂鉢状の落ち込みで、検出面からの深さは0.6mである。遺物が大量に出土しており、廃棄土坑の可能性が高い。

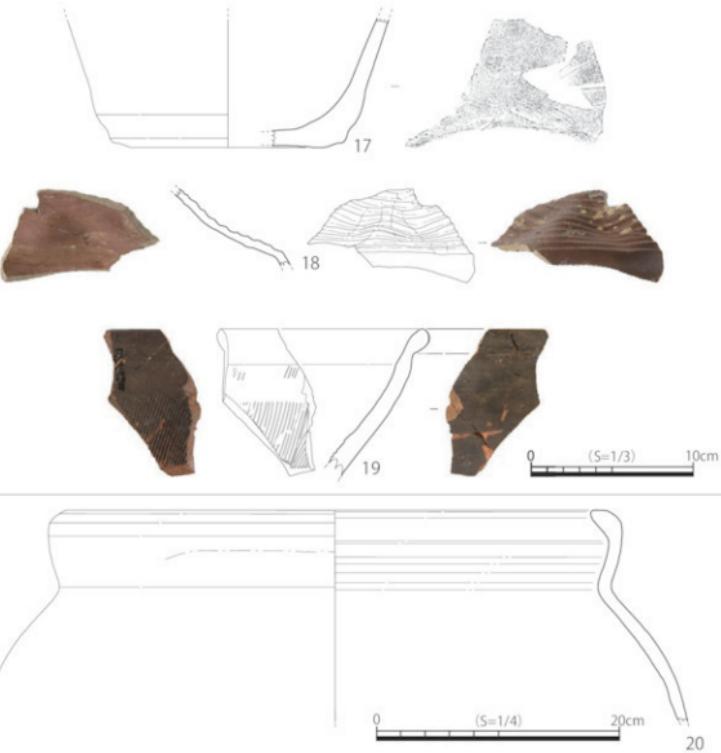
第57図～第59図は出土遺物である。1は碗底部。灰白色の素地に光沢のある透明釉を体部内外面に施釉するが、見込みは輪状に描き取っている。高台は露胎である。2は染付碗底部で、高台を高く削りだす小野分類染付碗B群である。見込みには花文を描く。3は染付碗底部で、くすんだ発色の呉須で見込みに退化した荒穢文を描く。17世紀後半の東南アジア向けの波佐見焼との教示を得た。4も雲竜荒穢文を外面に描いた波佐見焼の染付である。5は唐津焼で、高台から体部が直立する。高台疊付から内面は露胎で、他は灰釉がかかる。6は褐釉碗。高台周辺は露胎である。見込みおよび高台内には砂がわずかに付着する。7は輪花皿。内面に瑠璃釉をかけ、外面は呉須で口縁部を縁取り輪花から垂線を描く。景德鎮産か。8は染付大皿の底部。全面に施釉後、高台疊付を釉剥ぎする。疊付には一部砂が付着する。見込みには呉須で文様を描くがモチーフははっきりしない。明青花であろう。9は漳州窯系の染付大皿の底部である。全面施釉後に高台疊付を釉剥ぎするが、疊付から高台内にかけて粗穢が付着した痕跡が残る。体部外面には圈線を3条みえ、見込みにはくすんだ発色の呉須で花文を描く。

10～14は土師器。10～13は小杯で、10・11・13は器壁が薄く、ロクロによる回転ケズリ成形時の凹凸が残る。また、11は底部糸切り後なので調整が不十分で、粘土のはみ出しが一部残る。12は厚手でロクロ成形時の凹凸をなで消している。14は土師器皿。体部が内湾しながら立ち上がり、口唇部は尖り気味になる。底部は糸切り後の板状圧痕が残る。

15は唐津焼の大皿底部。高台の削りだしが低く、底部は分厚い。灰釉が掛かるが、体部下半から



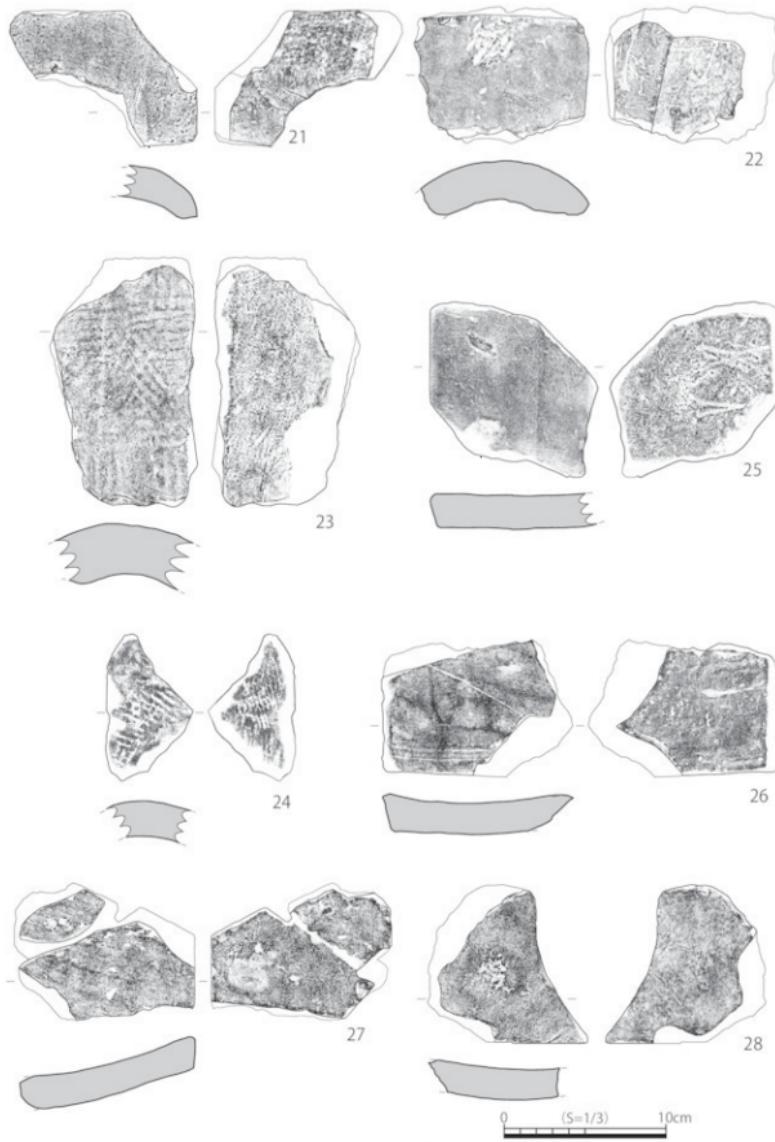
第57図 B区 SX07出土遺物実測図①($S=1/3$)



第58図 B区SX07出土遺物実測図②(S=1/3・S=1/4)

高台周辺は露胎となる。見込みには胎土目の目跡が4箇所確認できる。16は唐津焼の鉢口縁部。口クロ成形で成形時の凹凸が外面に残る。口縁部内面には鉄絵で円文を描く。第58図17は甕底部。底部から体部の立ち上がりはやや丸みを帯びる。全体に自然釉が掛かり、体部下端部には平行タタキの痕跡が残る。胎土は暗褐色で白色粒子や黒色粒子等の混和材が多く含まれる。東南アジア産であろうか。18は鉄釉の壺頸部。薄手で回線を多条にめぐらす。凹凸があるが、焼ひずみか。17世紀後半の唐津焼であろう。19は擂鉢口縁部。口縁部が外側に肥厚し、口縁内面には稜線がある。全体に鉄釉が掛かる。20は唐津焼の大甕口縁部。口縁部が肩部から直立して立ち上がり、口縁端部は内傾する。口縁部上端から外面は露胎で、ほかは鉄釉が掛かる。胴部内面には同心円の当て具痕が連続して残る。口縁部形態と内面の当て具痕から17世紀前半であろう。

第59図は瓦類である。21は丸瓦の頭先端部。燻し瓦で凹部に布目痕とコビキBが残るが、先端部や側面は強くなじ消して平坦面をなす。22も丸瓦。燻し瓦で側面の平坦面がみえる。23は朝鮮系の丸瓦。器壁は分厚く、胎土には砂粒や黒色粒子・白色粒子を多く含む。凹面に布目痕が明瞭に残り、



第59図 B区SX07出土遺物実測図③($S=1/3$)



図版 17 B 区 SX07 出土遺物

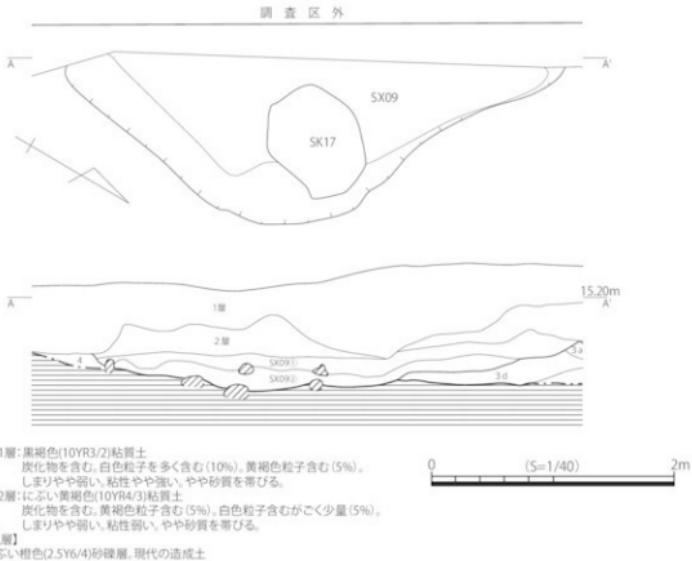
第22表 SX07 出土遺物観察表

番号	遺物名	調査地区	遺構・層位	口径(cm)	直径(cm)	深さ(cm)	生産地	備考
1	青釉碗	B区T420	S.M07	-	4.8	(2.5)	-	
2	瓷片碗	B区T420	S.M07	-	-	-	中国から	
3	瓷片碗	B区T420	S.M07	-	5.8	(4.2)	肥前	
4	瓷片碗	B区T420	S.M07	13.6	-	(4.8)	肥前	
5	陶瓦碗	B区T420	S.M07	-	5.1	(5.4)	肥前	
6	陶瓦碗	B区T420	S.M07	-	4.7	(1.8)	肥前	
7	輪花瓦	B区T420	S.M07	13.8	-	(2.0)	中国	
8	瓷片瓦	B区T420	S.M07	-	8.6	(2.5)	中国	
9	瓷片瓦	B区T420	S.M07	-	11.3	(2.7)	中国	
10	「崩瓦」大形	B区T420	S.M07	10.3	-	6.9	-	
11	「崩瓦」中形	B区T420	S.M07	10.2	-	4.1	8	
12	「崩瓦」小形	B区T420	S.M07	-	4.5	(1.2)	-	
13	「崩瓦」小形	B区T420	S.M07	-	6.0	(2.4)	-	
14	「崩瓦」底	B区T420	S.M07	7.2	5.9	1.4	-	
15	陶瓦大底	B区T420	S.M07	-	7.0	(6.2)	肥前	
16	陶瓦体	B区T420	S.M07	-	-	(8.9)	肥前	
17	陶瓦體	B区T420	S.M07	-	14.0	(7.9)	肥前	
18	鉢輪蓋	B区T420	S.M07	-	-	-	肥前	
19	陶器埋灰	B区T420	S.M07	-	-	(8.9)	-	
20	陶器埋灰	B区T420	S.M07	44.6	-	(17.4)	肥前	
21	瓦	B区T420	S.M07	-	-	-	-	
22	瓦	B区T420	S.M07	-	-	-	-	
23	瓦	B区T420	S.M07	-	-	-	朝鮮系	
24	平瓦	B区T420	S.M07	-	-	-	朝鮮系	
25	平瓦	B区T420	S.M07	-	-	-	-	
26	平瓦	B区T420	S.M07	-	-	-	-	
27	平瓦	B区T420	S.M07	-	-	-	-	
28	平瓦	B区T420	S.M07	-	-	-	-	

凸面には綾杉状や平行のタタキ痕が残る。また、凹面寄りに分割截面を確認できる。24は朝鮮系の平瓦。凹面に平行条線文、凸面には綾杉状のタタキ痕が残る。25～28は平瓦である。いずれも焼しは見られない。25は側面が残り、凹面・凸面とも丁寧にならでる。26は側面から先端部が残る。凹面は丁寧にならでるが、先端部にコビキBが残る。27は側面の平坦面を残す。28は先端部を残す資料で、凹面に敲打痕が認められる。

③SX08 (第52図)

B区7220 グリット3層上面で検出した。SS01に平行して北東—南西方向に伸びる落ち込みで、長



第60図 B区SX09遺構実測図 (S=1/40)

さ5.6m、幅3.8mである。西側はSX09に切られ、東側は調査区外まで延びる。SS01の項で述べたとおり、SX08はSS01を敷設する際に人为的に掘削された大型土坑と考えられる。埋土のうち、2層にぶい黄褐色玉砂利層（東壁土層の3d層）はSS01の下に敷設した基礎と考えられ、1層の円碟を多く含む暗褐色粘質土は、SS01構築後の埋土となる。

第54図は出土遺物である。1は龍泉窯系青磁碗の底部。高台疊付から内面は露胎とする。2は染付碗口縁部で、外面に発色のよい呉須で双葉文を連続して描く。明青花であろう。3は白磁の蓋物で急須であろうか。蓋の受け部のみ露胎とする。4は白磁小壺の底部。高台疊付のみ釉剥ぎして露胎と



第61図 C区 SX10出土遺物実測図 (S=1/3)

第23表 SX10出土遺物観察表

番号	遺物名	調査場所	遺物・層位	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	生産地	備考
1	陶器土瓶	CIS618	SX10	11.6	(5.4)	(5.4)	肥前	
2	陶器壺	CIS7018	SX10	9.4	(6.1)	(6.1)	肥前	

する。5は土師器壺底部。器壁が薄い一群であるが、摩滅が著しい。6は土師器皿。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は屈曲気味に直立し、口唇部は尖る。底部は糸切り後の板状痕が残る。内面は体部の立ち上がり付近を指で押さえている。胎土に褐斑を多く含み、口唇部に煤が付着する。7は瓦質の捕鉢口縁部。口縁部内面が三角形に突出する。以上の遺物は、1のように16世紀以前にさかのぼる遺物もあるもの、他はほぼ17世紀前半に収まる。

④SX09(第60図)

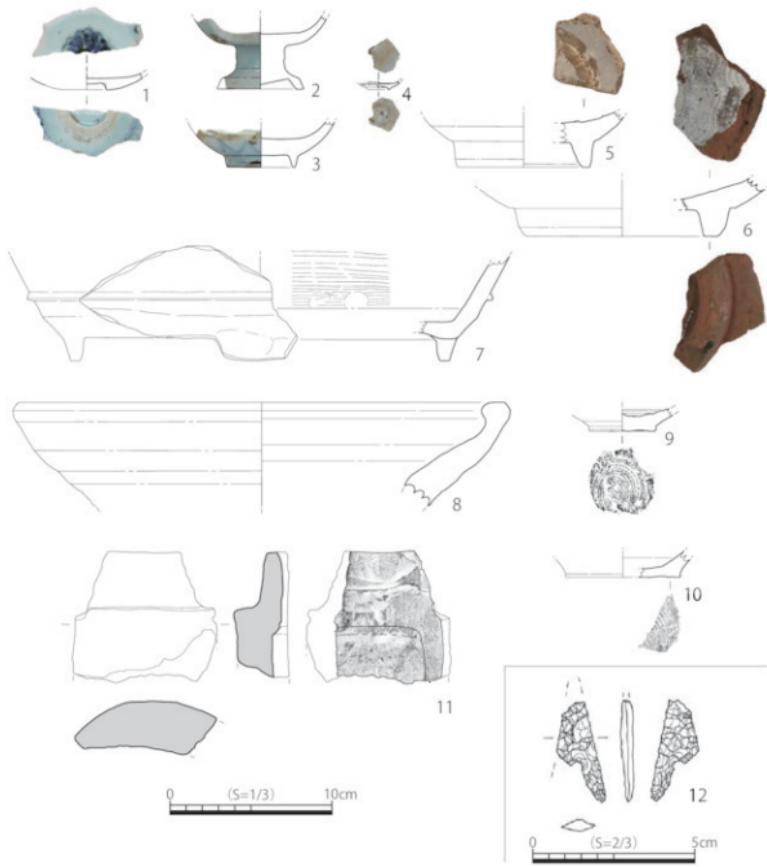
B区7220グリット3層上面で検出した。2.0×3.0mの長方形に近い落ち込みで、西側は調査区外に延びる。SX08やSS01を切る落ち込みで、完掘後にSK17を検出したことから、この土坑も切られている。埋土は2層に分層でき、1層は炭化物を含む黒褐色粘質土、2層は炭化物を含むにぶい黄褐色土で、いずれもややしまりが弱い。遺物は出土しなかったが、SX08やSS01、SK17の出土遺物から、およそ17世紀後半以降の落ち込みと考えられる。

⑤SX10(第17図)

C区6818グリット4層上面で検出した。長軸長1.3m、深さ0.2mの円形の落ちこみである。埋土は黒褐色砂質土。遺物は少ないが、2点を図化した(第61図・第23表)。1は土瓶。体部が屈曲しソロバン形になると思われる。外面には鉄軸が掛かるが内面は露胎となる。体部上半に直立する耳がつく。2は広口の壺か。肩の張った体部から口縁部が直立し、口唇部が外側に肥厚する。ロクロ成形で、外面から口縁部内面にかけて白化粧して透明釉をかける。これらは、土瓶の特徴から18世紀後半であろう。

(8) 包含層出土遺物(第62図)

1は染付皿。幕筒底で見込みに発色のよい呉須で花文を描く。明染付で景德鎮産であろう。2は仏飯具。器壁は厚く、高台内の削り込みは浅い。青みがかった透明釉が掛かるが、高台墨付から内面は露胎となる。3は染付碗底部。外面に二重網目文を描く。高台墨付は釉剥ぎして鉄錆を塗布する。18世紀前半の波佐見焼である。4は白磁紅皿底部。見込みは施釉するが高台は露胎である。体部外面に型押し成形時の線が放射状に確認できる。5は大皿底部で高台は露胎、見込みは輪状に釉剥ぎする。6は大皿底部で高台は露胎、見込みには白土をかけて刷毛目文様を描く。高台内面は深く削り、器壁



第 62 図 包含層出土遺物実測図 ($S=2/3 \cdot S=1/3$)



図版 18 包含層出土遺物

第24表 包含層出土遺物観察表

番号	遺物名前	調査地区	遺物・層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	生産地	備考
1	瓦片	A区2622集半	1層	—	—	—	中国	
2	瓦片	A区2622集半	1層	—	—	—	中国	
3	瓦片	Y区2718	1層(表面清掃)	—	—	—	中国	
4	瓦片	A区2622	瓦片貴賤積出 2層	—	—	—	中国	
5	瓦片大皿	Y区6816	1層	—	—	8.2	—	中国
6	陶器大皿	A区2622集半	1層(遺構検出)	—	—	11.6	—	肥前
7	大鉢	B区7220	表土削ぎ	—	—	23.2	—	肥前
8	陶器鉢	B区7420	(29)	—	—	—	—	肥前
9	土師器杯	A区2622	0層	—	—	4.1	—	
10	土師器杯	A区2622集半	0層(遺構検出)	—	—	3.5	—	
11	丸瓦	A区2622集半	1層(遺構検出)	—	—	—	—	

番号	器種	出土地区	層位	石材	最大長 [mm]	最大幅 [mm]	最大厚 [mm]	重量 [kg]
12	石鏡	B区1220	深面清掃	田螺石	31.0	15.0	4	0.90

は体部よりも薄くなる。18世紀代であろう。7は火鉢底部。胎土は精良で内面にはロクロによる横方向のハケメが残る。体部外面には細く低い突帯が1条巡り、底部には脚がつく。8は大型の鉢であろうか。分厚い器壁で外形する胴部から口縁部が湾曲しながら直立する。内外面とも露胎である。胎土には雲母・砂粒・黒色粒子のほか、褐斑も多く含む。9は土師器杯底部。器壁はやや薄く、底部は糸切りで、切り離し時の粘土がはみ出たまま残る。見込みにはロクロによる回転ケズリ成形時の凹凸を残す。10は土師器杯底部。底部は糸切りで、底部周辺はよくなっている。内外面ともロクロ成形時の凹凸をなで消す。11は焼した丸瓦。凸面に布目痕が残る。12は黒曜石製石鏡。漆黒色で脚の抉りが深い。

7. 自然科学分析

(1) 三城城下跡から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

①はじめに

大村市乾馬場町に位置する三城城下跡は、大村湾に注ぐ大上戸川中流域右岸の扇状地に立地する。日本初のキリスト教大名、大村純忠が居城していた三城城の城下町である。出土遺物は12世紀～13世紀に始まり、量的に中心となるのは15世紀後半～16世紀後半である。ここでは、17世紀初頭と17世紀代の遺構から出土した炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生について検討した。

②試料と方法

試料は、ピット（SP）12基と土坑（SK）2基から回収された水洗選別済みの14袋である。

遺構の時期は、SK01、SP01、SP05、SP07、SP30、SP32、SP162が17世紀初頭、SK12、SP06、SP16、SP21、SP28、SP37、SP188が17世紀代と推定されている。

試料の水洗および炭化物の抽出は長崎県教育庁によって行われた。フローテーション法により0.595mm目の篩を用いて浮遊選別がなされ、肉眼で炭化種実が抽出されていた。回収は浮遊物のみで、沈殿物は肉眼による観察で、種実が含まれていないと確認されていた。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。試料は、長崎県教育庁に保管されている。

③結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のマツ属複維管束亜属炭化葉の1分類群、広葉樹のモモ炭化核とムクノキ炭化核、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）炭化幼果、カキノキ炭化種子の4分類群、草本植物ではイボクサ炭化種子とツユクサ炭化種子、ヒエ炭化種子（穎果）、イネ炭化核・炭化種子（穎果）、アワ炭化種子（穎果）、オオムギ炭化種子（穎果）、コムギ炭化種子（穎果）、エンドウ属炭化種子、ササゲ属アズキ亜属（以下、アズキ亜属）炭化種子、マメ科A炭化種子、サナエタデーイヌイタデ炭化果実、イヌタデ属炭化果実、ヤエムグラ属炭化種子、イヌコウジュ属炭化果実の14分類群の、計19分類群が得られた（表1、2）。この他に、オオムギかコムギかの区別に必要な識別点が残存していない一群をオオムギ～コムギ炭化種子とした。科以上の詳細な同定ができない不明を不明A炭化種実としてタイプ分けし、同定可能な識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には炭化した虫えいと子嚢菌塊が得られた。

以下に、炭化種実の産出状況を遺構別に示す（不明炭化種実は除く）。

SK01：イネとオオムギ、オオムギ～コムギが少量、ツユクサヒエ、コムギ、エンドウ属、アズキ亜属、マメ科A、ヤエムグラ属がわずかに得られた。

SK12：イネとアワ、オオムギ、コムギ、ヤエムグラ属がわずかに得られた。

第25表 三城城下跡から出土した炭化種実(1) (括弧内は破片数)

	遺構	SK01	SK12	SP01	SP05	SP06	SP07	SP16
分類群	グリッド	7622	7220			7622		
	層位	3層	3層	3層	3層	3層	3層	3層
時期	17世紀初頭	17世紀代	17世紀初頭	17世紀初頭	17世紀代	17世紀代	17世紀初頭	17世紀代
マツ属複維管束亜属	炭化葉		(1)					
モモ	炭化核						(1)	
ムクノキ	炭化核						(1)	
カキノキ	炭化種子						(1)	
イボクサ	炭化種子				1			
ツユクサ	炭化種子	2						
ヒエ	炭化種子	3						
イネ	炭化種子	2 (9)	1 (1)	1 (1)	1 (2)	1	7 (6)	
アワ	炭化種子		1		(2)		1	
オオムギ	炭化種子	8 (7)	1	8 (3)	14 (8)	3 (1)	7 (4)	2
コムギ	炭化種子	7	3	2	1	1	14 (7)	
オオムギ-コムギ	炭化種子	(24)		(8)	(7)		(9)	
エンドウ属	炭化種子	1 (5)		3 (1)	1 (1)		6 (3)	
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子	(1)		(1)	(1)		1 (1)	
マメ科A	炭化種子	2 (1)					2 (3)	
サナエタデ-オオイヌ	炭化果実				1			
イヌタデ属	炭化果実				1			
ヤエムグラ属	炭化種子	4	1				1	
不明A	炭化種実	(1)						
同定不能	炭化種実	(107)	(4)	(37)	(21)	(8)	(165)	(5)
虫えい	炭化				(1)	1		
子糞菌	炭化子糞塊					1		

第26表 三城城下跡から出土した炭化種実(2) (括弧内は破片数)

	遺構	SP21	SP28	SP30	SP32	SP37	SP162	SP188
分類群	グリッド			7622			7018	
	層位	3層	3層	3層	3層	3層	3層	4層
時期	17世紀代	17世紀代	17世紀初頭	17世紀初頭	17世紀初頭	17世紀代	17世紀初頭	17世紀代
コソノ属アガシ亜属	炭化結果	1						
イボクサ	炭化種子		1					
ヒエ	炭化種子	1					11	
イネ	炭化穀			(1)				
オオムギ	炭化種子	2 (3)		2 (5)	(1)	(2)	2 (6)	1 (2)
コムギ	炭化種子	2 (1)		4 (1)	4 (3)	1	4 (7)	6 (1)
オオムギ-コムギ	炭化種子	1 (1)	1 (1)	2	2	3 (1)	3	1
エンドウ属	炭化種子	(3)	(7)	(9)	(6)	(4)		(6)
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子	6 (1)	(1)	1 (2)		1		(1)
マメ科A	炭化種子						1	
サナエタデ-オオイヌ	炭化果実						1	
ヤエムグラ属	炭化種子	2		1				
イヌコウジョ属	炭化果実						2	
同定不能	炭化種実	(12)	(14)	(35)	(16)	(22)	(25)	(12)

SP01 : オオムギが少量、マツ属複維管束亜属とイネ、コムギ、オオムギ-コムギ、エンドウ属、アズキ亜属がわずかに得られた。

SP05: オオムギが少量、イボクサとイネ、アワ、コムギ、オオムギ-コムギ、エンドウ属、アズキ亜属、サナエタデ-オオイヌ、イヌタデ属がわずかに得られた。

SP06 : イネとオオムギ、コムギが少量、モモとムクノキ、カキノキ、ヒエ、アワ、オオムギ-コムギ。

SP07: イネとオオムギ、コムギが少量、モモとムクノキ、カキノキ、ヒエ、アワ、オオムギ-コムギ、エンドウ属、アズキ亜属、マメ科A、ヤエムグラ属がわずかに得られた。

SP16 : オオムギがわずかに得られた。

SP21 : ヒエとイネ、オオムギ、コムギ、オオムギ-コムギ、エンドウ属、ヤエムグラ属がわずかに得られた。

SP28 : アガシ亜属とオオムギ、コムギ、オオムギ-コムギ、エンドウ属がわずかに得られた。

SP30：イボクサとイネ、オオムギ、コムギ、オオムギーコムギ、エンドウ属、ヤエムグラ属がわずかに得られた。

SP32：イネとオオムギ、コムギ、オオムギーコムギがわずかに得られた。

SP37：イネとオオムギ、コムギ、オオムギーコムギ、エンドウ属がわずかに得られた。

SP162：ヒエとオオムギが少量、イネとコムギ、エンドウ属、アズキ亜属、マメ科A、サナエタデーイオイタデ、イヌコウジュ属がわずかに得られた。

SP188：イネとオオムギ、コムギ、オオムギーコムギがわずかに得られた。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については、米倉・梶田（2003-）に準拠し、LAPG IIIリストの順とした。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* 炭化葉 マツ科

背面観・腹面観は狭長方形で、断面は半円形になる。背面と腹面の表面には縦方向に並んだ8～10本の気孔条がある。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが含まれる。残存長3.9mm、幅0.9mm。

(2) モモ *Amygdalus persica* L. 炭化核 バラ科

完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は梢円形で先が尖り、下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。残存高4.2mm、残存幅2.8mm。

(3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 炭化幼果 ブナ科

柱頭と臍が残存している。太い輪状文の柱頭を持つ果実のため、イチイガシ以外のアカガシ亜属である。高さ4.4mm、幅2.6mm。

(4) カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 炭化種子 カキノキ科

完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。基部がやや曲がり、突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。明らかに大型の果実であったと想定される種子をカキノキとした。残存長6.5mm、残存幅10.2mm。

(5) ヒエ *Echinochloa esculenta* (A. Braun) H. Scholz 炭化種子(穎果) イネ科

側面観は卵形、断面は片凸レンズ形で、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。長さ2.0mm、幅1.6mm。

(6) イネ *Oryza sativa* L. 炭化穀・炭化種子(穎果) イネ科

穀は完形ならば側面観が長梢円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長2.0mm、残存幅2.6mm。種子(穎果)の上面観は両凸レンズ形、側面観は長梢円形。一端に胚が残る。両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ4.8mm、幅3.0mm。

(7) アワ *Setaria italica* P. Beauv. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は梢円形、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い梢円形の胚があり、胚の長さは全長の2/3程度。長さ1.3mm、幅1.3mm。

(8) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は円形、側面観は長梢円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面は円形。長さ4.7mm、幅2.5mm、厚さ2.1mm。

(9) コムギ (パンコムギ) *Triticum aestivum* L.
炭化種子 (穎果) イネ科

上面観は円形、側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい形状である。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる。またコムギの場合、側面観で最も背の高い部

分 (幅の広い部分) が基部付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称しているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ4.0mm、幅2.6mm、厚さ2.2mm。

(10) エンドウ属 *Pisum* sp. 炭化種子 マメ科

球形に近い広楕円体。臍側はやや扁平。表面は平滑で、にぶい光沢がある。側面の全体に長楕円形の臍がある。臍の大きさは、全長の3/4程度。臍の中央には縦溝がある。長さ1.7mm、幅1.3mm。

(11) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna* subgenus *Ceratotropis* spp. 炭化種子 マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄ると推定されるが、残存していない。完形個体の大きさは、長さ5.0mm、幅3.7mm、残存厚3.3mm。計測可能な5点の大きさは、長さ2.8～5.0（平均3.6±1.0）mm、幅2.0～3.7（平均2.5±0.7）mm（表3）。小畠（2008）と比較すると、野生種のヤブツルアズキに近い大きさであった。

(12) マメ科 A *Fabaceae* sp. A 炭化種子

上面観・側面観共にやや角張った円形、表面は平滑。片側に全長の3/2程度の長さの臍がある。臍は倒卵形で厚膜。長さ3.2mm、幅3.1mm、厚さ3.0mm。

(13) イヌコウジュ属 *Mosia* sp. 炭化果実 シソ科

いびつな球形。下端部に着点がある。表面には多角形の網目状隆線がある。長さ1.3mm、幅0.9mm。

(14) 不明 A Unknown A 炭化種実

上面観は楕円形、側面観は倒卵形。表面は粗く、木質。長さ6.8mm、幅5.2mm。

④考察

17世紀初頭と17世紀代のピット(SP)12基と土坑(SK)2基から回収された炭化種実の同定を行った結果、すべての遺構から炭化種実が得られた。炭化種実のうち、栽培植物としてはモモとカキノキ、ヒエ、イネ、アワ、オオムギ、コムギ、エンドウ属が得られた。この他に食用可能な種実としてムクノキとアズキ亜属が得られた。なかでもムギ類が多く、穀類が複数種類あって得られた。アズキ亜属は、那須(ほか)(2015)の基準でいうと、完形個体1点が長さ5.0mm、幅3.7mm、残存厚3.3mmで野生種のヤブツルアズキに近い大きさであった。また、これ以外の破片も野生種の大きさであった。

オオムギやコムギのムギ類とイネなどの穀類と、エンドウ属やアズキ亜属などのマメ類に、さらにヤエムグラ属が伴う遺構が多かった。ヤエムグラ属の種子は食用にならないが、柔らかい葉を茹でて食する(長沢、2012)。

第27表 ササゲ属アズキ亜属炭化種子の大きさ

形状	長さ	幅	厚さ	出土遺構
半割	3.5	2.1		SK01
半割	3.0	2.2		SP01
半割	(3.0)	2.5		SP05
完形	5.0	3.7	(3.3)	SP07
半割	2.8	2.0		SP162
	最小	2.8	2.0	
	最大	5.0	3.7	
	平均	3.6	2.5	
	標準偏差	1.0	0.7	

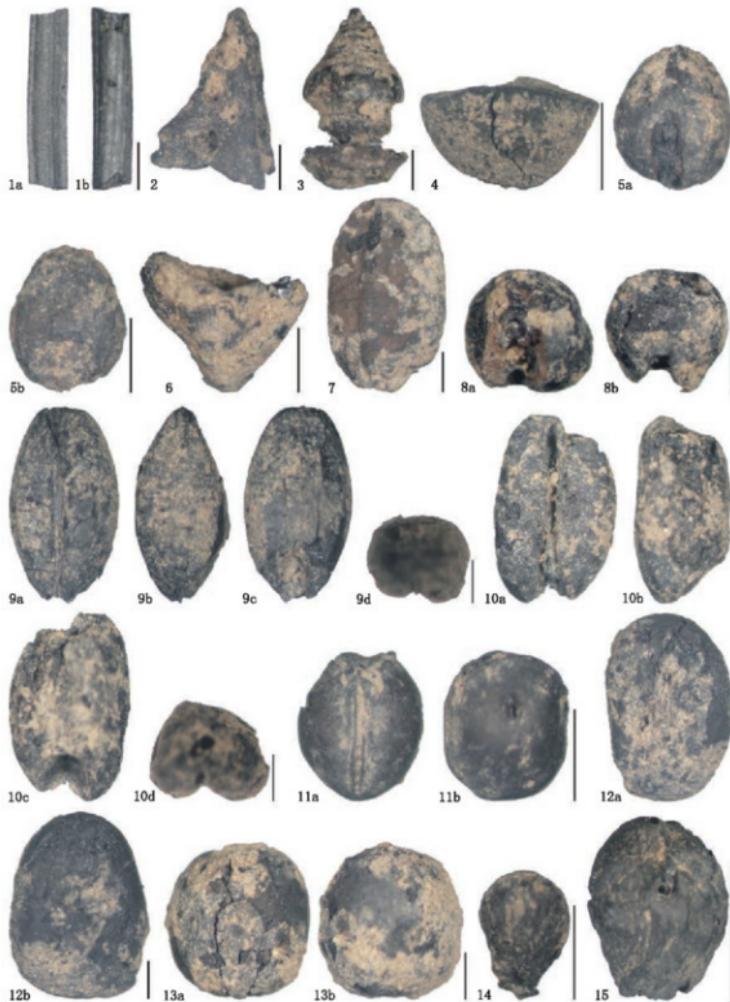
(括弧内は破片値、単位mm)

時期別に見ると、17世紀初頭のSK01、SP01、SP05、SP07、SP30、SP32、SP162の7基からいざれも炭化種実が得られた。イネとオオムギ、コムギが全ての遺構から、エンドウ属が6基、アズキ亜属が5基、マメ科Aとヤエムグラ属が各3基、ヒエとアワ、サナエタデー・オオイヌタデが各2基、これら以外は各1基から得られた。水田雑草であるイボクサなどは、イネに随伴して持ち込まれ、偶発的に炭化した可能性がある。草地に生育するイヌタデ属やイヌコウジュ属は産出数が少ないとため、偶発的に炭化した可能性がある。木本植物は栽培植物のモモやカキノキ、食用可能なムクノキがわずかに産出するのみで、森林要素はほとんどなかったと推定される。アカマツかクロマツであるマツ属複維管束亜属の葉も出土しているが、焚付けなどに集められた可能性がある。

17世紀代と推定されているSK12、SP06、SP16、SP21、SP28、SP37、SP188の7基からも炭化種実が得られた。オオムギが全ての遺構から、コムギが6基、イネが5基、エンドウ属が3基、ヤエムグラ属が2基、これら以外は各1基から得られた。全体的な傾向は、17世紀初頭の遺構から得られた炭化種実の組成に類似するが、17世紀初頭の遺構から頻繁に産出したアズキ亜属とマメ科Aは得られなかつた。また木本植物はSP28から得られたアカガシ亜属以外全く得られなかつた。この違いは時期差を反映している可能性もある。いずれにせよ、多種類の栽培植物が遺構内に炭化して堆積する状況が確認できた。

引用文献

- 長沢 武 (2012) 野外植物民俗事苑. 443p, ほむぎ書籍.
那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・奥石 甫 (2015) 炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用. 資源環境と人類5: 37-52.
小畠弘己 (2008) マメ科種子同定法. 小畠弘己編「極東先史古代の穀物3」:225-252, 熊本大学.
米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>



スケール 1-3, 5-14:1mm, 4, 15:5mm

1. マツ属複維管束亞属炭化果 (SP01、3層) 、2. モモ炭化核 (SP07、3層) 、3. コナラ属アカガシ亜属炭化幼果 (SP28、3層) 、4. カキノキ炭化種子 (SP07、3層) 、5. ヒエ炭化種子 (SP162、3層) 、6. イネ炭化穂 (SP30、3層) 、7. イネ炭化種子 (SP07、3層) 、8. アワ炭化種子 (SP07、3層) 、9. オオムギ炭化種子 (SP32、3層) 、10. コムギ炭化種子 (SP30、3層) 、11. エンドウ属炭化種子 (SP30、3層) 、12. ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (SP07、3層) 、13. マメ科A炭化種子 (SP162、3層) 、14. イヌコウジュ属炭化果実 (SP162、3層) 、15. 不明A炭化種実 (SK01、3層)

図版 19 三城城下跡から出土した炭化種実

III まとめ

1 遺構群の変遷と性格

(1) 遺構群の変遷

今回の調査で検出した掘立柱建物群を主体とする遺構群は、出土遺物の様相および切りあい関係から、およそ4期に分けられる（第63図）。以下詳述するが、大村氏に関する略年表を第28表にまとめたので、適宜参照されたい。

① 16世紀以前

A区SA01が該当する。遺物は出土しなかったものの、16世紀末以降のピット群に切られることから、16世紀以前の遺構と判断した。調査区の東側に一部現存する東西に伸びる土壙の基礎もしくは堀の一部と考えたが、1540年代の「大村館小路割之図」にはSA01の位置に地割はない（図版20）。また、「大村館小路割之図」に記載された「千乘院」は、『大村郷村記』によれば、大村純伊の頃（長く見積もって1492—1523年）に太良嶽山金泉寺の里坊として定められた。これらの点から、SA01は15世紀末以前に屋敷を区画していた土壙の一部で、千乘院の成立により破壊されたと推測される。

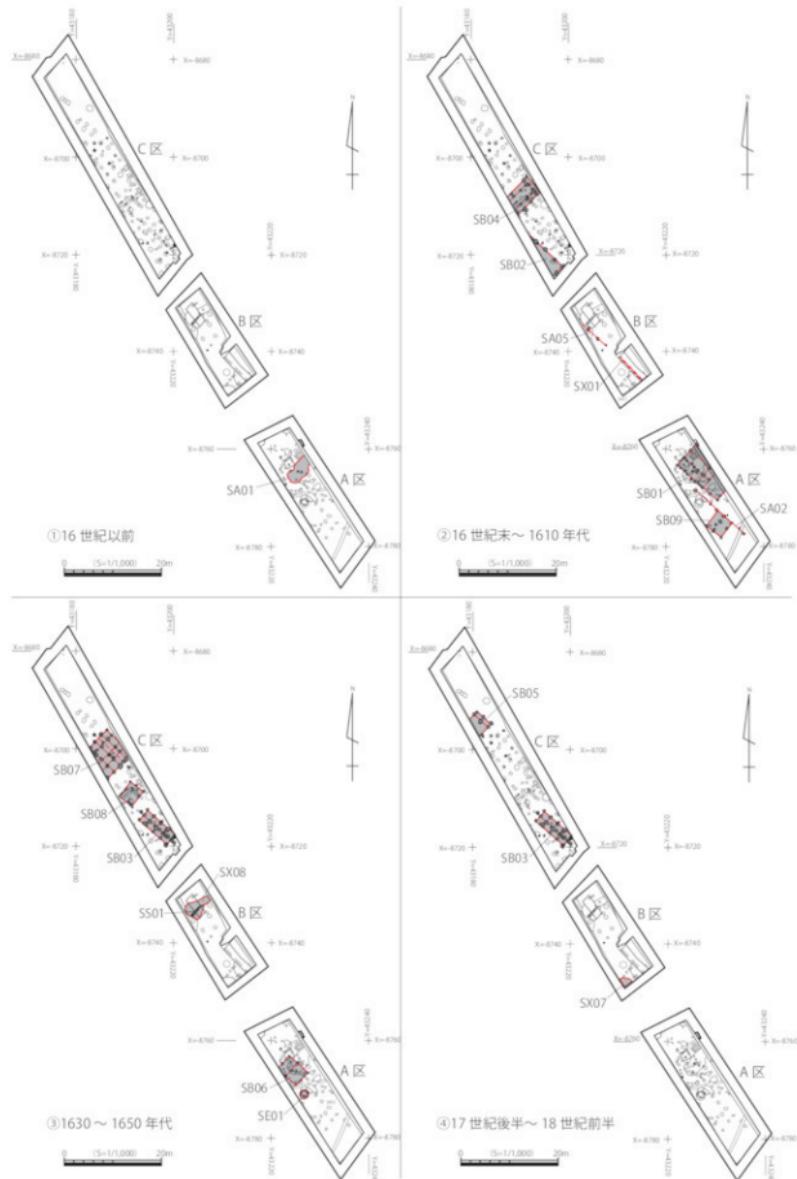
② 16世紀末～1610年代

A区SA02・SB01・SB09、B区SX01・SA05、C区SB02・SB04が該当する。SB01・SB02・SA05は、柱穴内出土遺物が唐津焼と明染付の磁器、土師器で構成され、初期伊万里を含まないことからこの時期と考えた。SB04はSB08との切り合い関係から相対的に古く、柱穴内出土遺物が滑石製石鍋と土師器皿があることからこの時期とした。また、SB01と主軸を同じくし、SB06との切り合いから古く位置づけられるSA02及びSB09もこの時期と捉えた。

掘立柱建物と柵列、溝状遺構で構成され、主軸は北西—南東方向に揃う。北側を通る「犬ノ馬場」に合わせて、垂直・平行に遺構を配している。柱穴内に礎盤石をほとんど持たない。これらは、1574年の寺社焼き討ちによる千乘院・萬乗院の破却から、1623年長久寺建立までの遺構群と考えられるが、出土遺物等からその性格は特定できない。

③ 1630～1650年代

A区SB06・SE01、B区SS01・SX08、C区SB03・SB07・SB08が該当する。出土遺物に明染付の磁器や唐津焼に加えて、初期伊万里の磁器や青磁を含むことから、この時期と考えた。B区SX08及びSS01は造成に伴う遺構群で、B区北端部のかさ上げ造成のための土留め遺構であろう。SS01以北のC区では、桁行4間の比較的大型の総柱建物（SB03・SB07）と、桁行2間の小規模な側柱建物が軸をそろえて建てられる。主軸は「犬ノ馬場」に整然とそろえる。柱穴内には扁平な円錐を礎盤石として据えたものが多く、SB03では五輪塔の笠を礎盤石に転用した例も見つかっている。A区では井戸（SE01）でこの時期を主体とする陶磁器類が大量に見つかった。初期伊万里や明染付、唐津などの碗・皿類に加えて、灯明皿に使ったと思われる大量の土師壺、茶釜の可能性がある瓦質土器、手水鉢の可能性がある片口の石製容器といった特徴的な遺物が出土している。これらの遺構群は、1623～1660年の長久寺の時期に符合する。なかでも、C区の大型総柱建物はこの寺に関わる建物遺構の可能性が高く、井戸（SE01）出土遺物の特徴もこれを裏付ける。また、造成に伴う土木工事（SS01・SX08）も、長久寺の成立と関連するものであろう。SE01では17世紀後半以降の遺物が出土しておらず、



第 63 図 遺構群の変遷 (S=1/1,000)

長久寺の移転時（1660年）に廃絶し、埋められたと考えられる。

④ 17世紀後半～18世紀前半

B区SX07、C区SB03・SB05が該当する。C区の掘立柱建物は、「犬ノ馬場」に主軸を合わせて配置される。SB03は、棟持柱と考えられるSP128の礎盤石脇に、18世紀まで下る植木跡が2個体分割り置かれていって、この時期まで柱の立替えを行いつつ存続したものと考えられる。B区SX07は17世紀中頃の陶磁器類を含む廐棄土坑であるが、雲竜荒磯文の染付碗を含むことから、17世紀後半まで存続したと考えられる。

この時期の三城城下跡については、1599年玖島城築城と城下町の整備、および1660年長久寺が宝円寺に習合された後であり、管見の限り文献ではこの地域の状況を明らかにしえないが、絵図では「肥前国彼杵郡之内大村領絵図 元禄十三年辰正月」（以下「元禄大村領絵図」）が注目される（図版21）。元禄13（1700）年作成で、長久寺が三城城下跡から移転して40年後の絵図である。大上戸川とその支流である藤の川が描かれるほか、「大村館小路割之図」に描かれた街路もそのまま描写される。また、1602年に復興した本経寺や富松神社の位置には、「寺」の表記がある。今回の調査地点に該当する大上戸川と藤の川の合流地点に注目すると、「寺」の表記がみえる。このことは、長久寺が宝円寺に習合した後も、寺の施設の一部が三城城下に残っていた可能性を示唆する。C区SB03は17世紀前半から18世紀前半まで存続していた可能性が高いことは、この推測を裏付ける調査成果といえるだろう。

（2）建物構造の特徴

中世から近世の民家は、掘立柱建物から礎石建物への移行期であり、この移行時期には地域差があることや、城館や都市、農村といった集落の性格や建物の種類による時期差も指摘されている（浅川・箱崎編2001）。今回の調査成果で検出した建物遺構はいずれも掘立柱建物であったが、16世紀末～17世紀初頭の掘立柱建物は柱穴内に礎盤石をもたず^a、17世紀中頃～18世紀前半の掘立柱建物には礎盤石を据えるものが多い傾向を指摘できる。このことから、掘立柱建物から礎盤石を伴う掘立柱建物を介して、礎石建物へ移行する可能性も考えたが、玖島城跡では、17世紀初頭の掘立柱建物2棟がいずれも礎盤石を伴うことや、諫早領ではあるが17世紀末まで遡る可能性のある重要文化財本田家住宅は礎石建物であることなどを踏まると、それほど単純ではないらしい。現状では、大村領では18世紀初頭までは確実に掘立柱建物が残っていること、その中で軟弱地盤や建物の性格（寺院関連の遺構など）に応じて礎盤石を採用したことが指摘できる。礎石建物への移行は、上部構造の変化と連動していることも指摘されており、この点では瓦の出土状況にも注意すべきだろう。今後の課題である。

また、17世紀中頃のC区SB03・SB07は、棟木の延長上で妻の外側にピットが並ぶ特徴がある。これらは棟持柱の可能性がある。棟持柱を持つ建物は、大阪府池上曾根遺跡をはじめとする弥生時代中期からあり、現在でも伊勢神宮や出雲大社等の神社本殿の一部に残っている。近世の寺社建築のうち、棟持柱を持つ建物を悉皆的に検討した研究によれば、門を主体に、神社本殿や拝殿などに採用される例を全国で確認できる（滝澤・土本2012）。SB03・SB07は1623～1660年の長久寺に関連する施設と考えられ、このような観点から構造的な追求が必要であろう。



※1541～1551年頃の絵図(元禄5(1692)年改訂図)

※調査地点には「萬乗院」「千乘院」の表記が見える。



図版20 「大村館小路割之図(土屋屋家資料)」写真

大村市立史料館所蔵

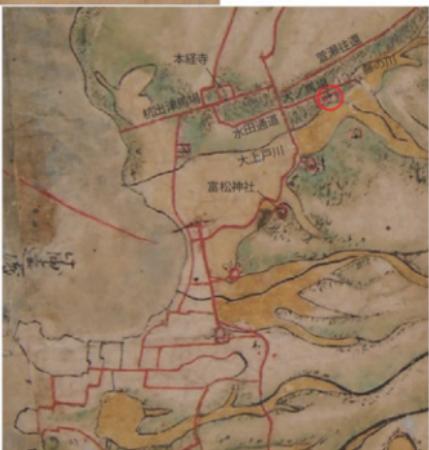
第28表 大村氏略年表(16世紀後半～17世紀前半)

大村地域の動向	三城城下周辺の動向
1554 大村純忠が家督を相続。	1534 大村館からの出火により町焼失。
1562 横瀬山開墾。	1564 三城城築城。
1563 大村領受洗。キリストン大名となる。	1568 「御やどりの教会」建設。
1563 横瀬山焼き討ち。	1570 三城城内に教会あり。
1565 福田開港。	1572 後輝(武雄)・松浦(平戸)・西郷(伊佐早)による三城城攻撃(三城七騎龍)。
1571 長崎開港。	「御やどりの教会」焼失。
1574 キリシタンによる寺社焼き討ち。	1574 千乘院・萬乗院破壊。 宝生寺をキリストン施設に転用。宝生寺境内に領内最大の教会建設。
1576頃 領内一斉改宗。	1602 富松神社・本經寺再建。
1580 長崎・茂木をイエズス会に譲渡。	1623 長久寺建立。
1587 大村純忠死去。	1660 長久寺を宝円寺に習合。
1587 豊臣秀吉により伴天連追放令発布。 長崎・茂木・浦上を没収。	
1592 朝貢出兵。	
1599 久島城築城。	
1606 大村喜前仏教に改宗。	
1614 吴天宮再建。	
1657 郡崩れ。	



※元禄 13(1700) 年作成。

※「大村館小路割之図」に描かれた「犬ノ馬場」「
「萱瀬往還」「水田通道」「杭出津馬場」などの
街路が、ほぼそのまま描かれる。
※大上戸川とその支流である勝の川が描かれる。
※現在の本經寺や富松神社とともに、今回の調査区
に「寺」の表記がある（右繪赤丸部分）。



図版 21 「肥前国彼杵郡之内大村領絵図 元禄十三年辰正月」写真

長崎歴史文化博物館所蔵

2 出出土師器の検討

今回の調査では、肥前陶磁や輸入陶磁に混じって、大量の土師器が出土した。近世初頭の土師器については大村地域ではあまり注目されていないが、玖島城跡出土土師器（川口編2002）を含めると、壺を中心に分類可能であることが分かってきた。ここでは浅学を省みず若干の検討を行う。

(1) 分類

今回出土した土師器および玖島城跡出土土師器は、壺が大多数を占め皿はごくわずかであった。そのため、壺を対象に、成形・調整技法や厚さに着目して、以下のように分類する（図版22）。

壺A：体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内面あるいは外面上に回転ケズリの痕跡を残す。比較的薄手のつくりで、底部は凸状をなし、糸切り離し時の粘土のはみ出しが残るものが多い。

壺B：体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともなで調整で、回転ケズリの痕跡はない。比較的厚手のつくりで、底部周辺はきれいになでていて、糸切り離し後の粘土のはみ出しが残らない。

壺C：不安定な平底から体部が斜めに立ち上がる。底部は丁寧なヘラケズリで、見込み外周には沈線が巡る。底部は黒灰色、体部から口縁部は黄白色で胎土は精良。三城城下跡の調査では出土していないが、玖島城跡でわずかに出土しているため、一応分類に加えた（第66図54～56）。

(2) 大きさ

第64図に口径・底径・高さの相関グラフを示した。壺Aは口径10.0cm～12.6cmを中心に分布し、さらに10～11cmと11～12.5cmに二分できそうである。壺Bは8.8～10.6cmを中心に分布し、壺Aとは分布が重なりながらも全体的に小型に偏る。壺Cは口径11～12.4cmに分布するが、壺Aと比較して底径が7cm以上と大きく、明確に分離できる。底径は、壺Aが4.0～6.4cmを中心に、壺Bは4.4～5.8cmを中心に分布する。高さは、壺Aは2.7～3.6cmを中心とし、壺Bは3cm台でまとまる。壺Cは1.6～2.9cmで、ABに比べて低い。以上、法量の検討からは、各類型の違いが口径に最も反映されることが分かる。

(3) 出土状況

①三城城下跡A区 SB01

今回の調査で検出した掘立柱建物である（第22図）。柱穴内から胎土目積みの唐津焼碗や内湾気味で口唇部が尖り気味の土師器皿とともに、壺Aが出土している（第24図）。初期伊万里を含まず、下限は17世紀初頭（1610年代頃）と推測される。

②三城城下跡A区 SE01

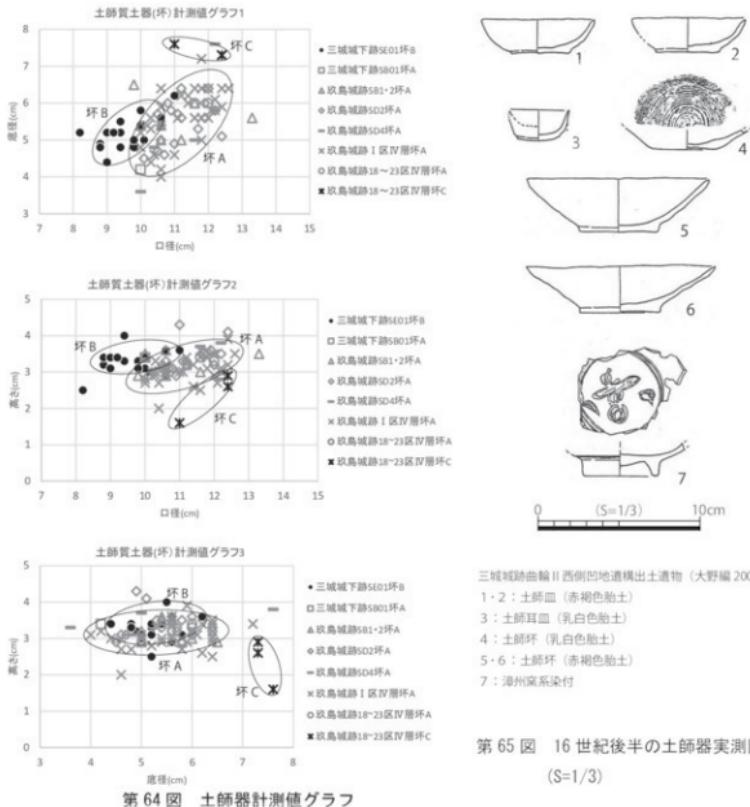
今回の調査で検出した井戸である（第45図）。貿易陶磁や初期伊万里とともに、壺Bが主体的に出土している（第48図～第49図）。土師器皿はほとんど含まない。1660年の長久寺廃絶に伴って廃絶したと考えられる。

③玖島城跡SB1・SB

いずれも掘立柱建物である。切り合い関係からSB01→SB02の順に構築されるが、出土遺物から



図版 22 三城城下跡出土土師器壺の二者

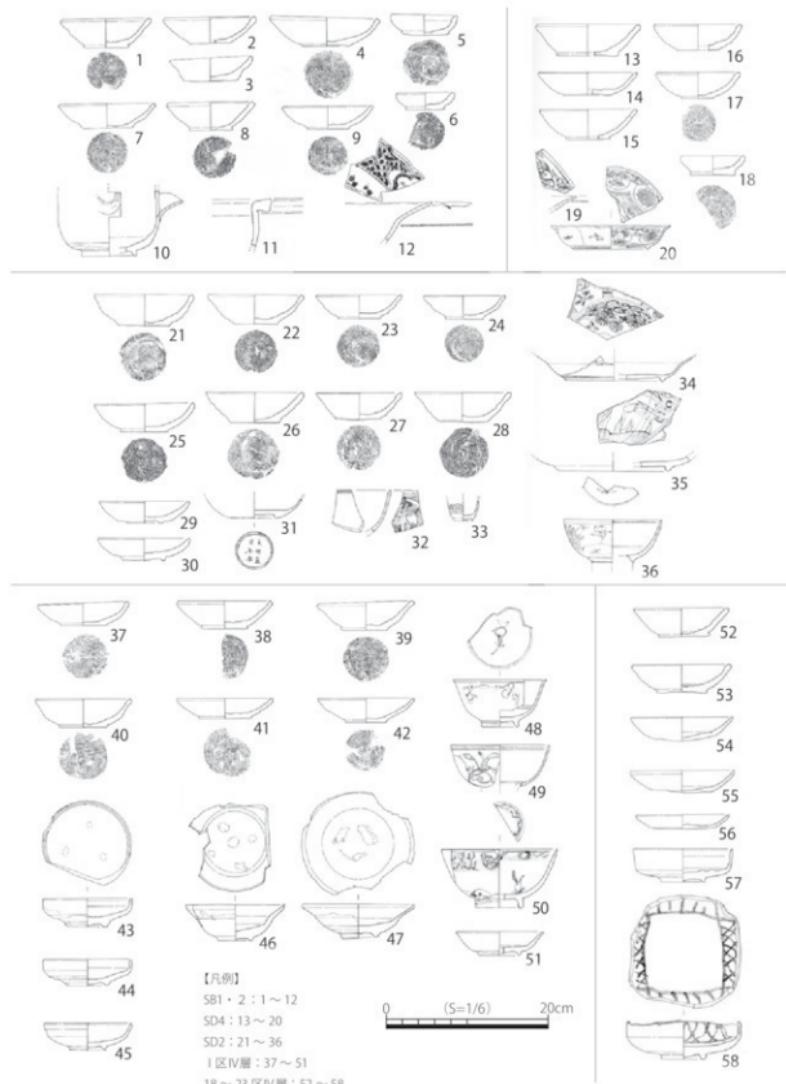


第 64 図 土師器計測値グラフ

三城城跡曲輪 II 西側凹地遺構出土遺物 (大野編 2005)
 1・2：土師皿（赤褐色胎土）
 3：土師耳皿（乳白色胎土）
 4：土師环（乳白色胎土）
 5・6：土師环（赤褐色胎土）
 7：津州窯系染付

第 65 図 16世紀後半の土師器実測図

(S=1/3)



第 66 図 坂島城跡出土土師器実測図 ($S=1/6$)

はほとんど時期差はない。唐津焼や中国産の青花、体部が湾曲する小型の土師器皿とともに、坏Aが出土している（第66図1～12）。出土遺物は唐津焼の年代が大橋編年Ⅰ期で、玖島城跡は1599年築城であることから、17世紀初頭と考えられる。

④玖島城跡 SD2

幅1.2m、深さ0.5mで東西に伸びる溝状遺構である。胎土目積みの唐津焼や景德鎮系青花、漳州窯系皿などとともに、坏Aがまとまって出土している（第66図21～36）。肥前磁器（初期伊万里）がみられないことから、17世紀初頭（下限は1610年代）と推測される。

⑤玖島城跡 SD4

溝状遺構である。景德鎮系の型押しの稜花皿や漳州窯系の皿とともに、坏Aが出土している（第66図13～20）。肥前磁器が見られないことから、17世紀初頭（下限は1610年代）と考えられる。

⑥玖島城跡 I区VI層

炭化物を含む包含層で、SB1・SB2の建替えに伴って形成された包含層と推測されている。遺物は小野分類C群の青花や国産磁器（初期伊万里）など前後する時期の遺物を少量含むものの、17世紀初頭の陶磁器が主体である。土師器は坏Aがまとまって出土している（第66図37～51）。

⑦玖島城跡18～23区VI層

華南三彩や景德鎮系の小坏、ベトナム長胴壺、唐津焼などとともに坏A、坏Cが出土している（第66図52～58）。坏Cは諫早市沖城跡、島原市森岳城跡に類例がある。唐津焼が大橋編年Ⅰ期で、17世紀初頭である。

（4）若干の検討

以上の検討から、坏Aと杯Bには時期差があり、前者は17世紀初頭（下限は1610年代）、後者は17世紀中頃（1630～50年代）を考えることができる。この間の土師器の変化は、口径にみる小型化と、ケズリ調整の省略に伴って器壁が厚くなる点にある。また、坏Cは17世紀初頭で坏Aに伴う。

16世紀後半の土師器と比較すると、器種構成の変化に特徴がある（第65図）。16世紀後半の土師器は、底部から外湾気味に立ち上がる坏、内湾気味に立ち上がる坏や皿で構成されるが、17世紀初頭までに外湾気味に立ち上がる坏が欠落し、皿は少量残るもの17世紀中葉にはほぼ欠落する。三城城下跡SE01出土の坏Bは、かなりの頻度で内面や口縁端部に煤の付着が認められ、玖島城跡の坏Aでも同様の指摘がある。このことから、17世紀以降の坏A・Bは、灯明皿としての利用が主体であったと推測できる。中世の土師器は、日用品の食器としての用途のほか、儀礼的な用途まで多岐にわたることが明らかになっているが（例えば鈴木2002）、近世には儀礼的用途が欠落し、特定の用途（たとえば灯明皿）に収斂する可能性が指摘されており（中井2011）、大村地城も同様の傾向を示しているのかもしれない。16世紀以前の土師器からの流れや他地域との比較、特に坏Cの位置づけや京都系土師器の問題など課題は多いが、今後も注目していきたい。

【参考文献】

- 浅川滋男・箱崎和久編2001『埋もれた中近世の住まい』奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 同成社
大野安生編2005『三城城跡範囲確認調査報告書』大村市文化財調査報告書第29集 大村市教育委員会
大橋康二1993『肥前陶磁』ニューサイエンス社
大村市史編纂委員会編2014『新編大村市史』第二巻（中世編）大村市
川口洋平編2002『玖島城跡』長崎県文化財調査報告書第167集 長崎県教育委員会
鈴木康之2002「中世土器の象徴性—「かりそめ」の器としてのかねらけ—」『日本考古学』第14号 日本考古学協会
滝澤秀人・土本俊和2012「近世寺社建築調査報告書集成にみえる棟持柱をもつ建築遺構の特質」『日本建築学会計画系論文集』第77卷 第682号
中井淳史2011『日本中世土器の研究』中央公論美術出版社

報 告 書 抄 錄

ふりがな	さんじょうじょうかあと							
書名	三城城下跡							
副書名	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	VIII							
シリーズ名	新幹線文化財調査事務所調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	中尾篤志・新久保恒和・堀内和宏							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市尾上町3番1号 TEL095-824-1111							
発行年月	西暦2018年3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	○分	○分		m ²	
三城城下跡	長崎県 大村市 乾馬場 町 905番地 5他	42205	5-203	32° 55' 15"	129° 57' 42"	20160525～ 20160826	1,470	九州新幹線 西九州ルート (長崎ルート)の路 線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
三城城下跡	包含地 屋敷跡	江戸時代	掘立柱建物跡 柵列 井戸		陶磁器・石製品 ・金属器・瓦	17世紀初頭～中頃 にかけての掘立柱 建物群を検出した。 建物は中世から 残る街路に沿って 整然と並ぶことが 分かった。また、井 戸を中心に初期伊 万里を中心とした 陶磁器が多数出土 した。		

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第8集
九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書VIII

三城城下跡

平成30(2018)年3月発行

発行者 長崎県教育委員会

〒850-8570 長崎市尾上町3番1号

TEL 095-824-1111

印刷所 第一印刷株式会社

長崎県大村市協和町774番地1

TEL 0957-53-5111